福岡市博多区

博多 73

博多遺跡群第113次調査の概要

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第631集

2000

福岡市教育委員会

博多７３

博多遺跡群第１１３次調査の概要

正　誤　表

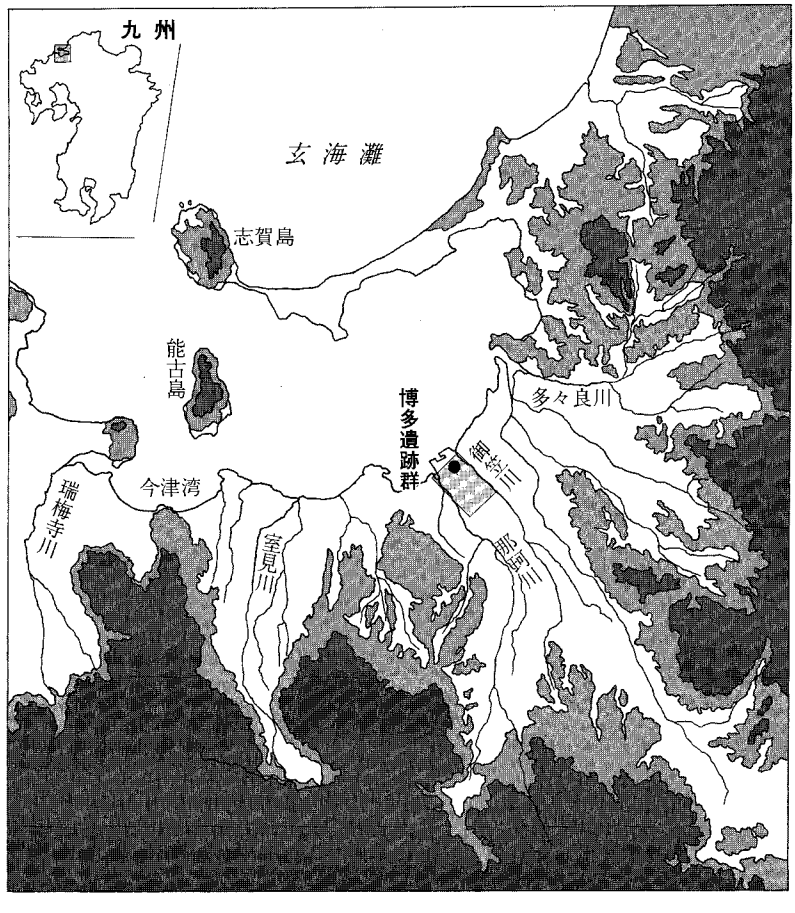
ページ	行・Ｆｉｇ	誤	正
１０	Ｆｉｇ．７	（Ｂ－４グリッド）ＳＸ１６	ＳＸ０６
１５	Ｆｉｇ．１５	（遺構内）ＳＸ２５	ＳＸ０３
２３	１２行目	青磁	陶器
	Ｆｉｇ．２９	Ｅ１３	Ｅ３
２５	２２行目	青磁	陶器
２８	２行目	Ⅰ区	Ⅱ区
４４	３１行目	１９本	１９組
	最終行	Ｈ４８	Ｈ４７
	Ｆｉｇ．６４	Ｈ４７（ＳＸ１０）	Ｈ４７（ＳＫ１０）
５５	最終行	さや	さな
５６	２行目	Ｈ６７	Ｈ６１
		さや	さな
５８	Ｆｉｇ．８６	Ｂ２２（トレンチ）	Ｂ２２（ＳＰ１８）
	１７行目	１２．４×４．３㎝	６．４×２．６㎝

福岡市博多区

博　多　73

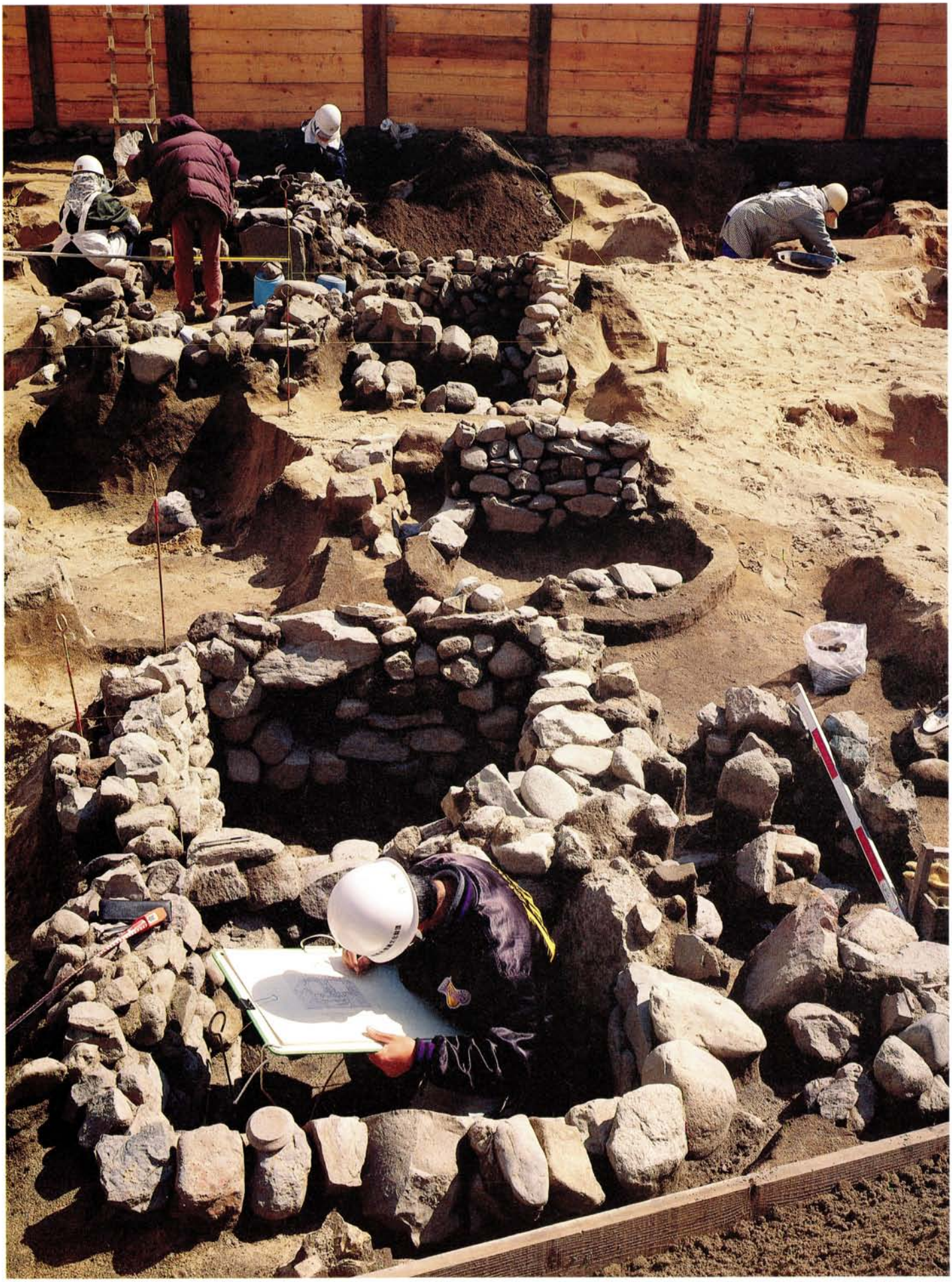
博多遺跡群第113次調査の概要

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第631集



平成12年

福岡市教育委員会



石積土壙の調査

序　文

福岡市は、筑前黒田藩の城下町であった「福岡」と、商業地域であった「博多」が一緒になった双子都市ですが、海に面した地理的位置から、弥生時代以来、大陸文化の門戸として繁栄してきました。特に奈良時代に迎賓館である鴻臚館が設置され、アジア各地の人の往来だけでなく、遠くイスラム世界からも文物がもたらされ、「国際貿易都市」としての地位を築いてきました。

現在も、ドーム球場、大型商業ビルやホテル、そして劇場などの建設が相次ぎ、活力ある近代都市として21世紀に向けて飛躍を続けています。

しかし、これらの開発行為は、地下に眠る埋蔵文化財を破壊することになり、先人たちが私たち現代人に残してくれた貴重な歴史、文化的遺産が、失われることになります。このようにやむなく遺跡が失われる場合は、将来にわたって記録を保存するために発掘調査を行っています。

本書は、博多区下呉服町で実施した博多遺跡群第113次調査の発掘調査報告書です。第113次調査では、江戸時代の石積土壙、井戸などの遺構から陶磁器や銅銭など多様な遺物が発見され、これらから当時の町筋だけでなく、町人たちの日々の暮らしぶりを、具体的に想像できるようになりました。なかでも銅製品を鋳造したと思われる坩堝（るつぼ）の発見は、調査地点の旧町名「鏡町」と関係すると考えられ、注目されます。

調査から整理、報告に至るまで、さまざまな面でご協力をいただきました栗林工業株式会社、大林組をはじめとして、多くの方々に、心から感謝申し上げます。また、本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究の資料としても活用いただければ幸いです。

平成12年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　西　憲一郎

現在の博多（海にのびる太博通り）

例言・凡例

1．本書は、福岡市博多区下呉服町2-29の事務所ビル建設工事に先だって実施した発掘調査の報告書です。

2．発掘調査は、平成11年2月1月から4月26日まで行った。博多遺跡群では第113次調査に当たる。

3．検出した各遺構は、発掘作業では次のような遺構略号をつけているが、本書では遺構名と併記してSX01石積土壙、SE01井戸のように表している。

SX	石積土壙	SD	溝	SE	井戸
SK	土壙	SP	ピット、柱穴		

4．本書の編集と撮影は力武が当たったが、発掘現場での遺構実測、および整理・報告書作成での遺物実測と作図、原稿執筆は、羽方誠、北村幸子調査員の3人で分担した。

5．遺物は種類別に次の頭文字をつけ、通し番号とした。また、種類がわかるように遺物実測図の断面の表示を次のように区別している。なお、遺物の図、写真縮尺は基本的に1/3に統一している。

土師器・瓦質土器		H	薄い網点
磁　器（青磁・白磁・色絵）		J	白抜き
陶　器		T	濃い網点
瓦　類		K	黒ベタ
石製品		S	右斜線
金属器	B　ガラス・その他	E	白抜き

6．金属器のクリーニングや保存処理、分析などは、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏の指導のもとに、北村幸子調査員が行い、その結果報告を、福岡市埋蔵文化財センターの片多雅樹氏にお願いした。

7．今回の発掘調査によって出土した遺物と実測図、写真などの記録類は、福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田2-1-9　☎092-571-2921）に、収蔵、保管されるので活用をお願いします。

8．各頁の肩の写真は、昭和53年以来、博多遺跡群の発掘調査を担当するたびに、昼休みを利用して裏通りや博多の年中行事などを撮影したものである。すでに17年が経過し、博多は大きく変貌を遂げた。現代博多の歴史の一コマとして参考になれば幸いです。

9．表紙題字は、福岡県文化財保護審議会委員であった故筑紫豊先生より、昭和51年に作成した「地下鉄と文化財」の小冊子の題字「博多を掘る」としていただいたものです。

本文・挿図目次

第１章　はじめに

１．調査にいたるまで……1
２．発掘調査の組織と構成……1

第２章　発掘調査の記録

１．博多遺跡群と最近の調査……2
　3　遺跡周辺の風景　4　博多遺跡群の発掘調査地点と砂丘
　5　周辺の発掘調査地点

２．発掘調査と資料整理……8
　6　発掘作業風景

３．遺構と遺物
　１．土　壙……12
　石積土壙
　7　１面の遺構配置図　8　２面の遺構配置図　9　SX01石積土壙実測図
　10　遺物実測図　11　遺物実測図　12　SX02石積土壙実測図
　13　SX02石積土壙　14　遺物実測図　15　SX03石積土壙実測図
　16　遺物実測図　17　SX04石積土壙　18　SX04石積土壙
　19　SX04石積土壙実測図　20　遺物実測図　21　SX05石積土壙実測図
　22　SX05石積土壙　23　積み石に転用された石臼　24　遺物実測図
　25　SX06石積土壙実測図　26　掘り下げ前　27　掘り上げ後
　28　掘り下げ作業　29　遺物実測図　30　SX07石積土壙　31　SX08石積土壙
　32　遺物実測図　33　SX09石積土壙実測図　34　SX09石積土壙
　35　遺物実測図　36　SX10石積土壙実測図　37　遺物実測図
　38　SX11石積土壙実測図　39　遺物実測図　40　SX12・16石積土壙実測図
　41　SX12・16石積土壙　42　遺物実測図　43　釜（H26）
　44　SX13石積土壙実測図　45　遺物実測図　46　SX14石積土壙
　47　遺物実測図　48　SX15石積土壙実測図
　49　SX15石積土壙　50　遺物実測図　51　SX17・18・19石積土壙実測図
　52　遺物実測図　53　遺物実測図　54　SX20～23・25石積土壙実測図
　55　SX24石積土壙実測図　56　SX24石積土壙　57　遺物実測図

　瓦溜め土壙……40
　58　SK08瓦溜土壙実測図　59　土瓶（T16・T17）　60　遺物実測図
　61　遺物実測図

素掘り土壙……43
62　SK04土壙実測図　63　遺物実測図　64　遺物実測図　65　遺物実測図
66　遺物実測図　67　遺物実測図　68　瓦（K４・５）・染付皿（J48・49）

動物骨・貝殻土壙……48
69　SK33動物骨土壙実測図　70　SK33動物骨土壙　SK34貝殻土壙
71　遺物実測図

2．井　戸……49
72　SE01井戸　73　SE01井戸実測図　74　SE02井戸実測図
75　遺物実測図　76　SE03井戸　77　SE03井戸　78　SE03井戸実測図
79　遺物実測図　80　磁器（J54・57・58）、陶器（T22）
81　遺物実測図　82　遺物実測図　83　遺物実測図
84　SE04井戸実測図　85　遺物実測図　86　遺物実測図

3．その他の遺構の遺物……58
87　通い徳利　88　遺物実測図　89　遺物実測図　90　遺物実測図
91　遺物実測図　92　遺物実測図　93　遺物実測図　94　遺物実測図

銅銭一覧表……65
95 出土銅銭拓影（実大）

4．博多第113次調査出土銅銭の透過Ｘ線撮影……67
片多雅樹・比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

第３章　小　結……70

遺　跡　名	博多遺跡群　第113次調査		所在地	福岡市博多区下呉服町2-29	
調査番号	9859	遺跡略号	HKT-113	開発面積	408㎡
調査対象面積	408㎡	調査面積	244㎡	調査期日	1999 2/1～4/26

第１章　はじめに

１．調査にいたるまで

栗原工業株式会社九州支店は、福岡市博多区下呉服町2-29に事務所ビルを建設することになり、埋蔵文化財の事前調査願を平成10年（1998年）10月10日に、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。担当の事前審査係では、当該地が博多遺跡群の「息の浜（おきのはま）」と呼ばれる旧砂丘上に当たり、またこれまで実施してきた周辺の遺跡発掘結果から、遺跡の存在が十分に予想されたので、試掘調査の必要を通知し、その日程調整を行った。しかし、この時点では、まだ敷地の西寄りに事務所ビルが建っており、全域を対象にしての試掘は不可能であった。

弥生時代から現代に至る遺構が重なっている博多遺跡群では、試掘調査をできるだけ慎重、綿密に行い、調査期間や予算額をより正確に積算する必要があることから、事務所ビル解体後の試掘調査をお願いした。しかし平成11年９月竣工の計画で、期間的な余裕がないことから、試掘トレンチを駐車場部分のみに設定して判断することにし、事前審査願提出から一か月後の11月10日に、事前審査係の屋山洋と中村啓太郎が試掘を実施することにした。

試掘調査の結果、現地表より約170㎝の深さまでは現代の攪乱を受けているものの、井戸と思われる落ち込みや大小のピットなどの遺構が見つかり、これらから近世の陶磁器や土師器が出土することを確認した。このため、直ちに本調査実施に向けて協議を重ね、平成10年12月28日に栗原工業株式会社と「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を取り交わし、下記のような組織、体制で平成11年２月１日より50日間の予定で記録保存の発掘調査に着手した。

２．発掘調査の組織と構成

調査委託　栗原工業株式会社
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　西憲一郎
調査総括　福岡市教育委員会　埋蔵文化財課
課長　柳田純孝（前任）　山崎純男（現任）　調査第２係長　山口譲治（前任）
事前審査係　田中壽夫　杉山富雄　屋山洋　中村啓太郎　加藤隆也
調査庶務　陶山能成（前任）　井上和光（現任）　木原淳二　谷口真由美　河野淳美
調査担当　力武卓治　（調査員）北村幸子　羽方誠　瀬戸啓治
発掘作業　小路丸嘉人　小路丸良江　永田優子　指原姶子　花田則子　池聖子　中村幸子
小池温子　大音輝子　増田ゆかり　田端名穂子　吉川暢子　三浦力　小松冨美
村本義夫　金子洋平　吉原琢
資料整理　池田由美　宮崎まり子　生垣綾子　藤元香子　渡辺敦子　安部国恵　光吉ムツ子

また、発掘作業に当たっては、栗原工業株式会社や大林組の方々よりご協力をいただきました。ここに明記して感謝申し上げます。

第２章　発掘調査の記録

１．博多遺跡群と最近の調査

博多駅を南端にして西の博多川（那珂川）、東の石堂川（御笠川）に挟まれた、いわゆる博多は、砂丘の上にできた街である。この砂丘は、内陸側から海側に向かって砂丘Ⅰ～Ⅲの三列が発達し、砂丘Ⅰ、Ⅱを「博多浜」、砂丘Ⅲを「息の浜（おきのはま）」と呼び、これらの砂丘上には、弥生時代から現代まで二千数百年にわたって生活が営まれた遺跡がある。これらの遺跡を総称して「博多遺跡群」と呼ぶ。

博多遺跡群での本格的な発掘調査は、市営地下鉄の建設工事に先立って実施したことに始まり、平成11年12月までに第121次を数える。どの調査区でも「貿易都市」を物語る国際色豊かで多様な遺物が出土し、考古学だけでなく地形学や文献学などさまざまな領域の研究を通して、「貿易都市博多」の歴史的解明が進められている。その調査成果は、各調査報告書や論文などに掲載、発表されているので、ここでは繰り返す必要はないだろう。

博多での都市再開発は、博多駅を中心にして進んできたこともあって、海側の「息の浜」での発掘調査例はまだ少ないが、平成10年秋から行われた博多小学校建設地の第111次調査では、博多でのキリシタン布教のようすを物語るメダイや、元寇防塁と思われる石塁遺構が53mにわたって発見されるなど、新しい知見が増え続けている。この地一帯には、博多豪商の屋敷跡も推定され、また太閤町割りの基点にもなっていることから、元寇防塁の延長部の確認と並んで、町割りの復元や町人たちの暮らしぶりを明らかにすることも、発掘調査の大きな課題の一つである。このような基礎的な資料を蓄積することによって、「息の浜」の形成過程だけでなく、現代の博多につながる歴史的変遷やアジアに開かれた福岡市の、未来への役割や、そして方向までも語ることができるようになるだろう。

3　遺跡周辺の風景

博多遺跡群の調査地点　3

4　博多遺跡群の発掘調査地点と砂丘
（扉図のアミ範囲部）

博多遺跡群　調査一覧表

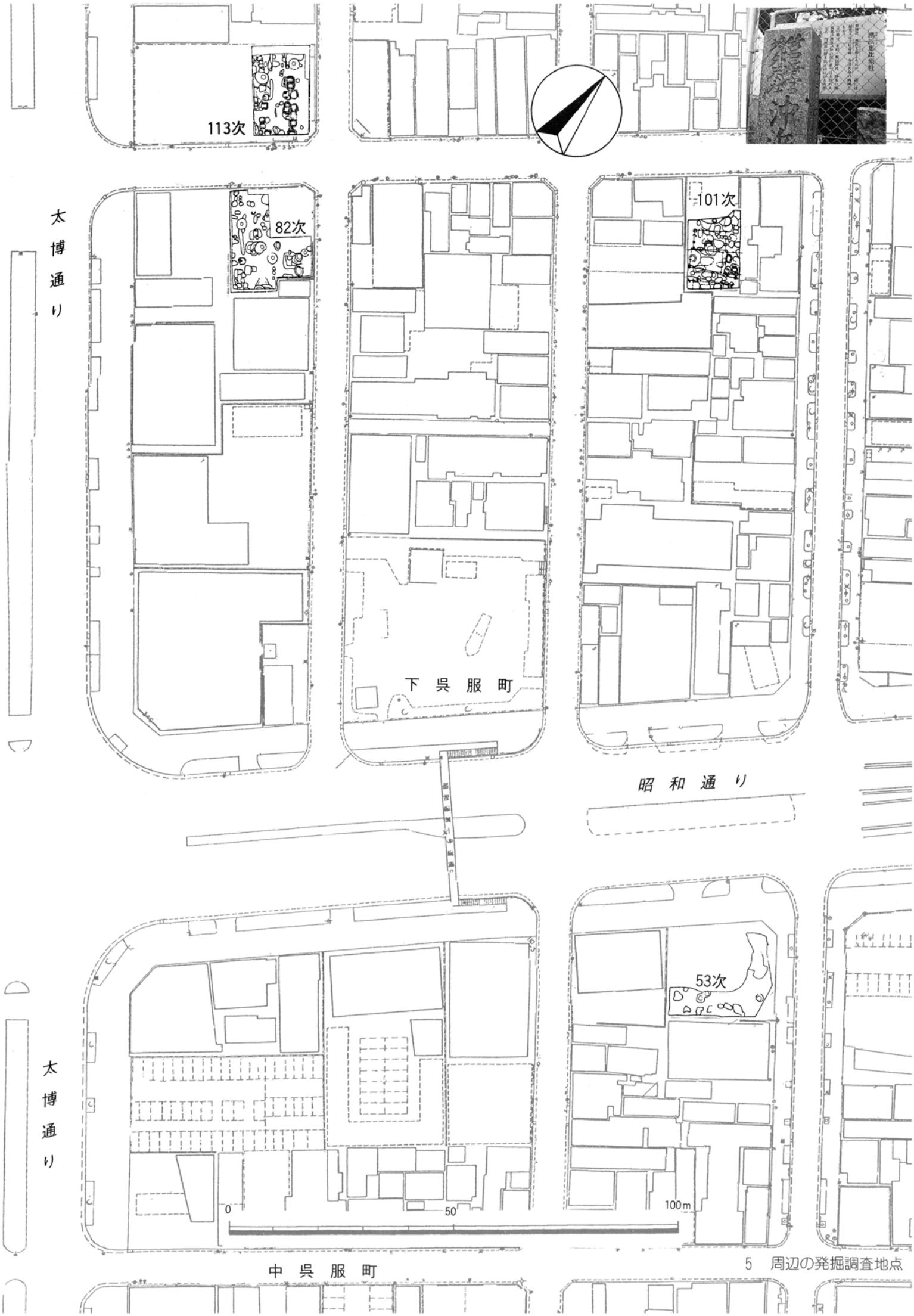
地図番号	調査番号	調査原因	調査種別	所在地	調査面積	報告書
1	7810	寺社	民受	御供所町	360	543
2	7928	ビル	民受	店屋町99	100	
3	7929	寺社	民受	祇園町	240	515
4	7930	ビル	民受	冷泉町7-1	1,100	543
5	7931	ビル	民受	下呉服町346	10	
6	7932	共住	民受	冷泉町155他	800	128
7	8023	ビル	民受	祇園町130	210	
8	8024	寺社	民受	御供所町	600	543
9	8025	ビル	民受	下呉服町75		
10	8026	ビル	民受	冷泉町474-1	54	68
11	8027	ビル	民受	御供所町3-30		
12	8127	ビル	民受	中呉服町152		
13	8128	ビル	民受	駅前1-121	30	
14	8129	ビル	民受	店屋町4-15	255	
15	8130	駐車	民受	上呉服町569	100	
16	8131	ビル	補助	店屋町248他	150	
17	8132	ビル	民受	駅前1-98	910	118
18	8158	ビル	民受	駅前2-8-14	10	
19	8329	寺社	民受	冷泉町	200	
20	8324	ビル	民受	駅前1-97	980	118
21	8325	ビル	民受	駅前2-181	150	118
22	8327	ビル	民受	冷泉町189他	340	118
23	8334	寺社	民受	冷泉町178他	1,000	491
24	8433	ビル	民受	冷泉町1-1	250	119
25	8434	ビル	民受	祇園町1-1	100	120
26	8508	ビル	民受	上呉服町34	134	144
27	8507	ビル	民受	祇園町1-11	350	146
28	8509	ビル	民受	御供所町70-2	1,800	147
29	8605	ビル	民受	綱場町22-6	330	148
30	8608	ビル	民受	御供所町38	495	149
31	8606	ビル	民受	御供所町65	190	150

地図番号	調査番号	調査原因	調査種別	所在地	調査面積	報告書
32	8608	ビル	民受	祇園町21-1	2,000	
33	8618	ビル	民受	祇園町8他	778	176
34	8645	ビル	民受	冷泉町238-2	150	
35	8648	ビル	民受	上呉服町58	655	177・398
36	8725	ビル	民受	祇園町	332	228・244
37	8740	ビル	民受	駅前1-129	1,112	244
38	8805	共住	民受	店屋町1-30	420	280
39	8806	ビル	民受	店屋町１他	612	229
40	8833	ビル	民受	呉服町251	565	230
41	8834	共住	民受	祇園町	60	
42	8843	ビル	民受	祇園町130	210	245
43	8852	ビル	民受	綱場町　1	710	246
44	8857	ビル	民受	冷泉町201-3	178	247
45	8862	寺社	民受	祇園町4-50	248	248
46	8902	共住	民受	古門戸町１	150	281
47	8911	ビル	民受	祇園町990-2	立会	
48	8915	共住	民受	御供所町40他	263	282
49	8916	駐車	民受	上川端町272	90	
50	8918	共住	民受	祇園町７他	730	249
51	8925	共住	民受	祇園町54-1	200	283
52	8929	水槽	民受	駅前1-155	29	
53	8930	給油	民受	呉服町154	190	284
54	8941		試掘	冷泉町2-123		
55	8942	ビル	民受	奈良屋町61-1	128	327
56	8943	庁舎	公令	店屋町4-1他	476	326
57	8947	ビル	民受	祇園町557	184	250
58	8948	寺社	民受	綱場町20他	70	251
59	8957	駐車	民受	祇園町87-226	276	328
60	8959	ビル	民受	綱場町15他	730	285
61	8962	共住	民受	店屋町82-1	95	252
62	8963	ビル	民受	御供所町195	2,257	397

地図番号	調査番号	調査原因	調査種別	所在地	調査面積	報告書
63	8974	共住	民受	冷泉町90-3他	275	286
64	8976	ビル	民受	駅前1-101	620	396
65	9017	ビル	民受	祇園町161-1	1,100	329
66	9022	ビル	民受	御供所町129	444	330
67	9028	ビル	民受	冷泉町1-8	210	284
68	9042	福祉	公令	古門戸町98	360	287
69	9055	ビル	民受	奈良屋町287	260	288
70	9062	共住	民受	冷泉町338	350	370
71	9111	ビル	民受	御供所町235	600	450
72	9113	ビル	民受	上川端町264	200	371
73	9120	ビル	民受	御供所町15	76	
74	9126	共住	民受	上呉服町131	140	395
75	9136	ビル	民受	奈良屋町9-1	97	331
76	9137	ビル	民受	上呉服町598	521	332
77	9205	倉庫	民受	店屋町4-10	520	394
78	9222	ビル	民受	古門戸町28	227	393
79	9259	ビル	民受	冷泉町46	610	447
80	9309	ビル	令達	冷泉町304	854	448
81	9323	ビル	民受	冷泉町237	137	392
82	9342	ビル	民受	下呉服町357	355	449
83	9344	ビル	民受	奈良屋町27	1,200	503
84	9423	共住	民受	上呉服町119	60	521
85	9433	ビル	民受	店屋町37	670	522
86	9436	ビル	補助	祇園町13-18	479	526
87	9442	ビル	民受	上川端町7	100	443
88	9444	専住	国補	御供所町311	355	
89	9505	再開	民受	下川端町179	4,139	556
90	9519	共住	民受	冷泉町216	478	557
91	9532	駐車	民受	下川端134	67	532
92	9544	ビル	民受	冷泉町 274	185	
93	9545	寺社	民受	古門戸町83	670	532

地図番号	調査番号	調査原因	調査種別	所在地	調査面積	報告書
94	9551	ビル	民受	御供所町19-2	587	593
95	9554	病院	民受	店屋町8-10	586	
96	9559	劇場	民受	下川端町	5,900	605
97	9603	共住	民受	冷泉町	324	558
98	9618	共住	民受	中呉服町2-22	562	559
99	9633	店舗	民受	祇園町 2	200	560
100	9647	専住	民補	中呉服町 2	200	
101	9660	ビル	民受	下呉服町	180	560
102	9752	道路	公受	上呉服町	213	
103	9754	駐車	民受	冷泉町 2	72	627
104	9766	ビル	令達	上呉服町124	188	594
105	9767	ビル	民受	冷泉町 4	221	628
106	9777	ビル	民受	御供所町 5	48	593
107	9778	道路	令達	上呉服町 3	120	
108	9066	ビル	確認	古門戸町 7	400	
109	9822	ビル	民受	博多駅前 1	490	629
110	9827	ビル	民受	店屋町15	186	630
111	9836	学校	令達	奈良屋町	5,000	
112	9845	警察	公受	博多駅前 2	50	632
113	9859	ビル	民受	下呉服町2-29	244	631
114	9919	階段	令達	祇園町	確認	
115	9913	ビル	民受	店屋町34他	599	
116	9917	ビル	民受	奈良屋町2-12	416	
117	9919	ビル	民受	冷泉町83他	365	
118	9927	ビル	民受	冷泉町88-1	201	
119	9941	ビル	民受	中呉服町119	420	
120	9952	道路	令達	御供所町	360	
121	9960	ビル	民受	中呉服町57-1	146	
122						
123						
124						

奈良屋町
111次
博多小学校
116次
75次
石墨
83次
昭和通り
60次
42次
綱場町



5　周辺の発掘調査地点

2．発掘調査と資料整理

調査地点と町名

最近になって太博通りの両側には、事務所ビルやマンションなどの高層ビルが建ち始めているが、裏通りには以前からの町筋や町家が残っており、まだ博多らしい風情を楽しむことができる。

今回の第113次調査地点は、博多駅より博多湾に北西にのびる太博通りと昭和通りの交差点より北に約180m離れた位置にある。近くには古くから漁師や博多商人の厚い信仰を集め、櫛田神社の神輿の御旅所で、箱崎宮も放生会の時は必ず神幸したという「澳浜恵比須社（おきのはま）」が鎮座していることからも、本調査地点一帯が「息の浜」の北東海岸線付近に当たっていることが分かる。

旧町名は「鏡町」と呼ばれていた。町名の由来を記した石柱によると、神社の御神鏡を作る鋳物師たちが居住していたことによるとあるが、現在はそのような店舗や工房、工場はない。また平成５年に南側隣接地で実施した第82次調査でも、鋳物関係の資料は皆無であった。ただ太博通り西側の奈良屋町（旧西町）では、博多鋳物師を代表する柴藤氏が元和年間（1613～1624）に創業していることから、鋳物関係の遺構、遺物の探査、確認を、本調査の目的の一つとして取り組むことにした。

安全確保と発掘区の設定

事務所ビルの建設は、敷地のほぼ全面を占めることから、全面を調査対象とすべきであったが、調査事務所の設置場所や廃土置き場、そして隣地や通行人の安全確保などから、道路側から１m、北西の隣家から約5.5m引いて、長軸19.5m、短軸12.5mの面積約244㎡を発掘することにした。

試掘によると、現地表より約1.7mの深さまでは、近、現代の攪乱を受けており、その下部に遺物包含層と遺構面が重なっているとの所見であった。このため、本調査前に攪乱土のすき取り、土止め工事などを開発側にお願いするとともに、周囲に外柵を巡らし、さらに発掘作業の掲示をするなど、発掘作業員や通行人への安全対策や広報を講じた。

発掘調査は、調査対象地に５m方眼のグリッドを組み、北西コーナーから南に数字を、東にアルファベットを付けた。なお廃土置き場の制約から、２ラインを境にして南北にⅠ、Ⅱ区と二分し、南側のⅡ区から遺構検出に着手した。発掘の結果、上下２面の遺構面から、石積土壙、瓦溜め土壙、井戸、溝、大小のピットなどを検出し、コンテナ150箱を超す多量の遺物が出土した。

発掘終了に引き続き、写真、図面などの記録類や出土遺物の整理、報告書作成の作業にとりかかった。

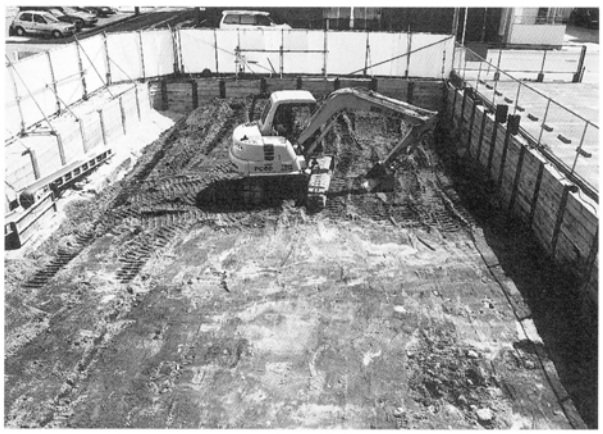
実測遺物の選択

次に遺構と遺物について報告するが、遺構番号は、検出、実測した順であり、時期の先後を示すものではない。遺物は、できるだけ図化するように努めたが、整理期間や頁数の制約から、出土遺構の時期や用途、性格などを示す遺物を優先的に選択した。したがって遺構、器種ごとの出土点数を反映したものではない。そこで、コンテナの箱数によって、各遺構の出土量を示すようにした。また編集者の力量不足から、細かな分類や時期決定、および産地などの検討が十分でなかったことを先に断っておく。

3．遺構と遺物

検出した遺構については、発掘作業と平行して、その使用目的（用途）や時期などを、検討し、人工的な遺構と認識したものについては、遺構番号をつけて記録するようにした。中には何も出土しない遺構もあり、その時期や使用目的をつかめないものもあった。ここでは、遺構番号を付け、また本調査区の性格や時期判断に重要と考えられる遺構とその出土遺物について報告する。

1　攪乱土を取り除く



4　廃土を移動する

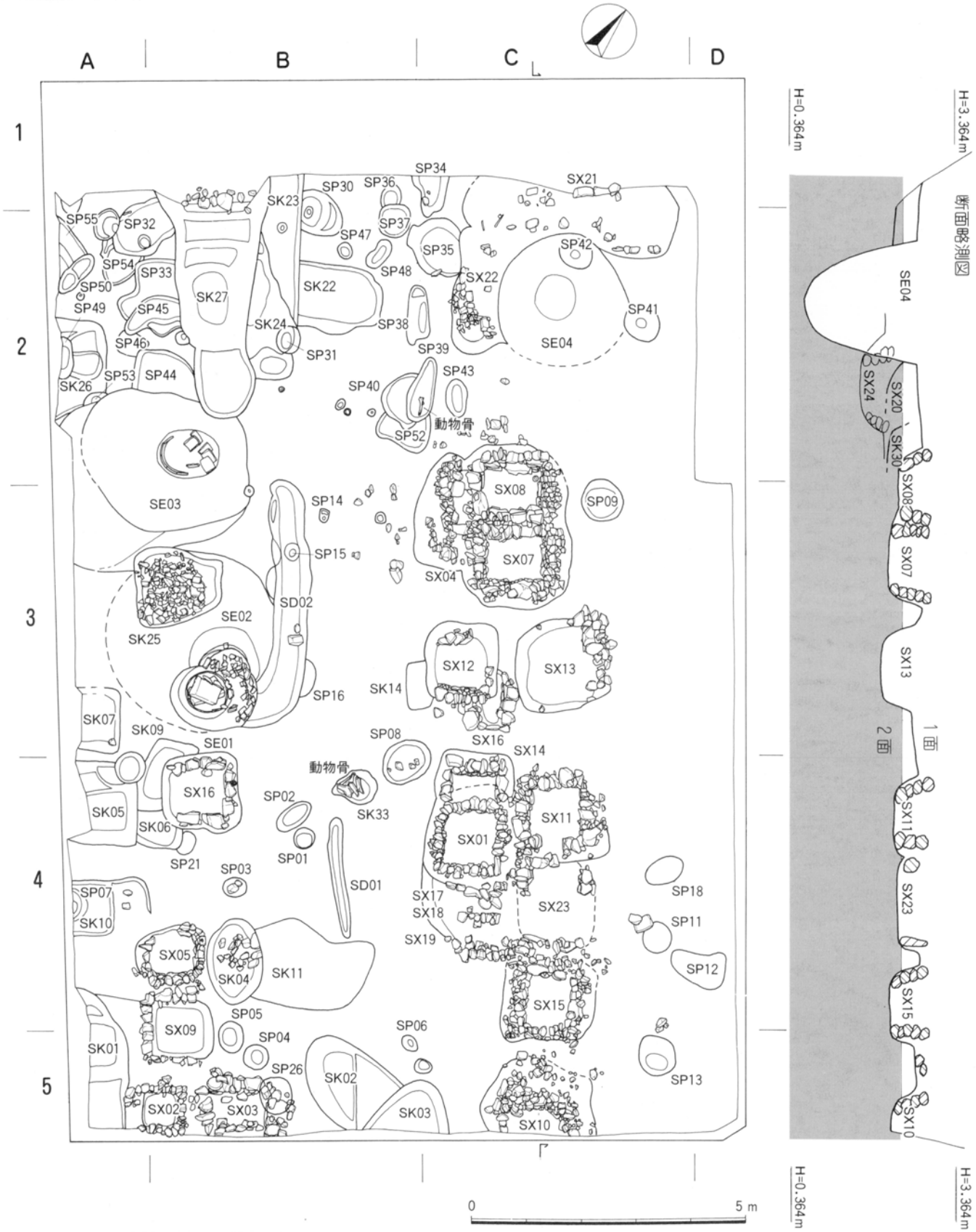
2　遺構を探す（Ⅱ区１面）

5　撮影準備（Ⅰ区２面）

3　姿を表した遺構

6　井戸を掘る（SE04）

6　発掘作業風景



7　1面の遺構配置図（縮尺1/100）

A　B　C　D

1　2　3　4　5

SP56　SP57　SP62　SP58　SD03　SP51　SK28　SP61　SP63　SP60

動物骨　SK31　SK32　イルカ骨　SP59　SX20　SX24　SX25　SK29　動物骨　SK30　SD04　動物骨

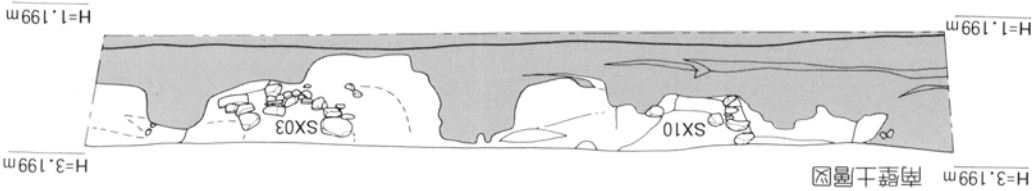
SK12　SK13　SP29　SP28　SP27　SP16　SP17　SK21

巻き貝・二枚貝　SK19　SP19　SK20　SK16　SK15　SP20　SK17　SK18　SP25　SP23　SP24　SK28

0　5 m

H=1.199m　H=3.199m　東壁土層図　H=1.199m　H=3.199m

8　2面の遺構配置図（縮尺1/100）



1．土　壙

今回の調査では、その構造で石積土壙と素掘り土壙に分け、さらに素掘り土壙は、埋まっている内容物によって、動物骨，貝殻土壙や瓦溜土壙などのように呼び分けた。しかし、この名称は、素掘り土壙の最後の姿であって、当初の使用目的を示しているものではない。構造や廃棄状況を同列にして遺構名とするのは問題があるが、石積土壙のようにいまだ用途を明確にできない段階なので、ここでは従来通りの名称を使っている。

石積土壙（SX）

破壊されて一部のみが残るものも含めて１面で23基、２面で２基の計25基を検出した。これらの主軸は、磁北から西にほぼ34度前後振れているが、発掘区の長軸、つまり現在の道路に平行して東西二列に整然と並んでいるように見える。平面、断面実測図は、本書では北西側を上にして掲載し、構築方法などの記述に当たっては北西側を北壁と呼んでいる。内法の数値は、下底の南北軸を先に、東西軸を後に示している。

石積土壙計測表

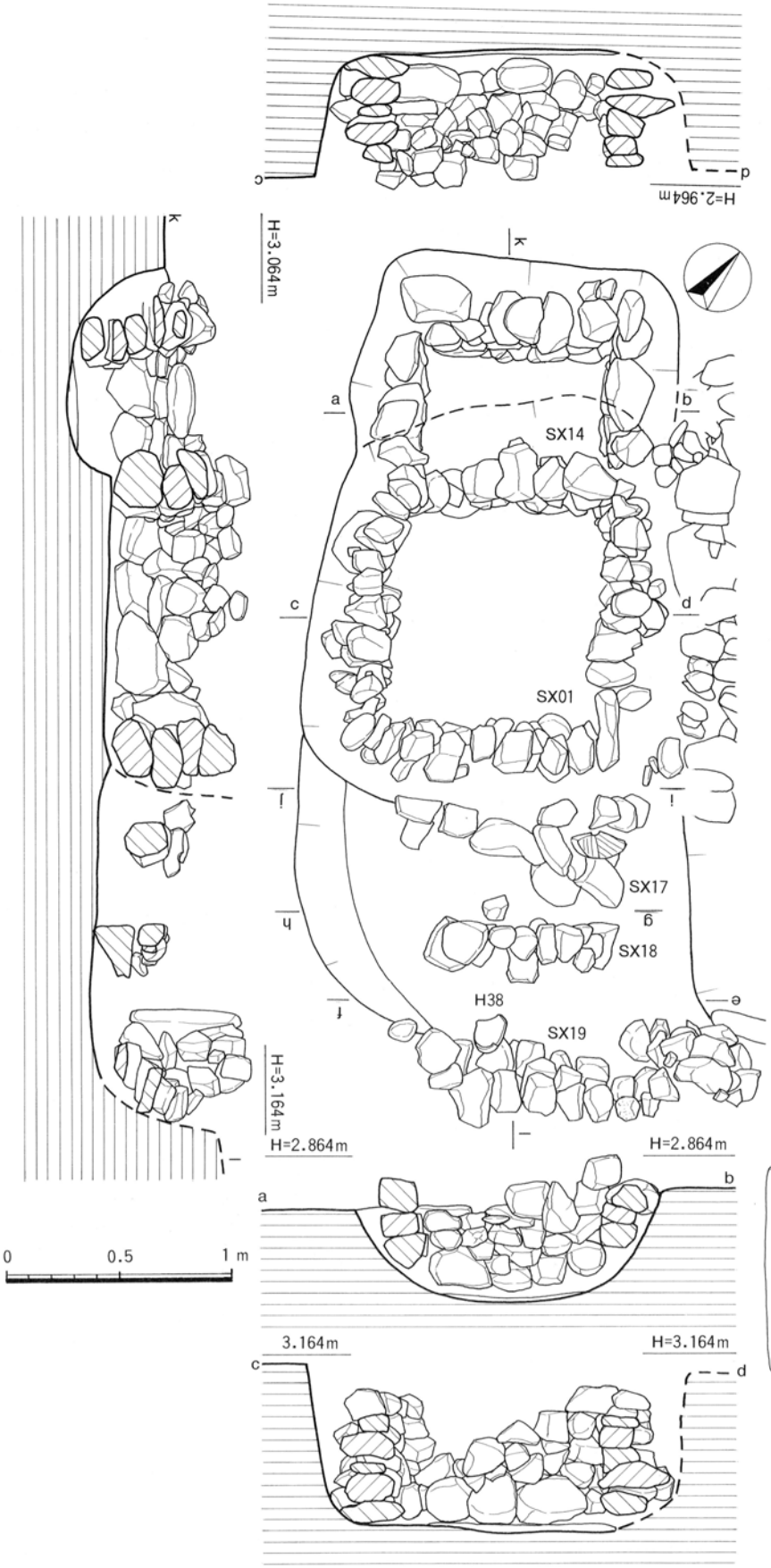
No	面	グリッド	平面形	規模(cm)	段数	深さ	底レベル	その他	Fig.
SX01	1	C-4	隅丸長方形	102×96	6	64	2.35m	石臼 染付 火鉢	9
SX02	1	A.B-5	長方形	56×86	5	42	2.79m	染付	12
SX03	1	B-5		116	6	80	2.22m	石臼 染付 擂鉢	15
SX04	1	B.C-2.3		82×34	4	60	2.40m	石臼 染付 灯明皿	19
SX05	1	B.C-4	隅丸長方形	68	6	54	2.36m	石臼 土錘	21
SX06	1	C-3.4	方形	81×40	3	38	2.65m	軒丸瓦 擂鉢 土錘	25
SX07	1	C-3	長方形	90×100	8	90	2.09m	石臼 土錘	30
SX08	1	C-2.3	長方形	66×100	7	66	2.35m	石臼	31
SX09	1	A.B-4.5	方形	96×96	2	45	2.45m	土鍋 石球	33
SX10	1	C-5	隅丸長方形	96	7	60	2.20m	猪口 釜	36
SX11	1	C-4	方形	96×96	6	72	2.29m	土錘 甕 染付	38
SX12	1	C-3	方形	86×80	7	68	2.30m	灯明皿 湯釜 土鍋	40
SX13	1	C-3	方形	65×45	4	74	2.26m	火鉢 染付	44
SX14	1	C-3.4	長方形	78	5	64	2.21m	石臼 火鉢	46
SX15	1	C-4.5	長方形	88×80	8	79	2.17m	石臼 土鍋 湯釜	48
SX16	1	C-3	長方形　小型	96×64	4	39	2.34m	SX12と連結	40
SX17	1	C-4	列状	106	3	44	2.31m	石臼	51
SX18	1	C-4	列状	88	3	40	2.27m	火鉢	51
SX19	1	C-4	列状	166	4	72	2.27m	土鍋 湯釜	51
SX20	1	C-2	列状	95	1		(2.02m)		54
SX21	1	C-1	L字形	88×16	2		不明		54
SX22	1	C-2	L字形	112×32	3	48	2.13m		54
SX23	1	C-4	長方形	130×90	3	62	2.32m		54
SX24	2	C-2	菱形	110×88	5	70	1.64m	土師器 陶器	55
SX25	2	C-2	L字形	148×28	4	46	2.01m		54

SX01石積土壙

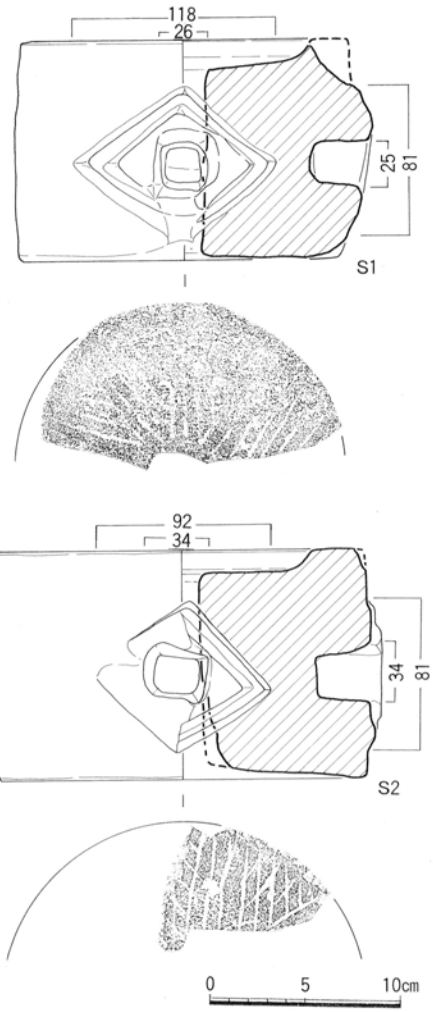
Ⅱ区Ｃ４グリッドにあり、東列の中央部に位置する。北側にSX14が接続し、すぐ東隣にSX11が並んでいる。また南側に３列の積み石列があり、北側からSX17、18、19としている。

方形土壙の四壁に沿って、一抱えほどの角礫を据え、順に小振りの石や破損した２個の茶臼を組み込んで、ほぼ垂直に積み上げている。その総数は126個を数える。多くは小口の平坦面を内側に向けるような意図が見られる。底内法は102cm×96cm。SX17、18、19は、SX01より切られその一部を残しているものと思われるが、北側のSX14は、当初から一体の構造のようにも見える。しかし東壁が途切れて連結していないこと、底面の深さが異なることなどから、SX01によって南壁が壊されたものと判断した。

遺　物　SX01からは、土師器、瓦質土器、陶器、白磁、土錘、鉄滓が合わせてコンテナ１箱分出土した。石製品　S１は、茶臼の上臼で砂岩製。復元径19cm、器高11.8cm。目は７分画、６～７溝式。側面に、二段重ねの菱形に飾られた柄穴がある。S２は、茶臼の上臼。復元径20.6cm、器高12.2cm。目は、６～７分画、８～９溝式。目の刻み直しがある。陽刻した二段重ね菱形の柄穴がある。



9　SX01石積土壙実測図（縮尺1/30）



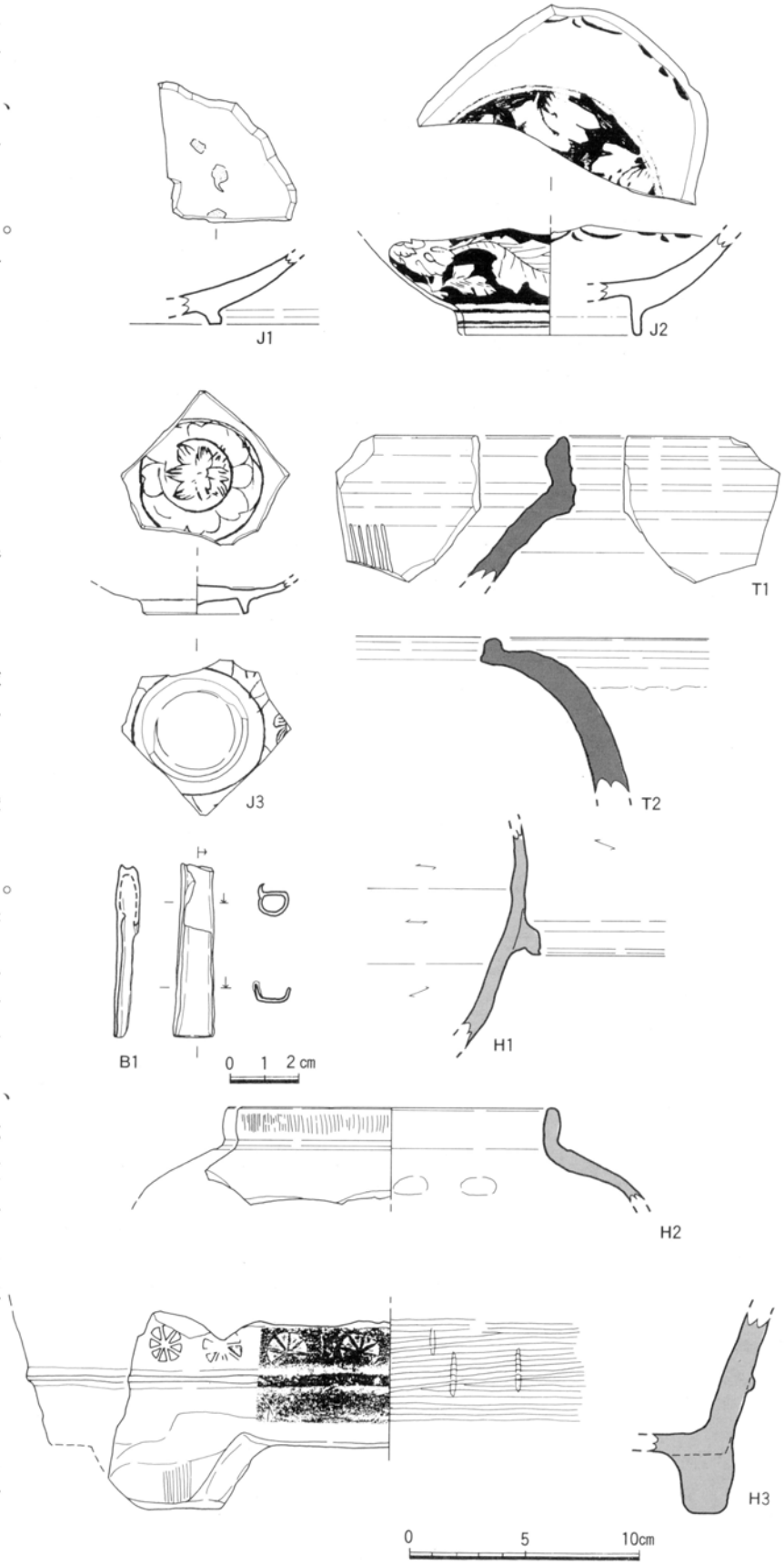
10　遺物実測図（縮尺1/4）

磁　器　J1は、白磁の碗。黄白色の釉薬がかけられ、内面と高台畳付には、目跡が残っている。胎土には、黒色微粒子と気孔が少し見かけられる。貫入はそれほど多くはないが、外面のピンホールは、109個と多い。J2は、染付の碗。焼成温度が十分でなく、文様の発色が悪い。高台の内外面は露胎となっている。　J3は、橙色の色絵碗で、底径4.6㎝。高台から底部外面は露胎で、黄褐色となっている。内面の蛇の目釉剝ぎ部には、8個の目跡が残る。

陶　器　T1は、備前焼の擂鉢。器面は茶色で、内面には砂粒状の黒い膨らみが目立つ。T2は、備前焼の壺。口縁部内面と胴部外面は、黄緑色の釉をかけている。内外面の露胎部は、それぞれ赤茶色と灰色となっている。外面の釉端は、水滴状に盛り上がっている。

瓦質土器　H1は、釜の胴部である。内面はナデ、外面に垂れ気味の凸帯が巡っているが、その上方は、左上がりのみがき調整で、下方は煤が付着している。外面は暗褐色で、内面は暗灰色となっている。H2も釜で、復元口径は14.6㎝。内外面とも回転ナデ調整。口縁部にはハケ目状の文様がある。外面は灰色で、内面は暗灰色である。H3の火鉢は、復元底径は29.4㎝である。脚部内外面と体部内面はハケ目調整で、それ以外はナデ調整。凸帯の上方にスタンプの菊花文が一周する。

金属器　B1は、青銅製品、全長5.2㎝、最大幅1.2㎝である。断面が長方形で、中空になっている。何か差し込んだのか。用途不明。



11　遺物実測図（縮尺1/2·1/3）

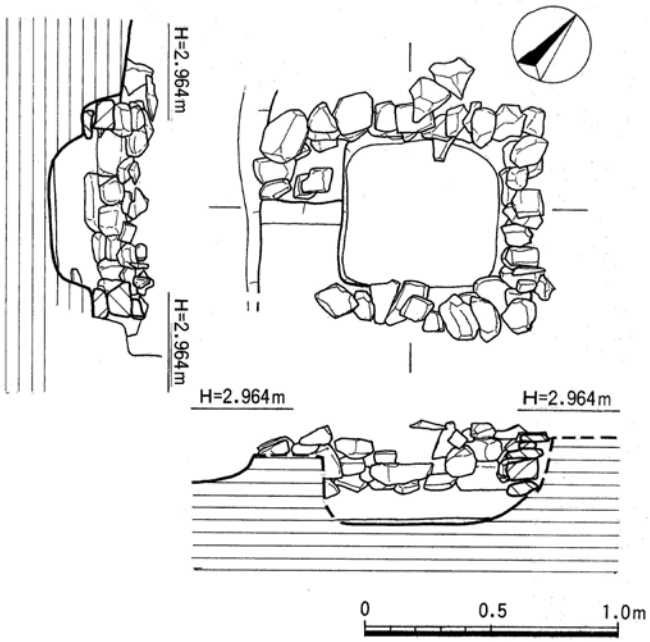
SX02石積土壙

西列の最南端、Ⅱ区の南西隅にSX03が並んでいる。東壁は５段残っているが、全体的に残りが悪く、西壁の一部は失われている。25基の中では最も小型である。内側の面はどうにか揃えているが、大小の石を無規則に積み上げ、裏込め石も置いていない。土壙内底が四壁よりも一段深くなっているのが特色である。遺物の出土は少なく、青花１点を図示したにすぎない。

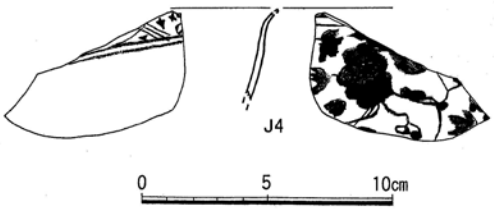
13　SX02石積土壙

遺　物　土師器、瓦質土器、磁器が少量出土し、染付磁器１点を図示した。

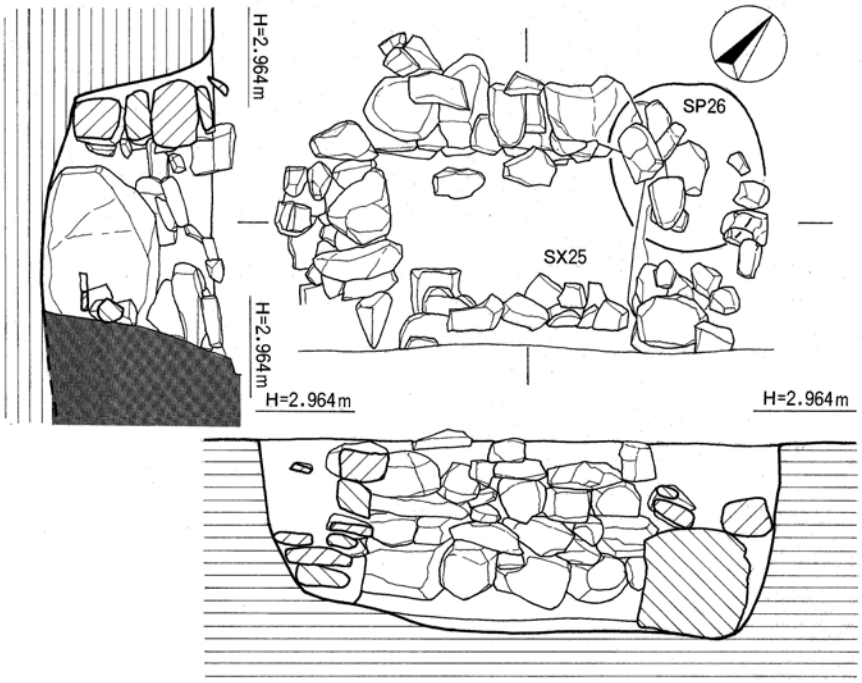
磁　器　Ｊ４は、明の青花で、碗の口縁部。外面に草花文を描く。呉須の発色はよい。



12　SX02石積土壙実測図（縮尺1/30）



14　遺物実測図（縮尺1/3）



15　SX03石積土壙実測図（縮尺1/30）　0　0.5　1 m

SX03石積土壙

Ⅱ区Ｂ５グリッドにあり、南側が発掘区の外側に出ている。平面図では、南壁のように積み石を記入しているが、内部に落ち込んだ石の可能性もあり、南壁とは断定できない。したがって底部内法は不明。円礫と角礫を２：３の割合で用い、下段に大振りの石を用いている。特に東壁には持ち上げることができないほどの大きな石が据えられている。北東隅の４段目には力石があり、また東壁には石臼が組み込まれている。

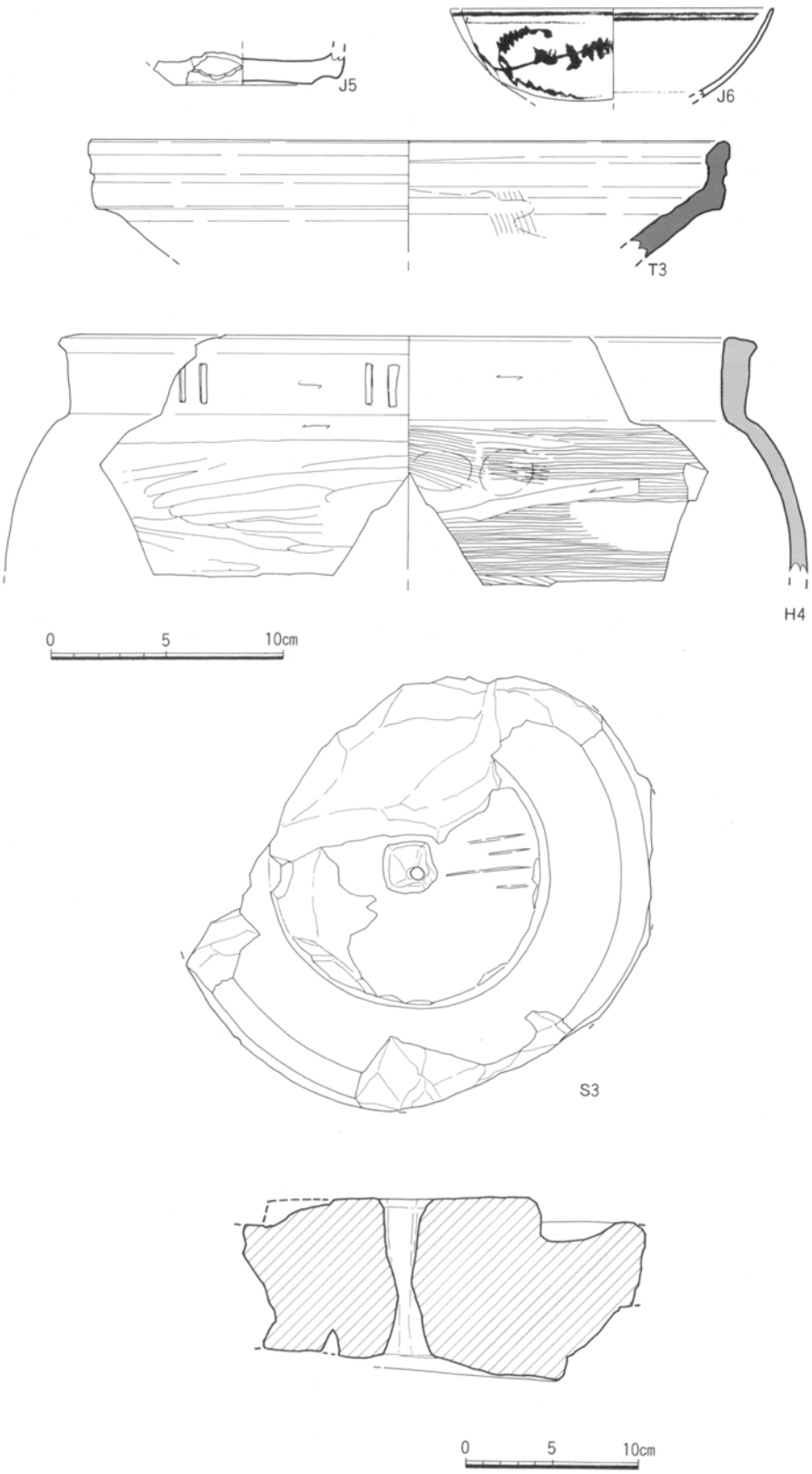
遺　物　土師器、瓦質土器、染付磁器、土錘、鉄滓、そして焼土塊が少量出土した。

磁　器　Ｊ５は、青磁の香炉。直径は5.9㎝。外面には突出た飾りが３か所に付く。胎土は灰色で、黒色微粒子を少し含んでいる。釉色は、深緑色を呈し、底部外面と内面は露胎。底部の内外面には、窯道具と思われる痕跡が、直径３㎝、幅５～９㎜のドーナツ状に見られる。Ｊ６は明の青花の碗。積み石の中から出土した。復元口径は、14㎝。口縁部内面の圏線は、本来２本であるが、明瞭ではない。全体の文様の色は薄い。

陶　器　Ｔ３は、備前焼の擂鉢。復元口径は27.9㎝。口縁部の内面だけが焦げ茶色で、他は灰色となっている。内面の一部には、自然釉がかかり、黄緑色となっている。ナデ調整の部分は、おろし目が達していない。口縁部外面の屈曲部は、重ね焼きの跡と考えられる付着物が認められる。

瓦質土器　Ｈ４は火鉢で、復元口径は30.2㎝。口縁部はナデ。内外面は、それぞれハケ目、ヘラ磨き調整である。口縁部外面には、棒状に窪んだスタンプを２個１組で施す。外面は黒灰色、内面は暗灰色である。

石製品　Ｓ３は、茶臼の下臼。復元径は、28.6㎝、器高10.6㎝。丁寧に敲打されているが、底部は凹凸が目立つ。中心の穴には、丸鑿で削ったような痕跡がある。擦り目は、摩滅している。



16　遺物実測図（縮尺1/3･1/4）

SX04石積土壙

発掘区のほぼ中央のⅡ区B２グリッドにある。掘り方のような落ち込みの中に石を積んでいることや、遺物取り上げの混乱を避けるために石積土壙とした。しかし、その掘り方は、不整形で浅い。積み石方向は、東側に近接しているSX07とSX08と同じであるが、面が揃わず、しかも上下２段の間には空間があり、壁になっていない。SX07とSX08の裏込め石の可能性もあるが、離れており意味をなさない。このようなことから石積土壙と考えるよりも、単独の石列か、SX07とSX08の外部石列とすべきであろう。なお積み石の中に大型石臼の破片２個があり、図のように接合できた。なお石の総数は92個である。

17　SX04石積土壙

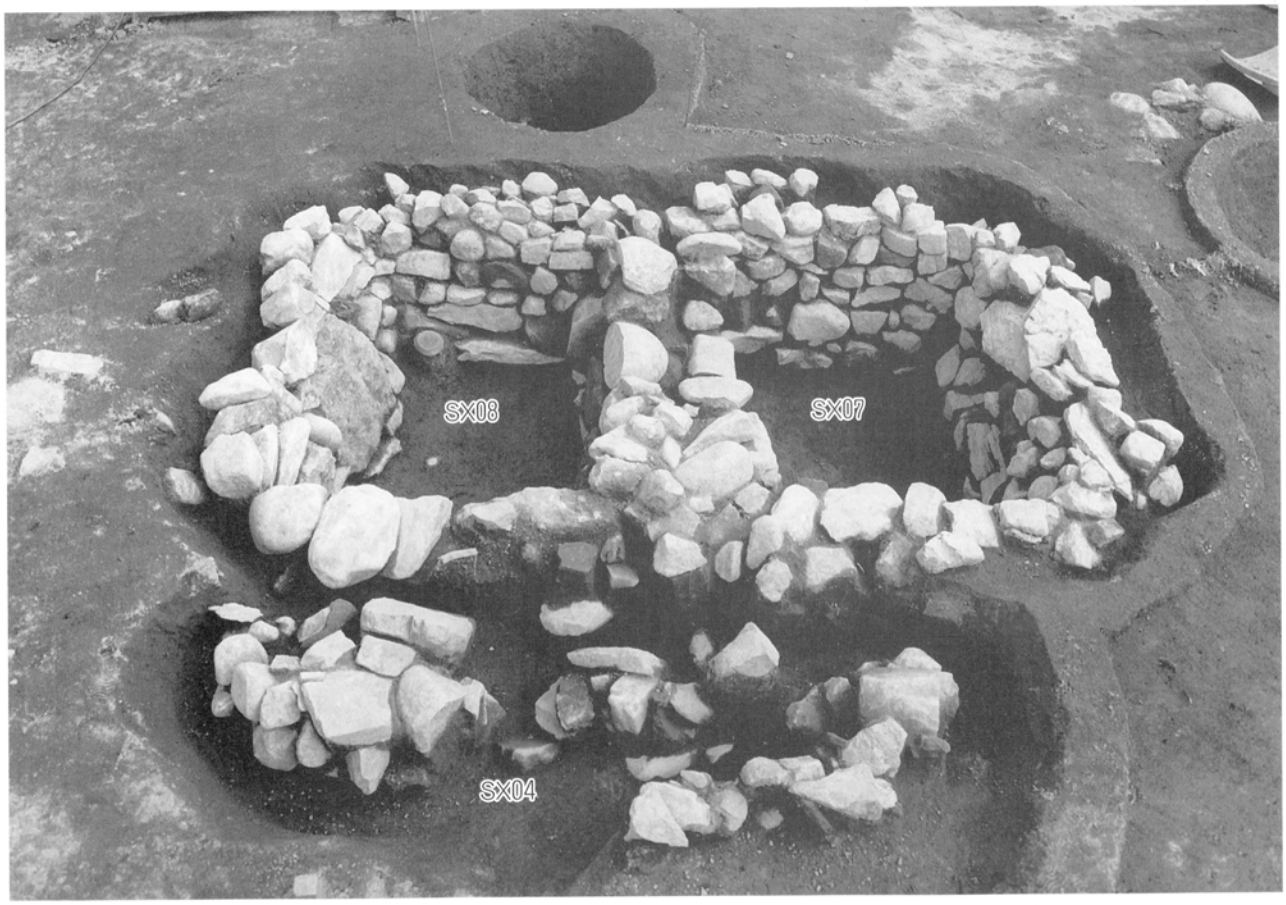
遺　物　遺物の総量は少なく、土師器、瓦質土器、磁器、石臼が出土した

磁　器　Ｊ７は、青花の碗。底径は4.6㎝。畳付は露胎で、器面は少しざらついている。

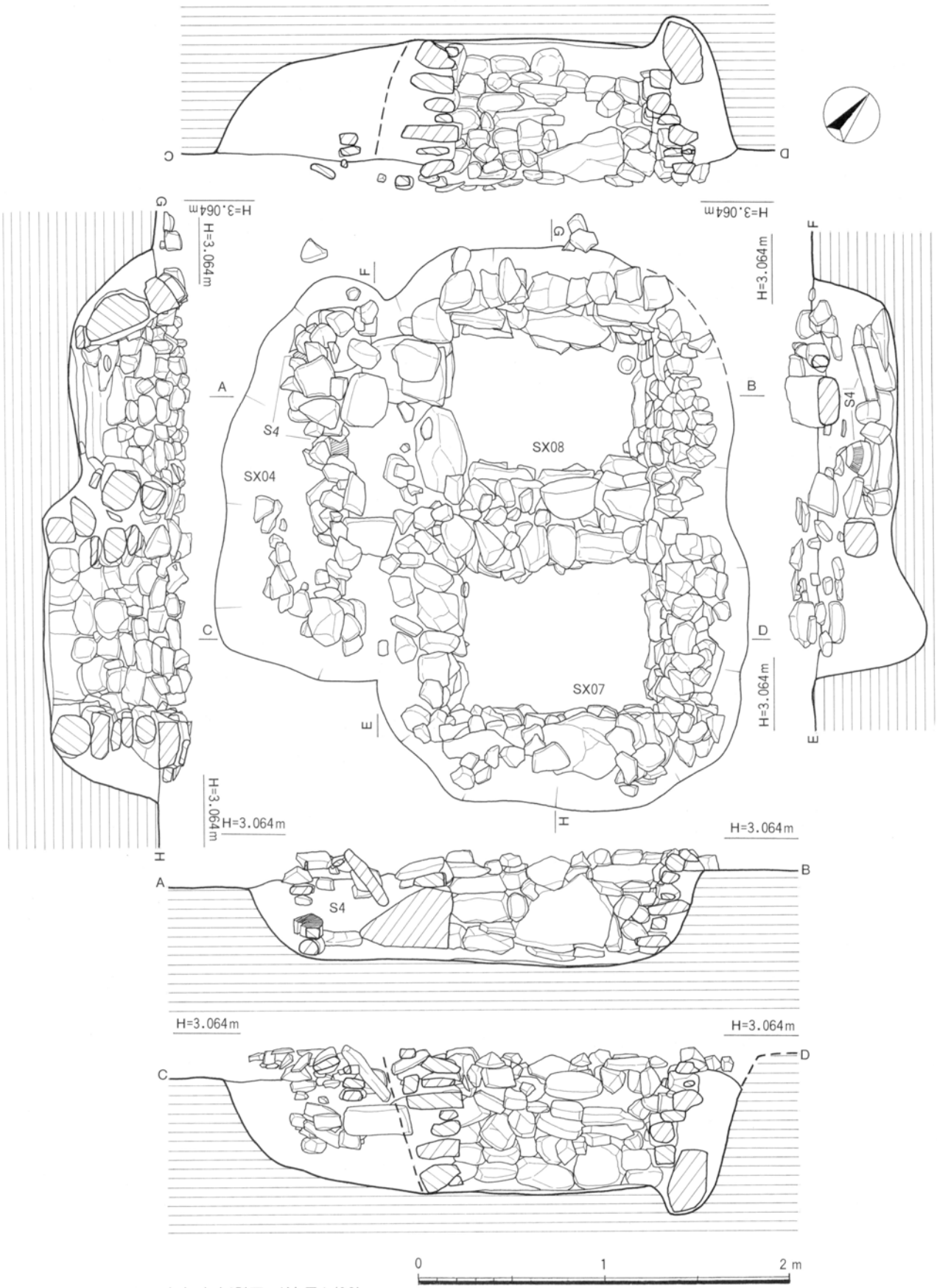
土師器　Ｈ５は、復元口径11.6㎝の土師器皿。底部には、回転糸切り痕が残り、内外面には煤が付着していることから、灯明皿であろう。色調は、明るい茶褐色を呈する。Ｈ６は土鍋で、復元口径は25.6㎝。内面はハケ目調整で、外面は使用時の煤が付着している。内面は暗褐色。

瓦質土器　Ｈ７は瓦質の釜。内外面ともにナデ調整。口縁部内面には、ハケ目痕が残る。口縁

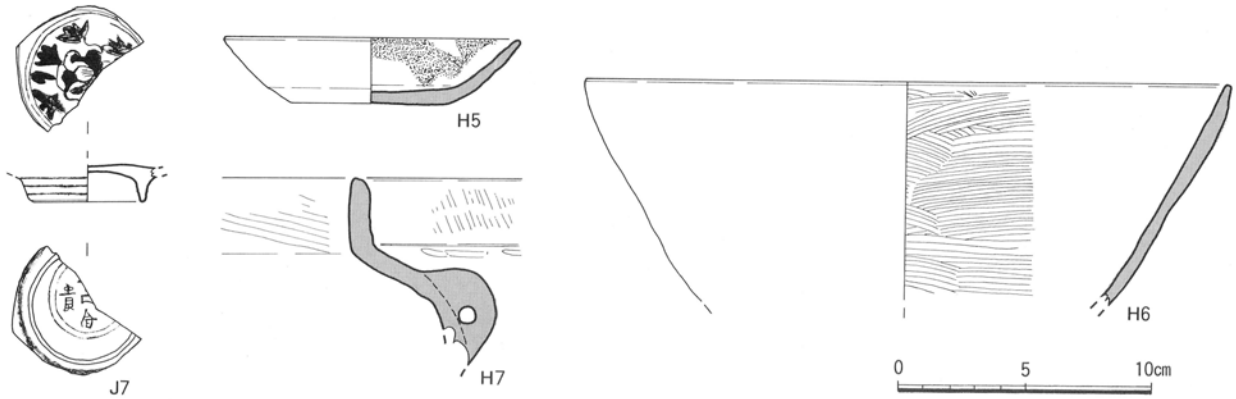
18　SX04石積土壙



SX04石積土壙　*18*

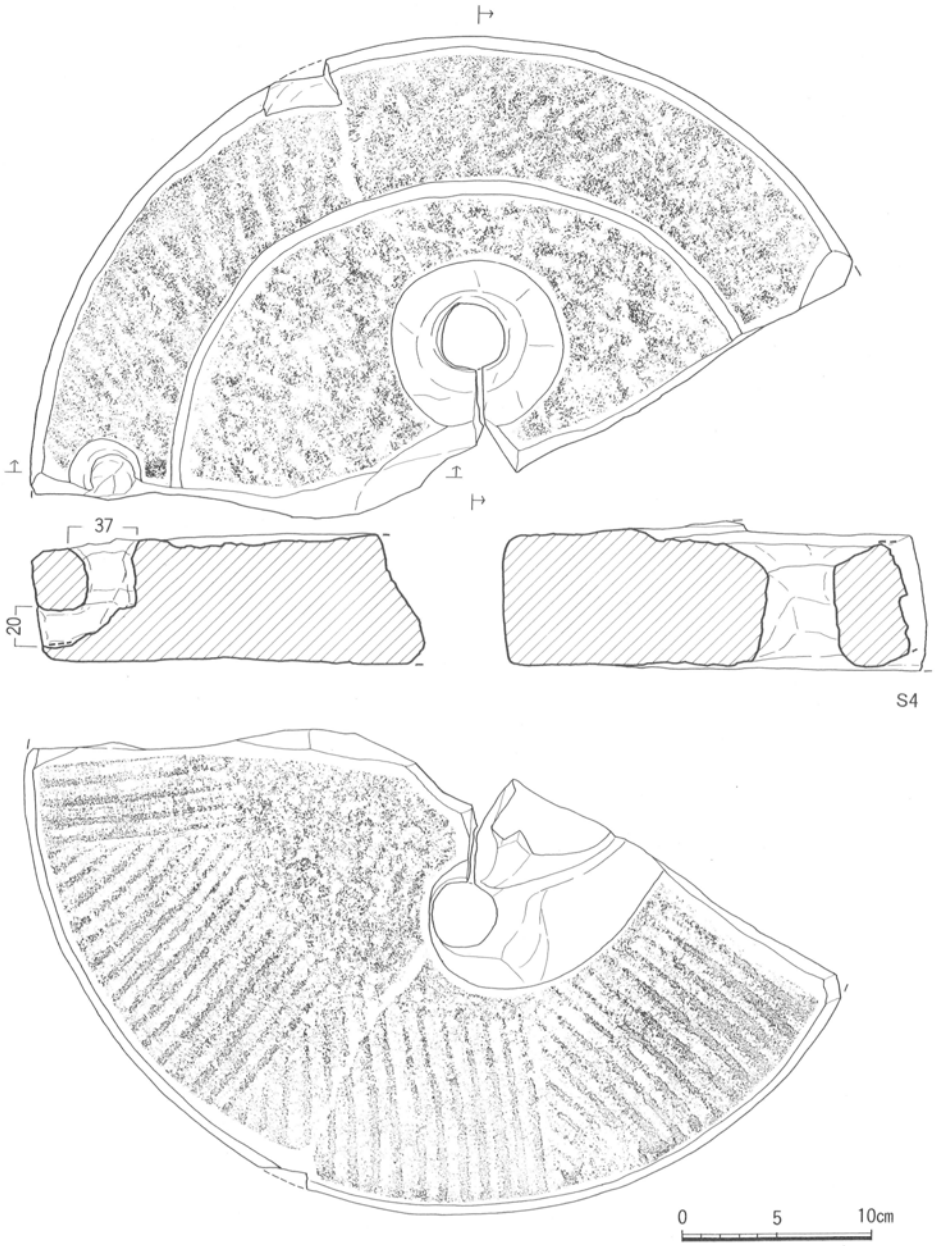


19　SX04石積土壙実測図（縮尺1/30）



部外面には、ハケ目状の文様があり、その時使用した工具痕らしき浅い窪みが外面の屈曲部に見られる。全体の色調は、灰色を呈している。

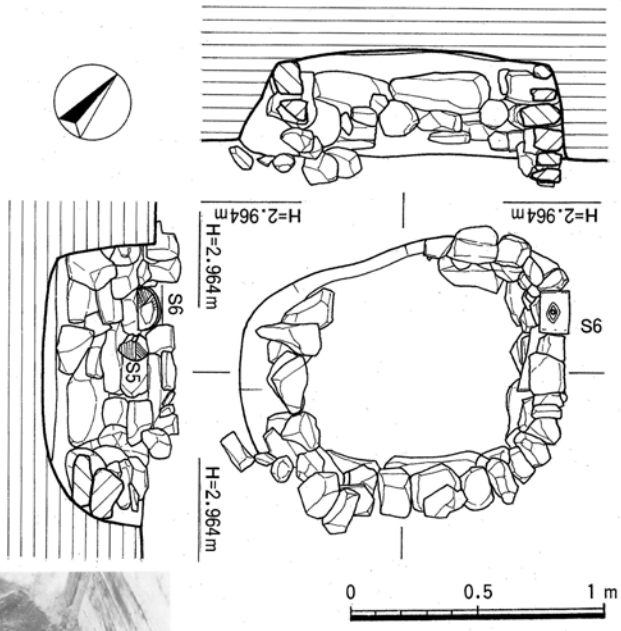
石製品　S４は、挽き臼の上臼である。石組みの石材に転用されていた２片が接合した。花崗岩製で、上面には工具痕が残る。側面は割に平滑な作りになっている。擦り面は、８分画16溝式で、中心より半径12㎝までの範囲は、目が刻まれていない。摩耗が進んでいることから、長期間使用されたと想像される。挽き手の差し込み孔が、上面と側面にあり、互いに貫通している。下面中央には、軸受けらしき穴の一部が残っており、ものくばりの形状から、左回りの回転だったことが分かる。復元径は、46.5㎝、器高は、8.8㎝を測る。



20　遺物実測図（縮尺1/3･1/4）

SX05石積土壙

Ⅱ区南西隅のB４グリッドにある。隅丸方形の掘り方の壁に密接して積み上げている。土壙自体が小型であることから、大振りな石は少ないが、長方形で扁平な石が目立つ。東壁には破損した小型臼２個も組み込まれている。この石積土壙は、他とやや異なる方法で構築されている。最下段は北と南の壁を、東壁と西壁が挟み込むように据え、２段目の各コーナーには両方の壁に掛かる力石を据えて積み上げている。このため各コーナーは、角張らず丸みのある形状となっている。



21　SX05石積土壙実測図（縮尺1/30）

22　SX05石積土壙

23　積み石に転用された石臼

遺　物　SX05から出土した遺物は、土師器、瓦質土器、陶器、磁器、鉄滓などの種類があるが、量的には少ない。

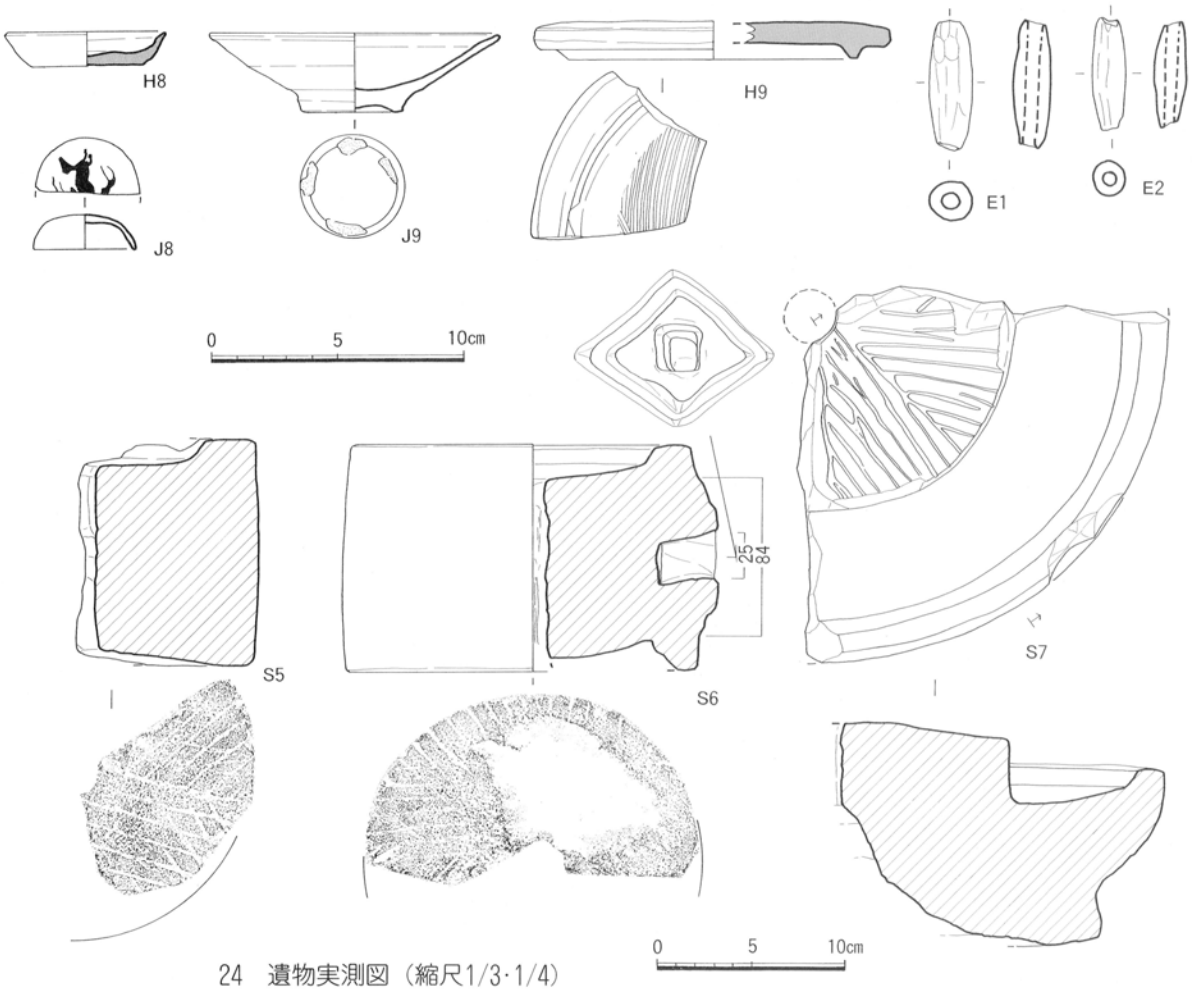
土師器　Ｈ８は、素焼きの皿で、掘り方から出土した。口径10.1㎝、底径6.8㎝、器高2.1㎝である。胎土には、雲母粒を含み、外面は明るい黄褐色をしている。

瓦質土器　Ｈ９は、破片となっているが復元すると直径７㎝の蓋のようである。器面は、ハケ目とナデ調整であるが、ナデ調整の大部分は、やや雑な仕上げである。

磁　器　Ｊ８は染付で、口径4.1㎝、器高1.4㎝の小さな蓋である。口縁部内面は、露胎。天井部の絵柄は、馬のような動物が描かれている。Ｊ９は、朝鮮陶器の碗。掘り方から出土した。口径は11.4㎝、底径は4.0㎝、器高は3.1㎝である。高台畳付は、完全に釉がかからず露胎になっており、砂目痕が４か所に残る。全面に細かな貫入が走っている。

土　錘　Ｅ１は漁具の土錘で、全長5.2㎝、最大径は1.7㎝、孔径は５㎜である。一方の端部付近には、指圧痕がある。雲母粒を多く含んでいる。

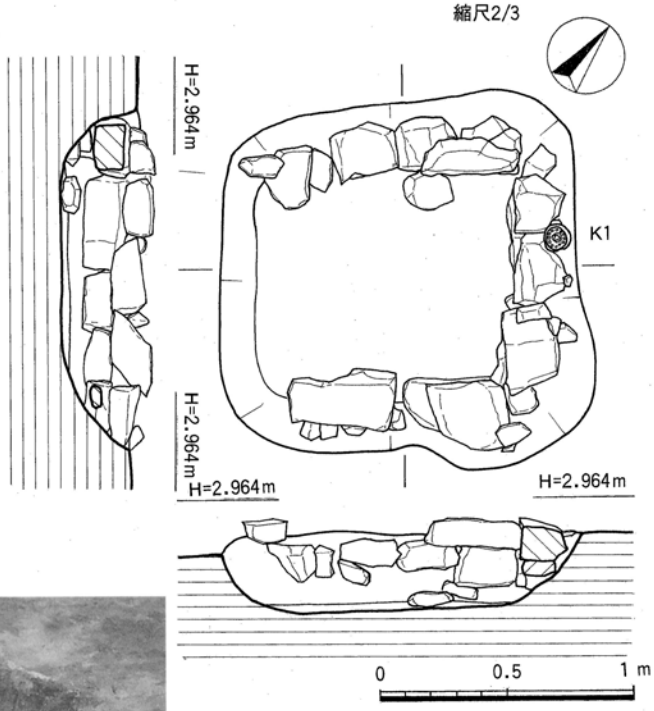
石製品　Ｓ５は、茶臼の上臼である。石組みに組み込まれていた。黄灰色の砂岩で作られており、復元径は19.2㎝、器高は12.1㎝の大きさである。擦り面の目は、６区画６溝式のようであり、一部に方向の異なる目がある。挽く物を入れる口は、復元径３㎝の円形で、比較的平滑に作られており、器面も同じように滑らかに仕上げられている。Ｓ６は、茶臼の上臼である。Ｓ５と同じように石組みの中に組み込まれていた。復元径は34㎝、器高は11.9㎝である。器面には痘痕状の小さな窪みがある。擦り面の目は、８分画７溝式のようだが、本数や方向は、乱れており規則性がない。



24　遺物実測図（縮尺1/3･1/4）

SX06石積土壙

Ⅱ区Ｃ３グリッドの１面で検出した。西列では最北端にあたり、北側にはSE01、02、03 が続いている。隅丸方形の掘り方は、西辺はSK06で壊されている。他の３壁も２段しか残っていない。これらの石は、長方形の石が多く、小口ではなく、長辺側を使って面を揃えた意識が見られる。南、東壁には裏込めがあり、その中に小型軒丸瓦も使われていた。検出時には、内部に大小の石や陶磁器などが投棄された状態で埋まっており、最後はゴミ穴として利用されたのであろう。

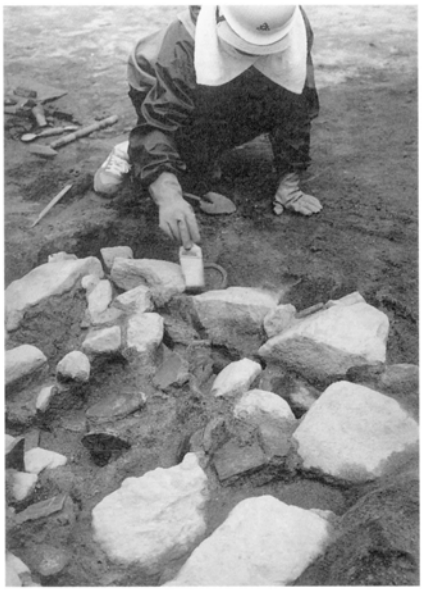


25　SX06石積土壙実測図（縮尺1/30）

26　掘り下げ前

▶27　掘り上げ後

28　掘り下げ作業



遺　物　出土したのは、土師器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦、鉄滓、鞴の羽口などの種類で、総量はコンテナ１箱分である。なお図示した遺物のうちＥ３以外は石組みとその掘り方から出土した。

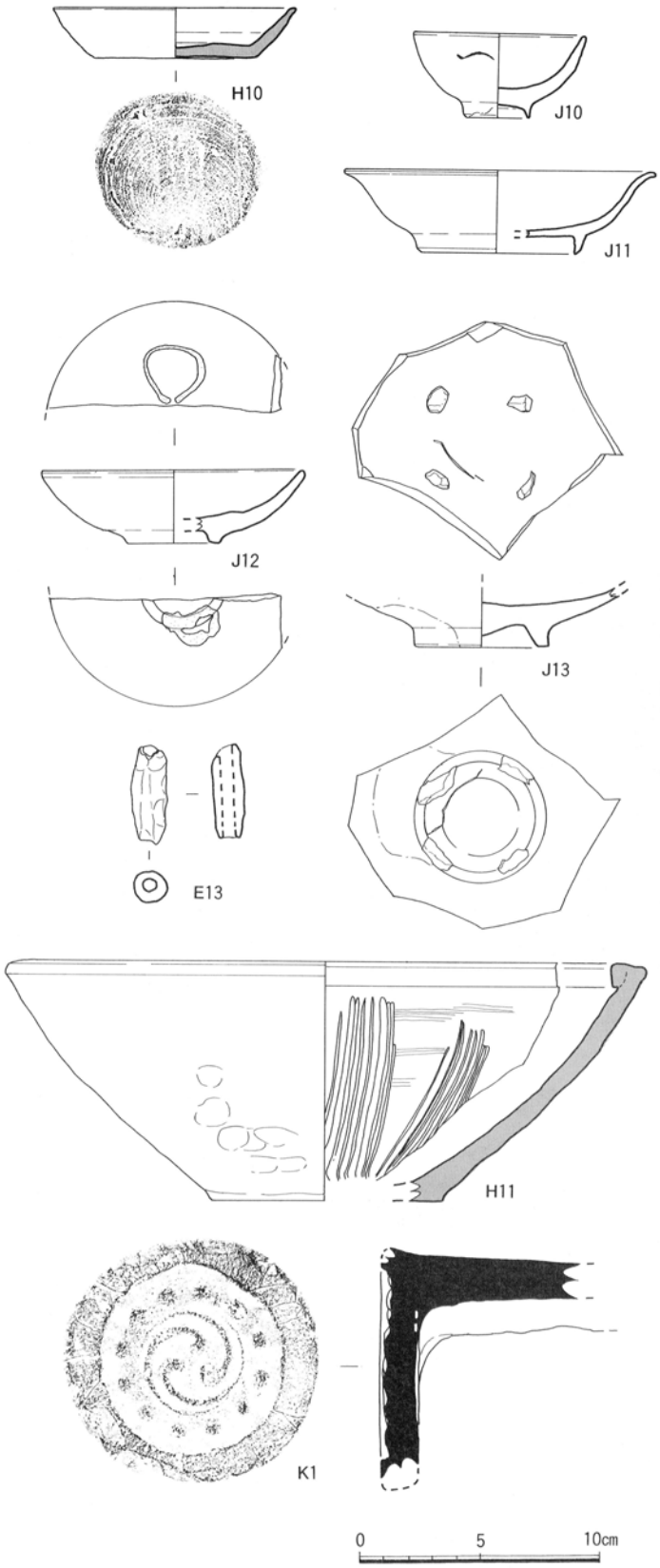
土師器　H10は、口径10cm、底径6.8cm、器高2.1cmの皿である。

磁　器　J10は、染付の小碗。盃か。口径は7.2cm、底径は6.8cm、器高は3.5cmである。乳白色の釉薬をかけており、呉須の発色は悪く、文様は薄い。畳付は露胎で、高台外面には砂粒が付着している。J11は、中国明の白磁碗。復元口径は13cm、復元底径は6.4cm、器高は3.5cmである。畳付は、露胎になっている。J12は、青磁の碗。復元口径11cm、復元底径4.1cm、器高3.1cmである。全面に暗黄緑色の釉がかけられている。気孔が39個あり、高台の一部は露胎である。高台周辺と見込みには、目が残る。唐津焼か。J13は、白磁の碗。底径は2.5cmで、畳付と高台内底部は、露胎になっている。底部外面の一部も釉がかかっていない。器面には、細かな貫入がある。見込みと高台畳付に各４個の目跡が残っている。また見込み内底には、亀裂がある。

瓦質土器　H11は、擂鉢。復元口径は28.7cm、復元底径は9.7cm、器高は10cmである。底部外面には、板状圧痕があり、体部外面は、指押さえと横ナデ調整である。内面は、ハケ目調整。

土　錘　Ｅ３は、土錘の完形品。全長4.1cm、最大径は1.5cm、孔径は5.0～5.5mmである。全体に指圧痕が残る。

瓦　類　Ｋ１は、巴文の菊丸瓦である。石組みの上面から出土したが、組み込まれていたわけではない。瓦当部の最大径は、10.4cm。巴文の尾は細く長いが、次の巴に接してはいない。珠文は、12個である。灰白色で、燻し瓦ではない。



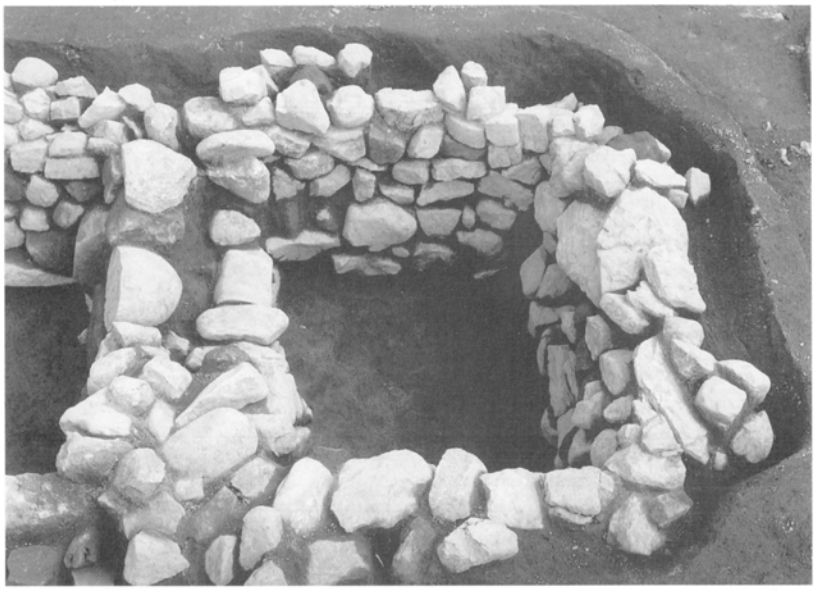
29　遺物実測図（縮尺1/3）

SX07石積土壙

Ⅱ区Ｃ３グリッドに SX08と南北に並んで見つかった。この２基は、保存状態が良好ということもあって、25基の石積土壙の中では最も整った形状をしている。289個の石を用いているが、下段に大きな石を据える以外は、ほぼ同じような大きさの角礫で積み上げている。小振りの石は小口積みにするのが多く、各壁は、ほぼ垂直に６～８段立ち上がっており、北壁だけがわずかに外に開いている。南壁の途中に石がない部分があり、後世に抜け落ちたのか不明。SX08との先後関係が問題だが、底のレベルはSX08より15㎝ほど低いこと、南北断面で明らかなようにSX08の南壁がSX07の北壁腰石を利用していることなどから、SX07が先に構築されたと判断した。

SX08石積土壙

SX07の北側に接して位置している。先のような理由からSX08を後の構築と考えたが、同時に使用されていた可能性がある。SX08より大きめの石が用いられているので、点数は182個と少ない。底内法は66㎝×100㎝あり、四壁の腰石は、SX07と同じように南北壁を東西壁が挟み込んで積み上げている。各コーナーには力石は見られない。SX07の四壁がほぼ垂直であるのに対し、SX08は外に開く。



30　SX07石積土壙

31　SX08石積土壙

遺　物　土師器、瓦質土器、陶器、染付が少量出土した。なおJ14～16、Ｔ４、Ｓ８・９は、石組みとその掘り方からの出土。

土師器　H12～14は、土師器皿。H12は、粘土紐の接合痕が残る。

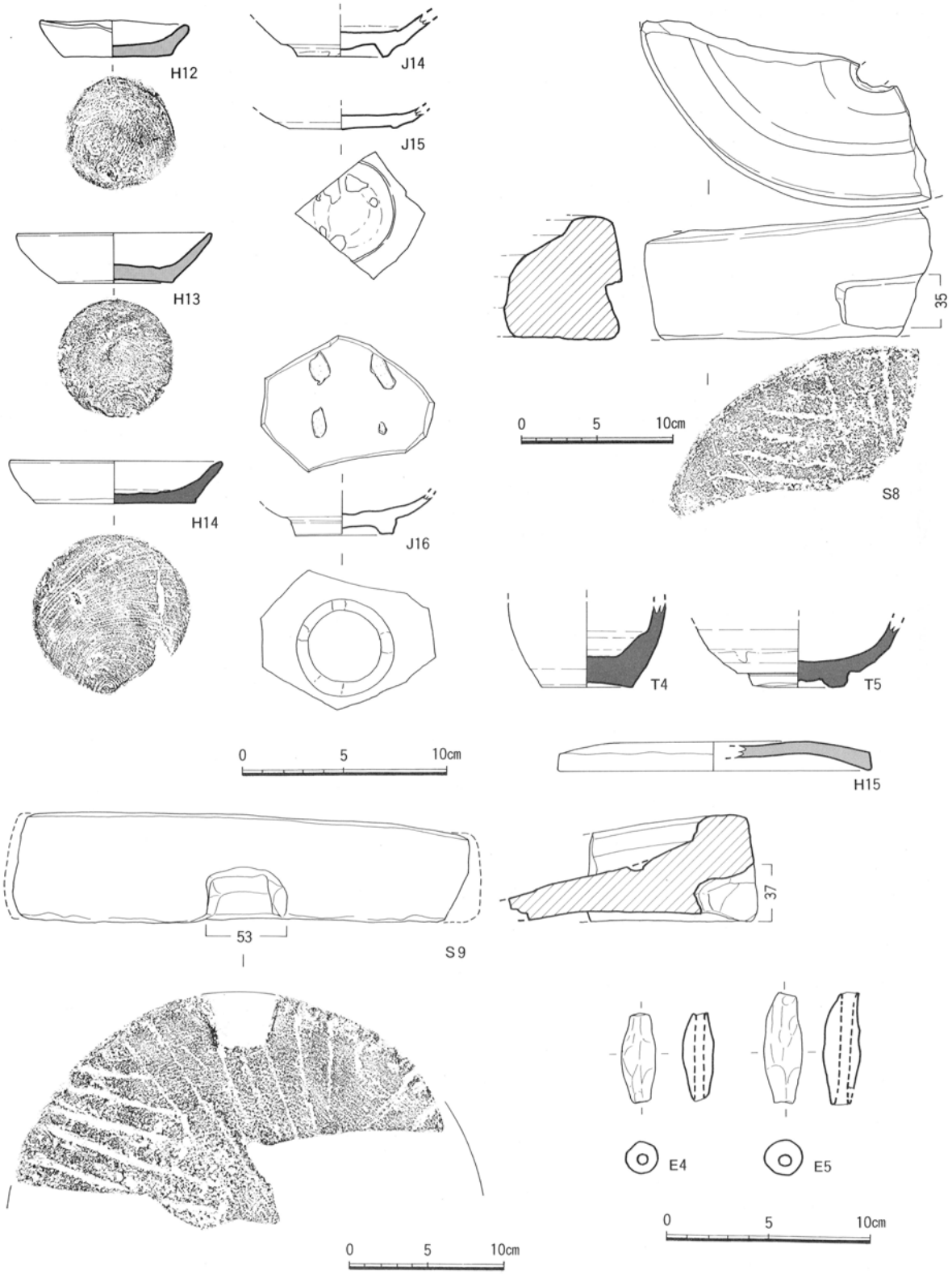
磁　器　J14は、青磁の碗。見込みと高台の内底部は露胎。J15は、瀬戸焼の青磁碗であろう。底部は露胎で、目跡が残る。J16は、白磁の碗である。全面に、黄白色の釉をかけており、貫入がある。

石製品　Ｓ８は、挽き臼の上臼である。胴側面には、手がけと思われる窪みが彫り込まれている。擦り面の目は不鮮明である。

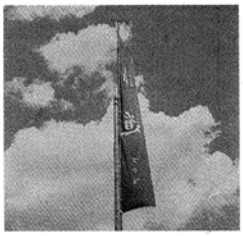
陶　器　Ｔ４は、壺と思われる底部の破片。底部は回転糸切り痕が残っている。体部には、茶色の釉をかけている。Ｔ５は、赤茶色の釉をかけた碗。底部外面から高台は、無釉。瀬戸焼か。

瓦質土器　H15は、瓦質の蓋。中央には摘みがあったのかも知れない。

土　錘　E4は、全長4.4cm。E5は、全長5.5cm。大小2個の土錘が出土した。
石製品　S9は、挽き臼の上臼。擦り面は、使用による摩耗が激しい。



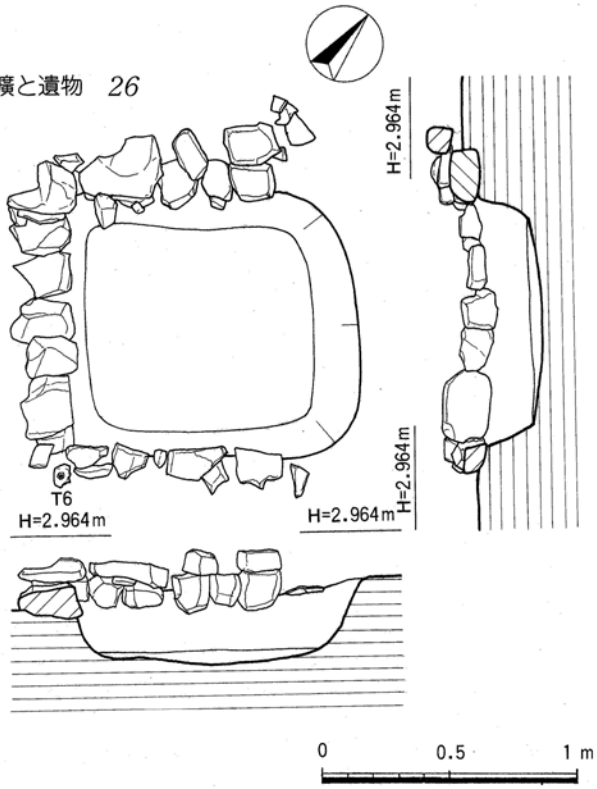
32　遺物実測図（縮尺1/3・1/4）



SX09石積土壙

Ⅱ区A４グリッドの１面で検出した。SX02とSX05の間に挟まれている。掘り方が明瞭ではないが、積み石のない東辺の輪郭によると隅丸方形で、大きさは96㎝×96㎝程に復元できる。北、西、南壁も大きく削平されたのか、わずかに１～２段しか残っていない。角礫が多く用いられ、積み方は小口に限っていない。これらは掘り方の周縁上に積み上げられており、おそらく当初の掘り方はさらに大きく、２段掘りになっていたのだろう。

34　SX09石積土壙



33　SX09石積土壙実測図（縮尺1/30）

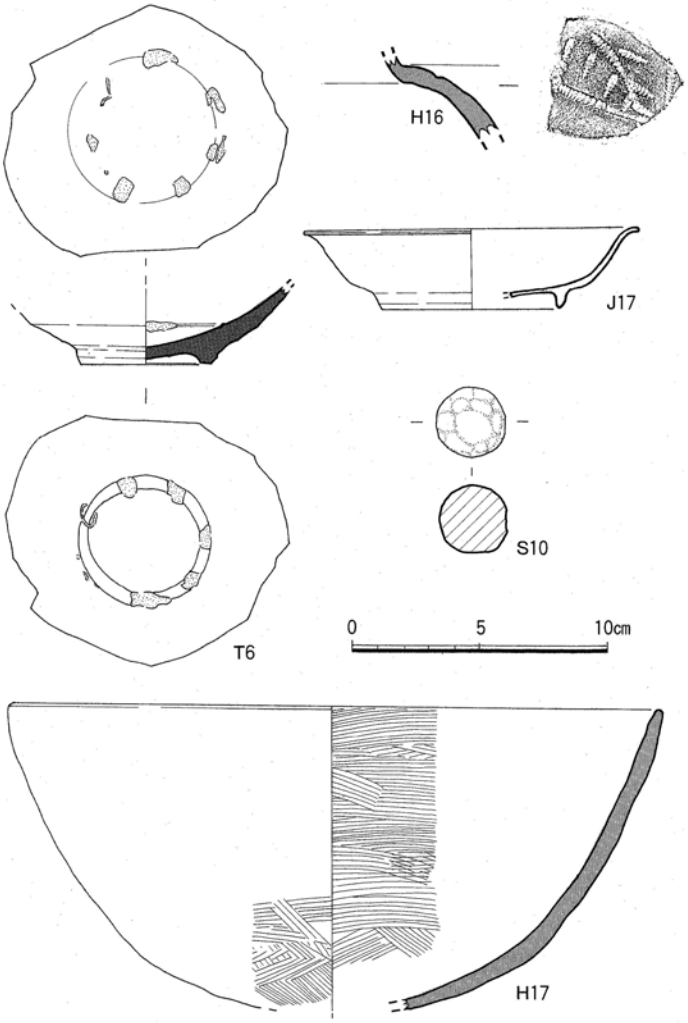
遺　物　出土した遺物の種類は、土師器、瓦質土器、陶器、青磁と染付の磁器、不明鉄器がある。量は多くない。

陶　器　Ｔ６は、唐津焼の碗。全面に暗黄緑色の釉がかけられ、見込み内底と高台畳付に、砂目がそれぞれ７か所残っている。

磁　器　J17は、中国明の白磁碗。薄手の作りで、口縁部が小さく外反する。畳付の一部には、砂が付着している。復元口径13㎝、復元底径6.8㎝、器高3.2㎝。

土師器　H16は、肩部の破片なので形状不明。板状工具を押しつけて描いたような木葉の文様がある。壺か。H17は、土鍋である。復元口径は、25.6㎝。外面には煤が付着している。底部内面にも煤状のものが見られるが、食物か判断できない。

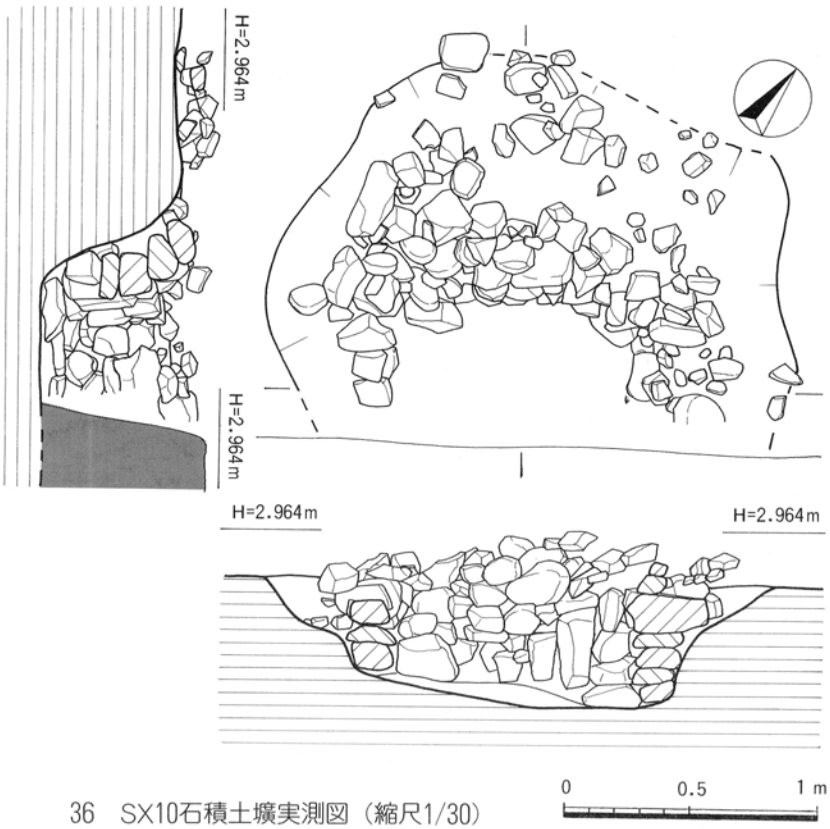
石製品　S10は、丸く加工した石球。最大径は2.8㎝で、全面が敲打されている。



35　遺物実測図（縮尺1/3）

SX10石積土壙

東列の最南端の石積土壙である。１面で検出したが、南側半分が発掘区の外側に入り込んでいるために全形を知り得ない。土壙は２段掘りされているが、上面のプランは、他の石積土壙が整った方形であるのに対し、隅丸の不整方形で、しかも底部は平坦でなく東に傾いている。下段にやや大きめの石を使っているが、不揃いで、積み方も統一性がない。また上段の周囲には同じような石が散乱し、いかにも雑然とした印象を与える。積み石の中に陶磁器などの破片が混入していることからして、長く放棄されていたと考えられ、この面は当時の地表面に近かったと思われる。



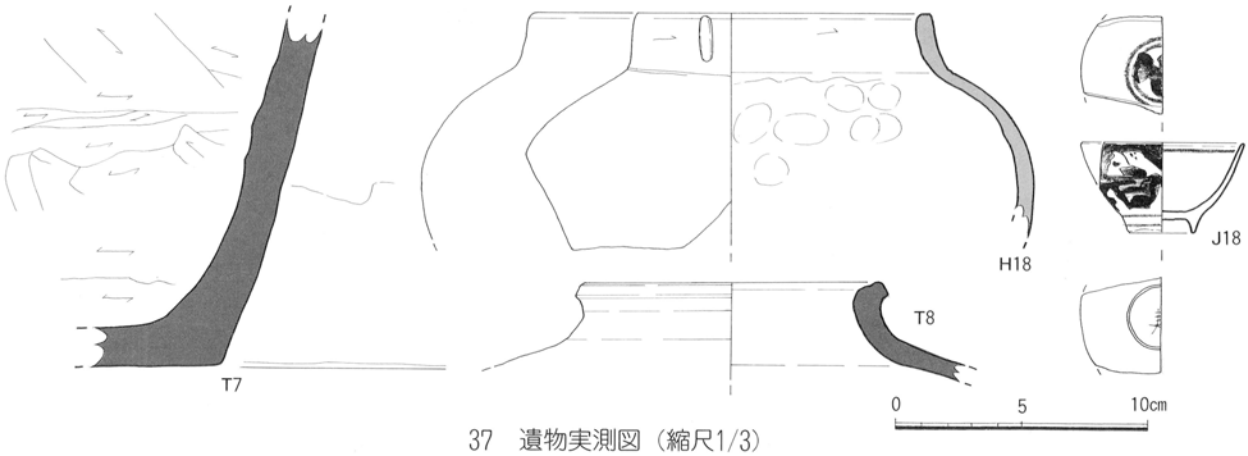
36　SX10石積土壙実測図（縮尺1/30）

遺　物　発掘区外に出ていることもあって、遺物の量は多くない。うち４点を図示した。

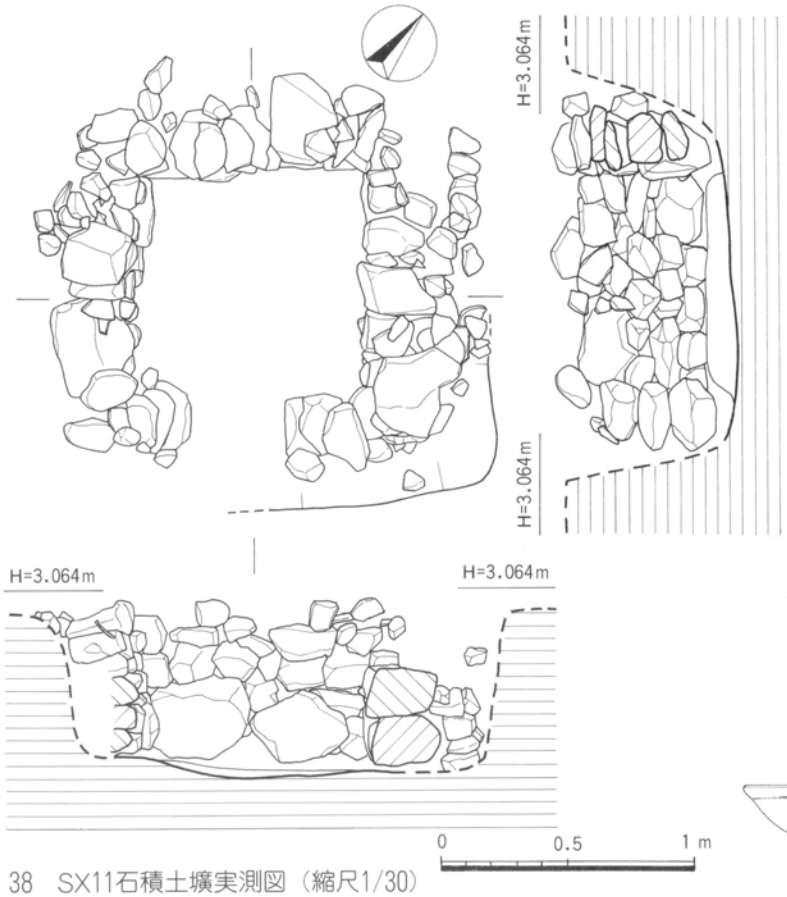
陶　器　Ｔ７は、備前焼の甕か壺の底部破片。堅く焼き締まっており、外面には明赤褐色の釉がかけられている。内面は横、斜め方向に板状工具でナデている。外面は主に縦方向のナデ調整である。Ｔ８は備前焼の壺の口縁部。復元口径12.4㎝で、釉は緑褐色に発色している。

瓦質土器　H18は、復元口径16㎝の釜。やや内側に傾きながら立つ口縁部には、棒状のスタンプ文がある。胴部内面には、指圧痕が残る。口縁部と胴部外面は、丁寧な横ナデ調整である。

磁　器　J18は、染付の猪口。復元口径6.4㎝、復元底径2.6㎝、器高は3.6㎝である。文様は、外面と見込み内底に描いている。呉須の発色はよい。畳付は露胎で、器面の透明釉の中には、細かな気泡がある。高台内の銘は、略字の「寿」と読める。



37　遺物実測図（縮尺1/3）



38　SX11石積土壙実測図（縮尺1/30）

SX11石積土壙

Ⅰ区C4グリッドの１面で検出した。SX01、14の東に隣接して平行に並び、切り合ってはいない。掘り方は南北にわずかに長い隅丸方形で、200㎝×190㎝を測る。石積土壙は基本的には下段に大きめの石を、上段ほど小振りの石を使っているが、各壁とも上段にも大きな石が見られ、やや粗雑な積み方になっている。底内法は96㎝×96㎝、ただし南壁中央部は、現在失われており、当初からなかった事も考えられる。

遺　物　他の石積土壙と同じように、土師器、瓦質土器、磁器、鉄滓がコンテナ１箱分出土した。

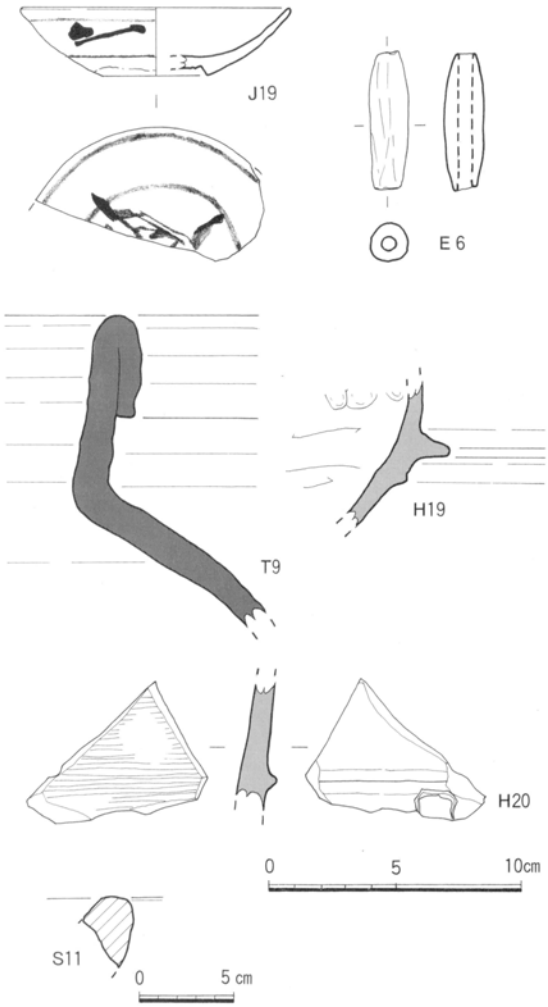
磁　器　J19は、中国明の青花皿。石組みの掘り方から出土した。復元口径は10.8㎝、復元底径は3.8㎝、器高は2.7㎝である。細かな貫入があり、高台は露胎。

陶　器　T９は、備前焼の甕である。わずかに開きながら直線的にのびる口縁部は、折り返して厚みのある作りをしている。明茶色を呈し、口縁端部と胴部外面には、自然釉がかかる。

瓦質土器　H19は釜の胴部破片。高さの異なる二つの凸帯がつく。この凸帯より下方には、厚く煤が付着している。H20の小破片は、火鉢であろう。断面三角形の凸帯が１条巡っており、その直下には、スタンプ文様がある。

石製品　S11は、小破片だが、茶臼の下臼、受皿の端部である。

土　錘　E６は土錘。１個のみが出土した。本調査区が、「息の浜」の海岸部に近かったことを示す遺物であるが、全出土数はけっして多くはなく、また、種類も限られていることもあって、漁具、漁網などの小屋や作業場を直接想定することはできない。



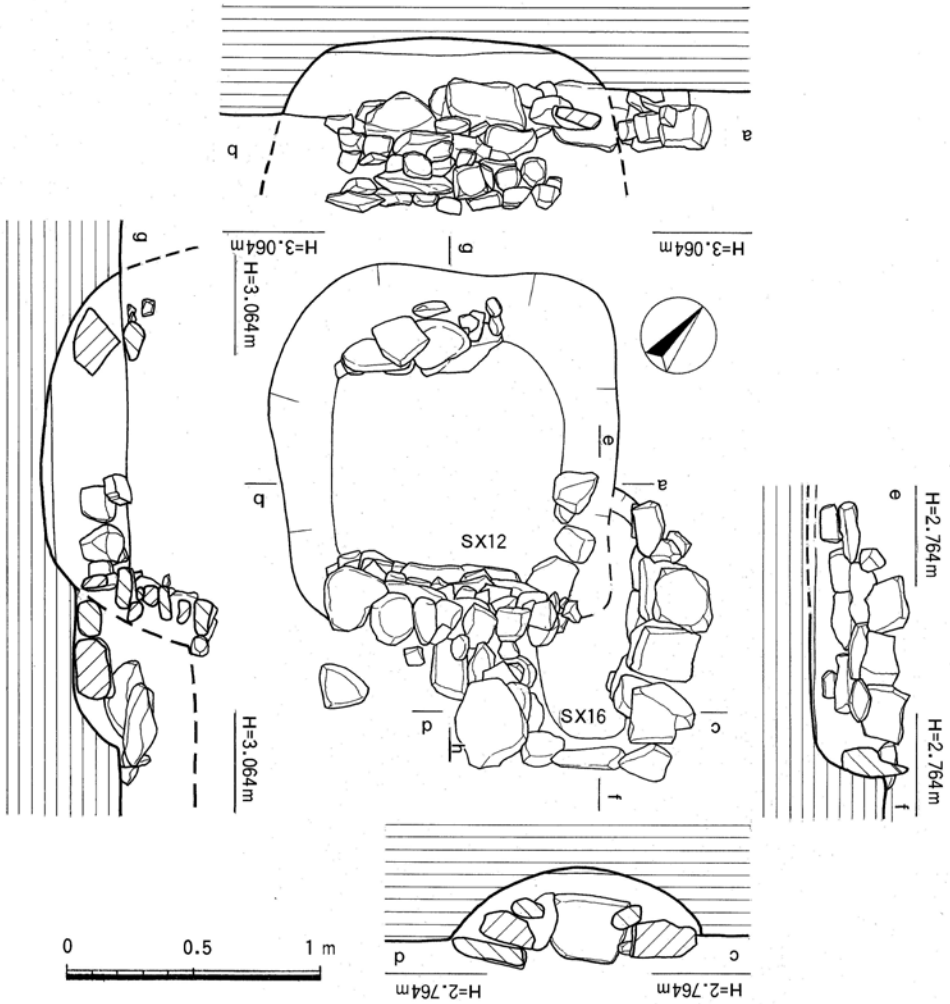
39　遺物実測図（縮尺1/3、1/4）

SX12石積土壙

Ⅱ区Ｃ３グリッドの１面で検出した。東列の石積土壙で、発掘区の中央にSX13と並んで位置する。掘り方は、隅丸方形で86㎝×80㎝、わずかに南北軸が長い。積み石は、東、西壁が失われ、北壁も完全ではない。南壁は通例のように下段に大きめの石を据え、上段にしたがい小振りの石を用いている。これらの石は、同じ割合で角礫が混用されている。この石積土壙で興味深いのは、南壁の下段に取り外しができる板石が使われていることである。上部の石を支える腰石の機能はもともとなく、水など中に溜めたものを取り出すなど別の役割を想定するべきだろう。SX16に南東隅が重なっており、SX16を切っていると考えたが、SX16の南壁にも同じような板石が据えられていることなどから、同時に築かれた可能性が強い。

遺　物　SX12からは、土師器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦類、ガラス片、鉄滓の種類の遺物が出土し、SX16からは、土師器、染付磁器、鉄滓が少量出土している。なお図示した遺物のうち、H21とH27以外は、SX12からの出土である。

土師器　H21は、灯明皿で、口径は9.8㎝、底径は7.6㎝、



40　SX12・16石積土壙実測図（縮尺1/30）

41　SX12・16石積土壙

縮尺1/2

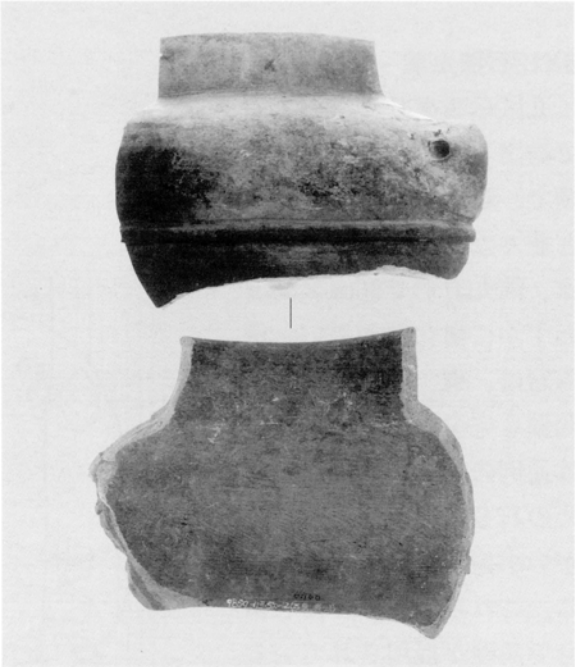
H21（SX16）

H22（SX12）

J20（SX12）

H23（SX12）

T10（SX12）



43　釜（H26）

T11（SX12）

B2（SX12）

0　1　2cm

T12（SX12）

H24（SX12）

H25（SX12）

H26（SX12）

0　5　10cm

H27（SX16）

42　遺物実測図（縮尺1/2·1/3）

器高は2.9㎝の大きさである。回転糸切り痕が残る平坦な底部から、体部は大きく外に開かないで立ち上がっているので、深みのある皿となっている。灯火器具としては、この深かさが必要だったのだろう。体部内面には、煤が付着している。H22の体部立ち上がりは、大きく外反し、口縁部近くでさらに外に開いている。石組みの掘り方から出土したもので、口径は8.0㎝、底径は3.8㎝、器高は1.8㎝である。底部外面には、糸切り痕は認められない。余分な粘土が付着し、また部分的に棒状圧痕が残っている。H28は、復元口径24.4㎝の土鍋。体部は半球状であるが、丸底から同じ湾曲ではなく、口縁部へ向けてやや直線的に外反している。器面の調整は、内面はハケ目であるが、外面には煤が付着し、確認できない。口縁部外面には、炭化物が付着し、吹きこぼれか。

磁　器　J20は、明の青花碗。復元底径は、4.6㎝である。畳付は露胎で、呉須の発色が悪く、文様は薄い。高台内底には、銘を簡略化したと思われる格子状の文様があり、深緑色を呈する。

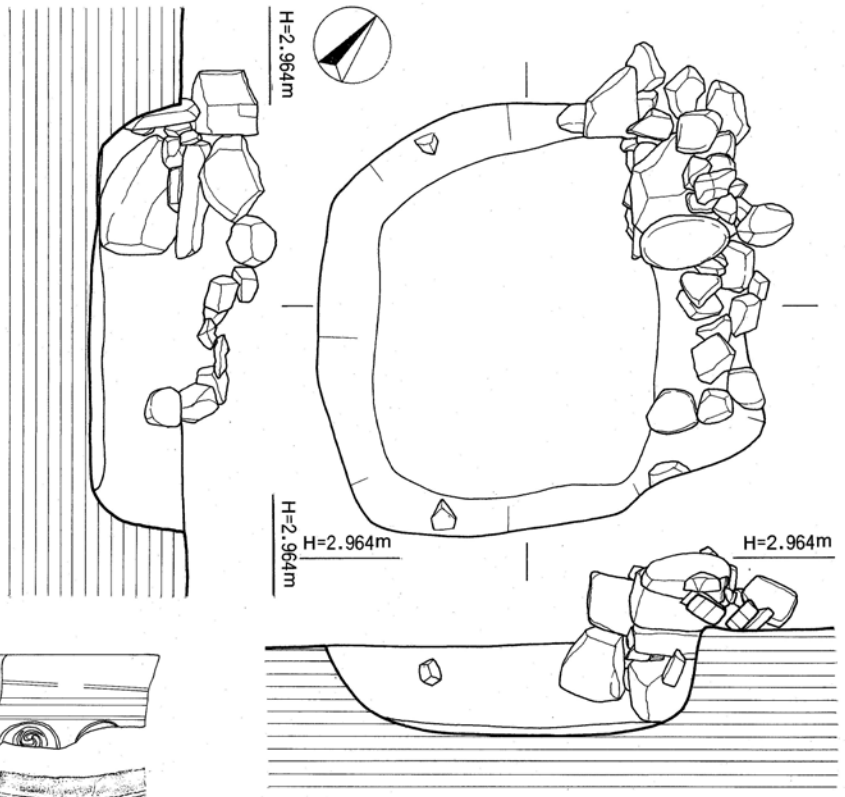
瓦質土器　H23の口縁部破片は、甕か。石組みの掘り方から出土した。口縁部は、横ナデ調整の後に、斜線の文様を加えている。H25は瓦質の擂鉢で、底径は12.5㎝である。内面底部には、おろし目の役も果たしたと思われるが、海星状の文様を３本の沈線で描いている。おろし目は、３本１組の沈線で、間を開けて刻んでいる。H24は湯釜と思われる胴部から口縁部の破片である。丸味のある胴部から、内側に傾いて直線的にのびる口縁部が付く。端部は丸くおさめ、さらに口縁下に沈線を巡らしているので、一層丸味のある断面になっている。復元口径は13㎝。頸部には、花文様のスタンプがあり、その直下には、２本の沈線が巡っている。口縁部にはハケ目調整痕が残っており、作りは丁寧である。肩部には、耳の跡が残っていることから、相対する２か所に耳が付いたのであろう。H26は、石組みの掘り方から出土した湯釜。復元口径は、15.4㎝。凸帯部の最大径は、25.1㎝である。外面の調整は、凸帯より下方は横ナデ、凸帯より上方は幅広のみがきとナデ、頸部には箆磨き状の沈線が残っている。口縁部は、ナデ調整。内面の調整は、口縁部がハケ目とナデ、頸部はハケ目調整の後に指押さえを加えて整形している。胴部内面は、ハケ目調整である。耳が２か所に付き、それより下方は、使用時の煤が厚く付着している。

陶　器　T10は復元口径11.6㎝の碗。復元底径は5.0㎝、器高は4.2㎝である。白灰色の釉がかけられているが、高台だけは無釉で露胎となっている。胎土は、細かな粒子がそのまま固まったようにザラザラし、緻密ではない。T11は、擂鉢の破片。全体に無釉で、暗い茶色となっている。内面には、底部側から口縁部側に向かって書かれた墨書があるが、解読できなかった。おろし目は、10本１組である。外面にも沈線状の横線が走り、凹凸が目立つ。T12は、復元口径29.2㎝の大型の鉢である。胴下半部を欠いているが、平底から外湾しながらのび、半球状に近い形状になるのだろう。口縁部は肥厚して、逆三角形の断面となっている。その上面は、平坦でなく浅い２条の沈線が巡り、微妙な凹凸を作る。朝鮮製か。

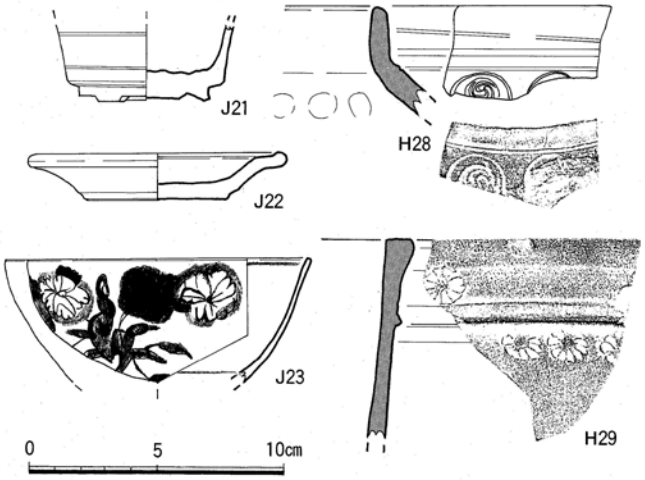
金属器　Ｂ２は銅銭で、石組みの掘り方から出土した。一部欠損しているが、保存状態はよく、「至道元寶」と読める。中国北宋、初鋳は995年である

SX13石積土壙

発掘区のほぼ中央のⅠ区C３グリッド１面で検出した。すぐ西側にSX12とSX16の２基が並んでいる。積み石は東壁だけしか残っていないが、掘り方があることから石積土壙とした。その掘り方は、隅丸方形で168㎝×175㎝、深さは74㎝を測る。東壁は大小の石を積み上げているが、下段の石が失われている部分もあり、石の抜き取りなど破壊の度合いがよほど激しかったのであろう。



44　SX13石積土壙実測図（縮尺1/30）



45　遺物実測図（縮尺1/3）

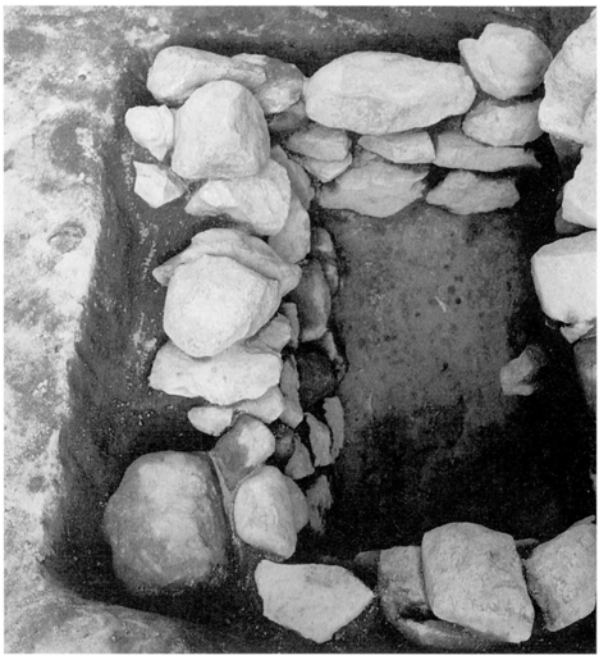
遺　物　図示した遺物の他に、土師器、陶器、ガラス、瓦類、鉄滓が出土した。

磁　器　J21は青磁の香炉。J22は、瀬戸焼の皿。

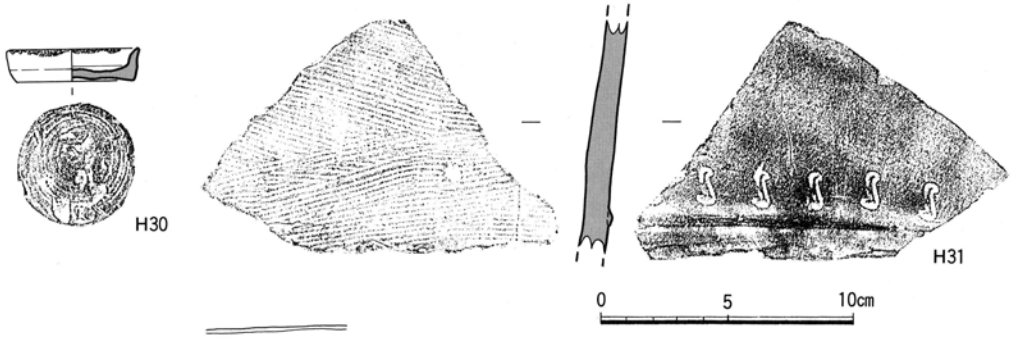
瓦質土器　H28は釜で、巴文に似たスタンプがある。H29は火鉢で、凸帯に接してスタンプの菊花文を横につなげている。

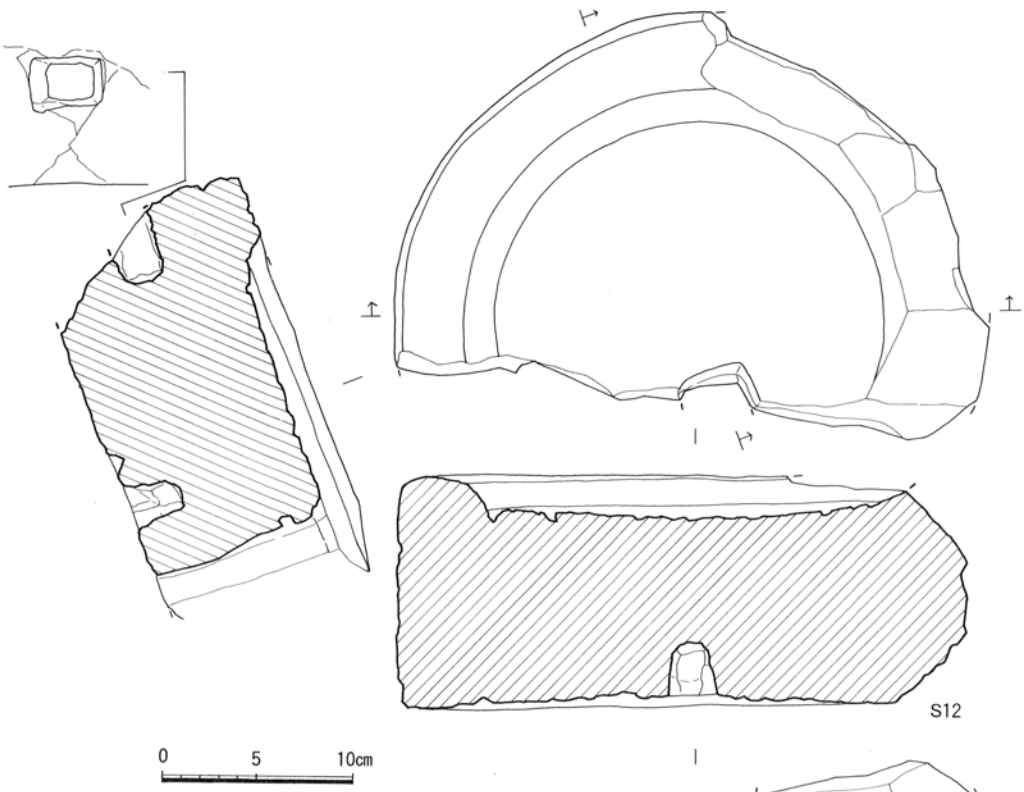
SX14石積土壙

Ⅰ区１面C３グリッドにある。先述したようにSX01の北側に接し、先後関係が問題であるが、東壁の不連続や底面の深さの違いなどからSX01よりも古い時期に構築されたと判断した。したがって底内法は78㎝×50㎝であるが、本来の南北軸はさらに長かったのであろう。壁は垂直ではなくやや外側に開いている。積み石の総数は56個、その比は２：１の割合で角礫と円礫が使用されているが、この割合は、構築方法や使用目的など特別な意図によるものではなかろう。



46　SX14石積土壙





47　遺物実測図（縮尺1/3·1/4）

遺　物　土師器、瓦質土器、陶器、石臼と磁器の青白磁、染付などの遺物が少量出土したが、磁器と陶器は、小破片のために、図示できなかった。

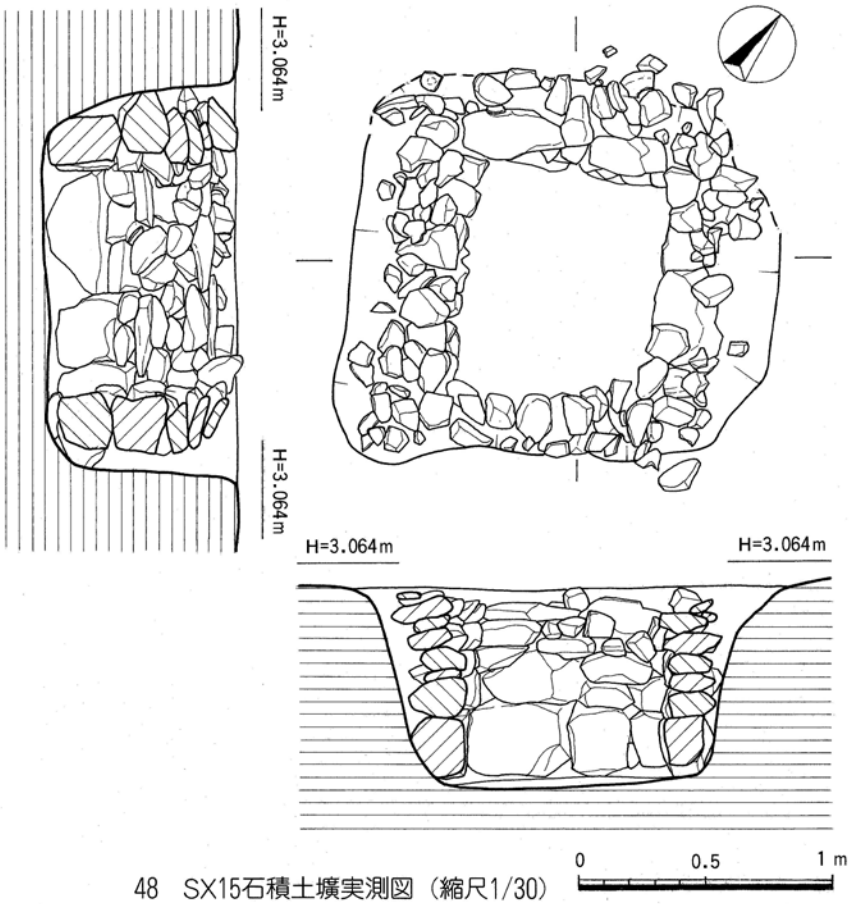
土師器　H30は、口径5.2㎝、底径4.7㎝、器高1.3㎝の小皿。直近くに立ち上がっている体部には、口縁部から煤が付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。

瓦質土器　H31は、火鉢の破片。小さな凸帯が１条巡り、その上方に意味不明のスタンプ文を等間隔で押している。破片では、大きさがわからないが、その湾曲からすると、かなり大型の器形が想像される。

石製品　S12は、挽き臼の上臼。復元径は32㎝、器高12.4㎝である。風化の影響を受けやすい石材のようで、表面に無数の穴ができている。擦り面の目は、６分画であろうか。

SX15石積土壙

Ⅰ区１面Ｃ４グリッド、東列の南寄りにある。四方のコーナー部分は、裏込め石の補強のために外側に余分に掘り込んでいる。南北軸がわずかに長い長方形であり、東列の中では、もっとも長軸が北に振れている。積み石のほとんどは角礫で、一段目に立方形に近い大きめの石を据え、次第に小振りの石を使っている。北西隅にはSX19が接し、また北側には石積土壙として遺構番号を与えていないが数個の石が並んでいる。これらとの切り合いは認められない。

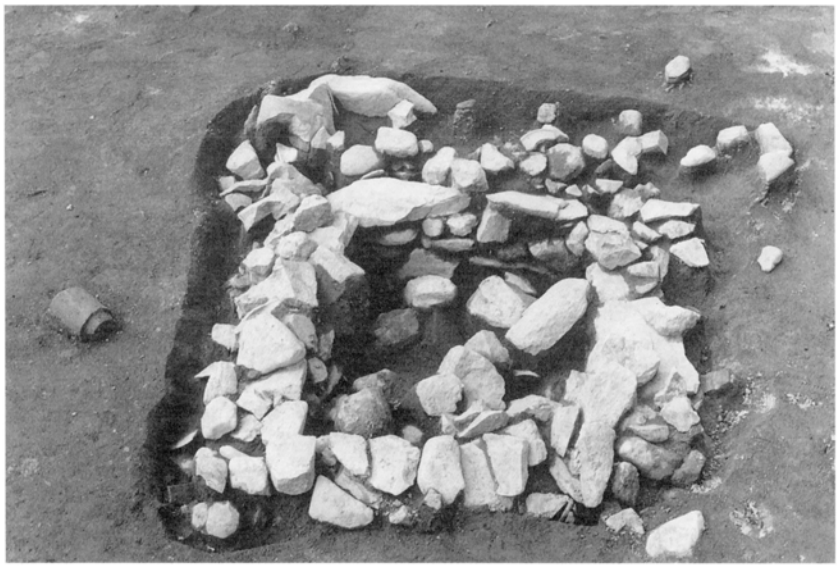


48　SX15石積土壙実測図（縮尺1/30）

遺　物　図示したのは、土師器１点、瓦質土器３点、石臼２点の計６点に過ぎないが、この他に、土師器、瓦質土器、瓦類、鉄滓などの遺物が、コンテナ１箱分出土している。

土師器　**H32**は、口径8.0㎝、底径4.7㎝、器高1.8㎝の皿である。回転糸切りの底部は、やや上げ底気味となっており、体部は大きく外反して、そのまま尖り気味の口縁部となっている。

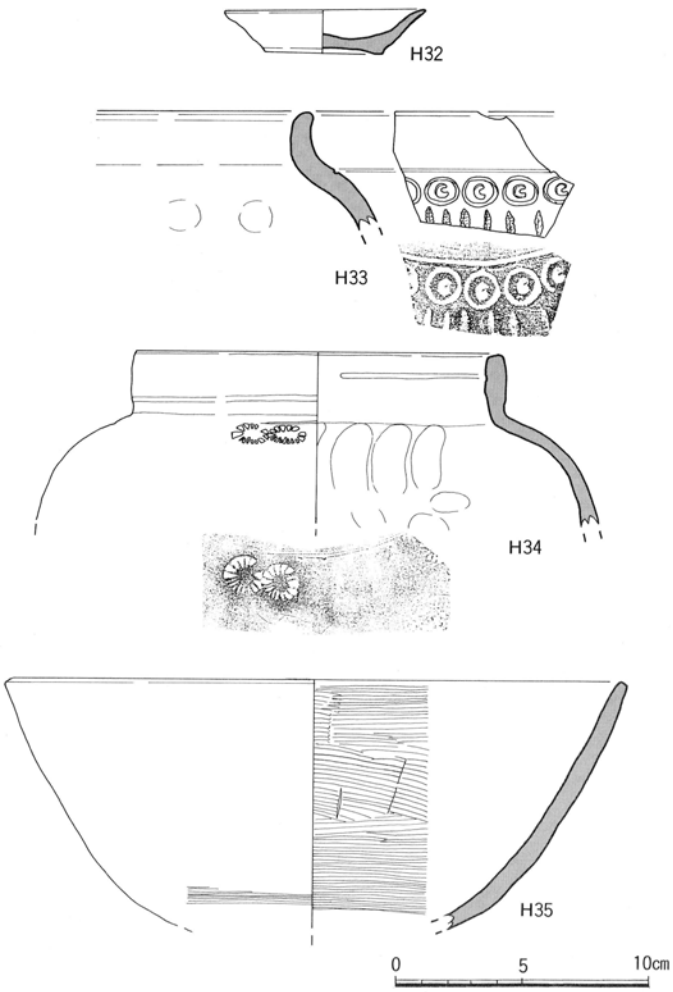
瓦質土器　**H33**は、釜の口縁部で、口径は14.6㎝に復元できる。肩部には上下２種類の文様が並び、その上に接するように沈線１条が巡っている。**H34**も釜であるが、口縁部が直立しており、内面には、雑な沈線があり、外面は横ナデ調整を施している。全面に横ナデ調整を加えており、肩部の内面には、指圧痕が並んでいる。肩部外面の最も張りの

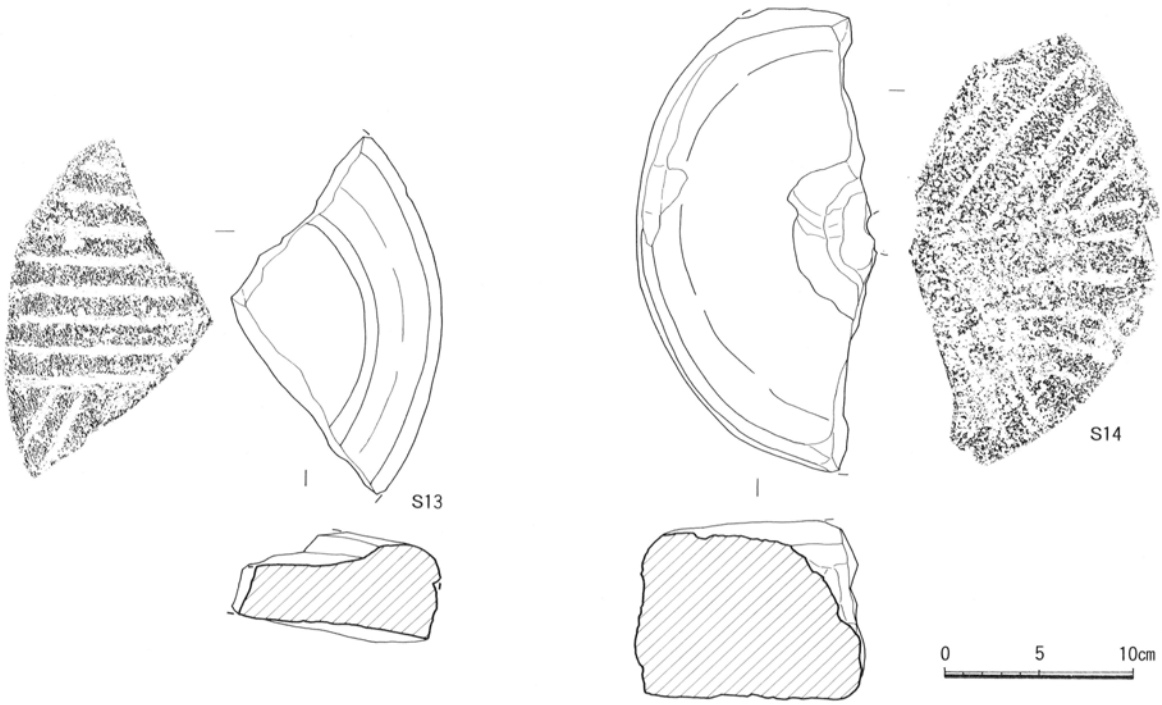


49　SX15石積土壙

ある部分には、２個１組の菊花文をスタンプしている。全周では、６～７組あったのであろう。この文様よりも下方には、煤が付着し、日常の器であったことを示している。H35は、口径24.6㎝の土鍋。内面と底部外面は、ハケ目調整である。外面には、煤が付着し、口縁部近くには、吹きこぼれと思われる炭化物も付着している。

石製品　S13は、挽き臼の上臼である。復元径は30㎝で、器面は滑らかな作りである。上面の縁辺部には、幅４㎝程の範囲で擦痕が残っている。擦り面の目は、６分画であろう。S14も同じように挽き臼の上臼で、別個体である。復元径は27.4㎝、残存高は9.5㎝である。器面は、風化も手伝って痘痕状に荒れている。擦り面の目は、６分画程か。

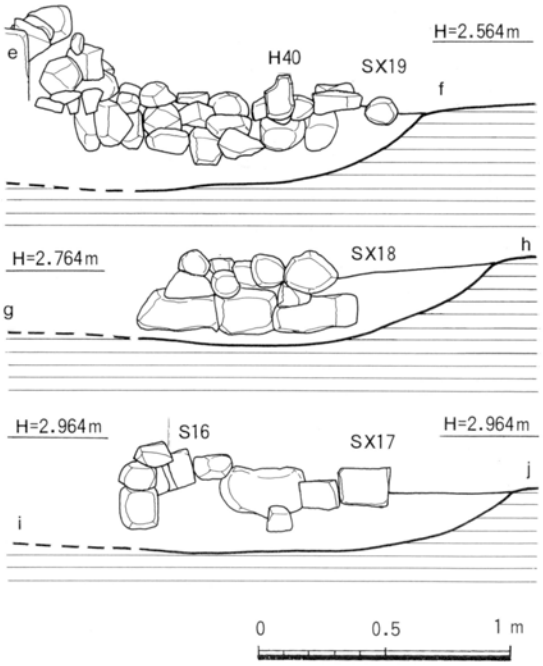




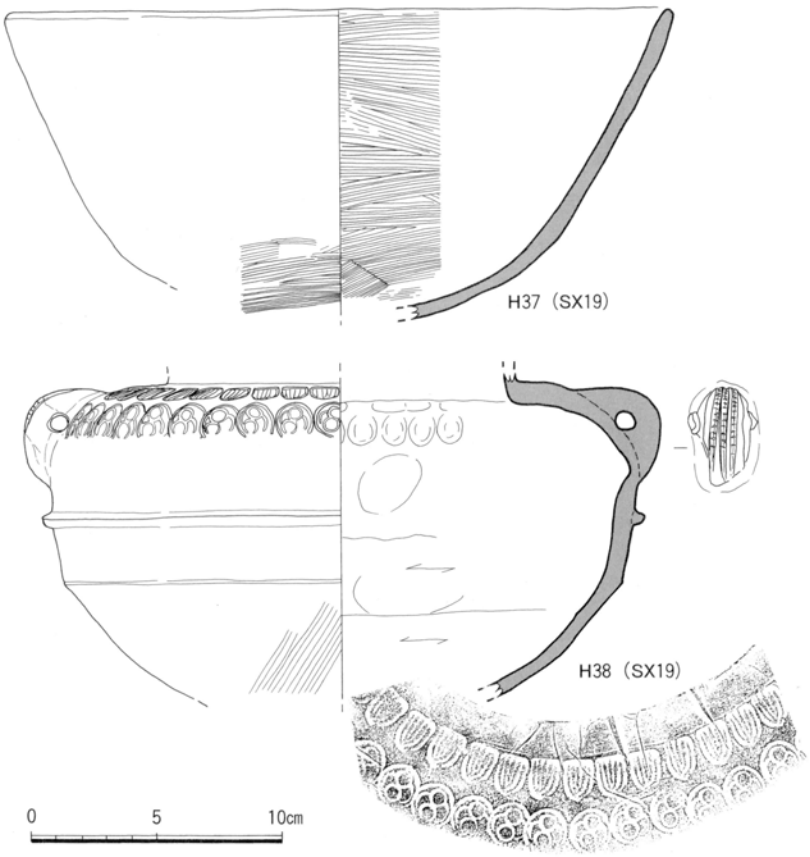
50　遺物実測図（縮尺1/3･1/4）

SX16石積土壙

他に比べ規模が小さく、また長方形という平面プランから、単独の石積み土壙ではなく、SX12の付設施設の可能性も想定し、SX12との構築方法や使用している石材の違いなど細かな観察を、石組みを解体しながら行った。その結果、SX12の南東壁最下段でL字形に石を並べてSX16を構築していることを確認した。またSX12に記しているように、両方の腰石に取り外し自由な板石が同じように組み込まれていることから、二つの石積土壙は、一体のものと断定するに至った。ただしSX12と重なる部分では、SX12の掘り方の線が一部認められたことからすると、先にSX16が廃棄されて完全に埋まった後に、SX12だけが積み直しなどの補修を加えて、単独で使用され続けた可能性が高い。



51　SX17・18・19石積土壙実測図（縮尺1/30）



52　遺物実測図（縮尺1/3）

SX17、SX18、SX19石積土壙

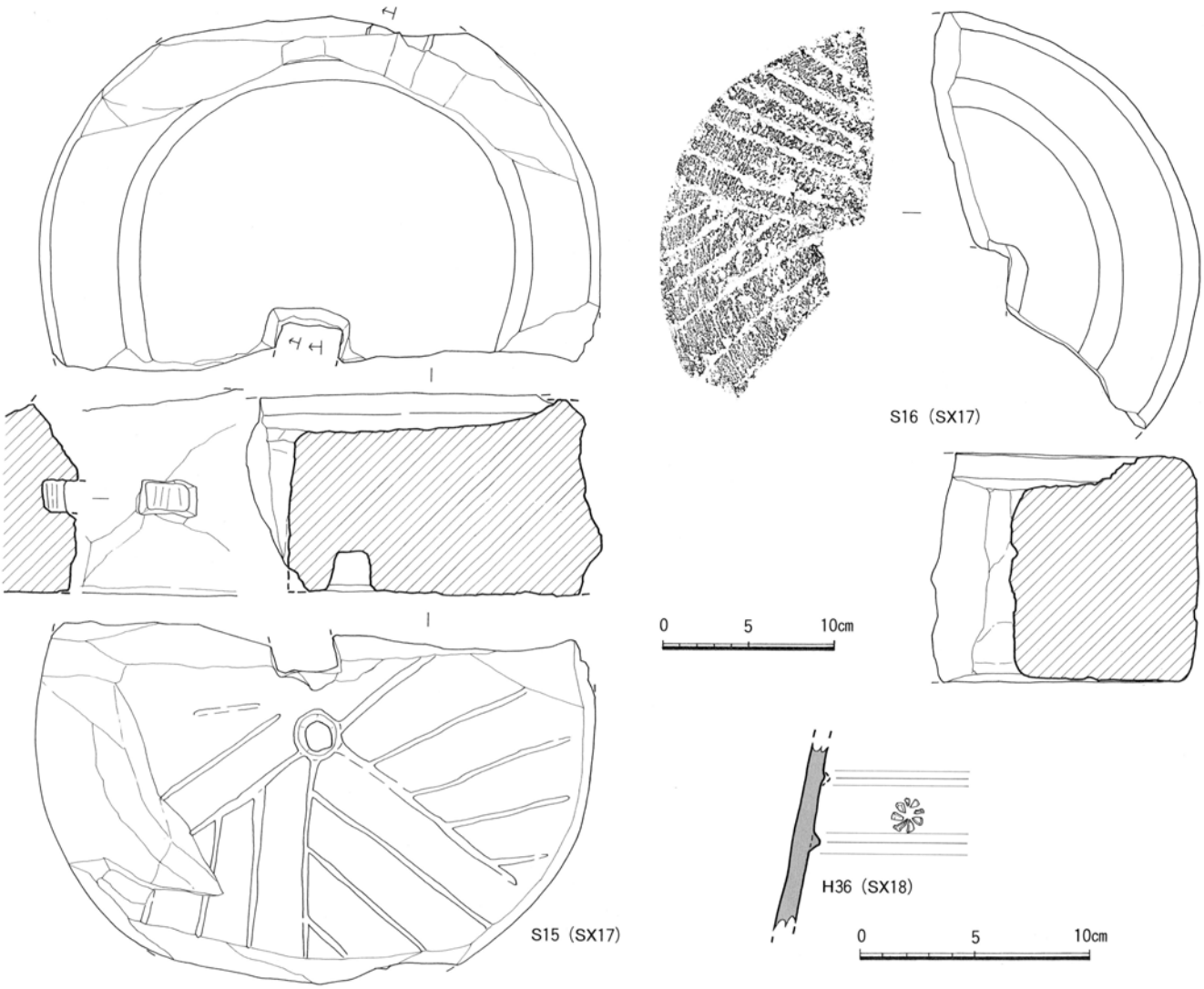
Ⅰ区1面C4グリッド、東列の中央よりに位置する。SX01の南壁に平行して3列の石列があり、これを北側からSX17、18、19とした。検出当初は、SX01を保護するような外部施設的な用途を想定したが、掘り込んで数段積み上げていること、その構築方法が他の石積土壙と類似していることなどから、石積土壙が破壊された可能性を考えた。とすると、3列とも小口面が北側のSX01を向いていることは、SX01より最も遠い位地のSX19から順に作り替えられたことになる。壙底のレベルは、SX01とほぼ同じであること、石臼が石組みの中に転用されていることなども、石積土壙と推測する一根拠であるが、積極的に裏付けるものではない。

遺　物　土師器１点、瓦質土器１点、石臼２点を図示した。

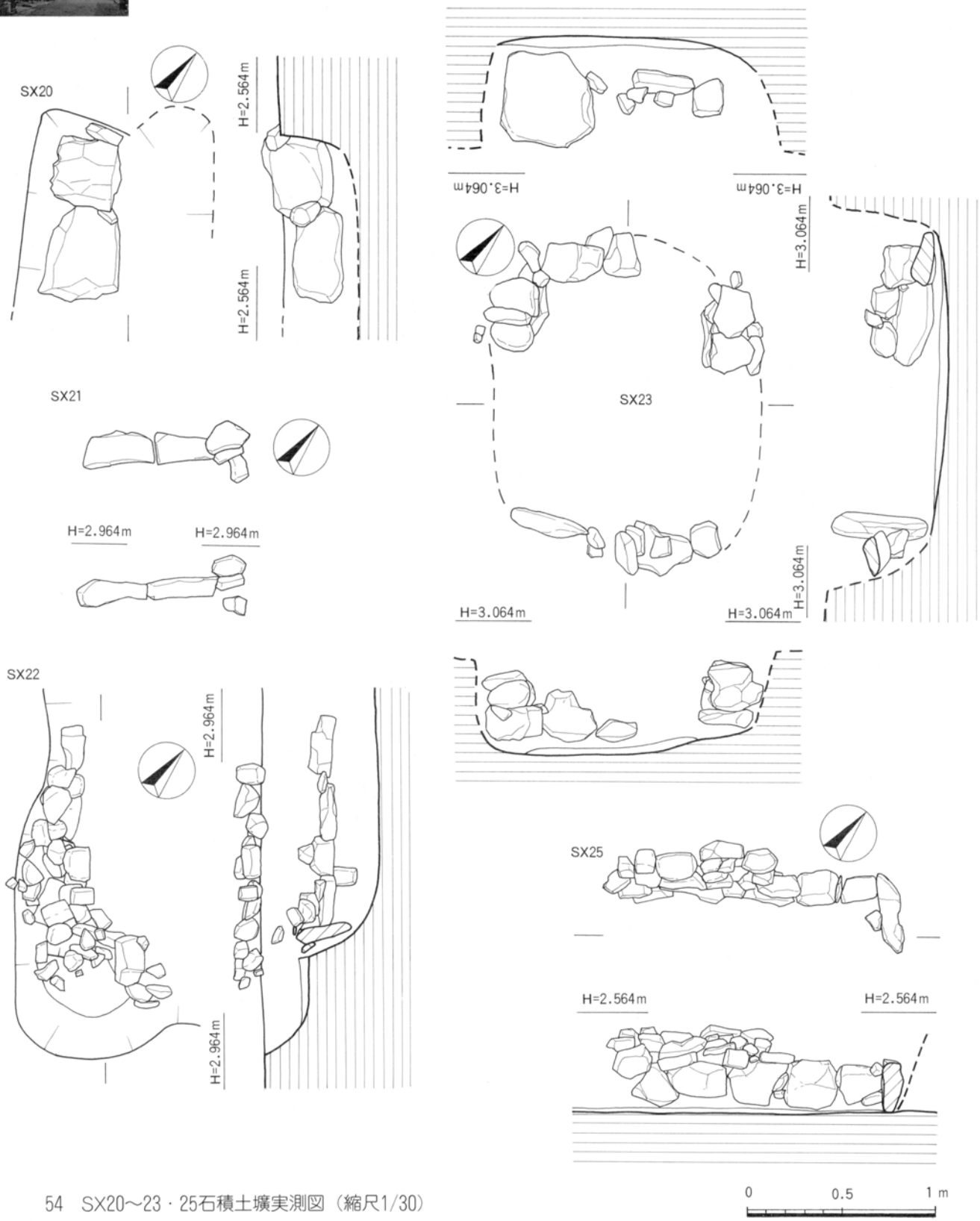
土師器　H37は、土師質の土鍋。口縁部径は26.6㎝で、外面には、煤が付着しており、底部内面は、黒褐色に焦げている。内面と底部外面は、ハケ目調整で、その工具の幅は、３㎝、条線は20本程の本数に復元できる。

瓦質土器　H38は、湯釜。外面はハケ目調整で、上半はナデを加えて、ハケ目を消している。内面の調整は、強く横ナデし、一部に指圧痕が残る。肩部には、２種類の文様がスタンプされて並んでいる。また二つの耳の背にも、３条の沈線を刻み、装飾性を高める工夫をしている。胴部には、断面三角形の凸帯を１条巡らしており、この下方には、煤が付着している。H36は、火鉢。２条の凸帯の間に菊花状のスタンプ。

石製品　S15とS16の２点は、SX17から出土した。S15は、挽き臼の上臼である。復元径は32.6㎝で、器高は11.7㎝である。擦り面の目は、６分画４溝式で、断面は、やや末広がりである。挽き手の差込み穴には、工具痕が残っている。器面全体には、海綿状に大小の穴が無数に開いている。S16も同じように挽き臼の上臼で、復元径は30㎝、器高は13.3㎝である。目は、６分画７溝式であろう。幅４㎝の範囲で、使用時の擦痕が残り、表面は摩耗してツルツルとなっている。目の断面形は薬研彫りのようにV字形ではなく、U字形に彫られている。



53　遺物実測図（縮尺1/3･1/4）



54　SX20～23・25石積土壙実測図（縮尺1/30）

SX20石積土壙　Ⅱ区Ｃ２グリッドの１面下層で検出した。いま２個の長方形の石が並んでいるだけで、掘り方も他の石積みも見当たらないが、方向が大きくずれていないこと、西側背面には、掘り方のように段掘りされて据えられていること、さらに腰石と判断するには適当な大きさであることなどから、石積土壙として遺構番号を付けた。

SX21石積土壙

発掘区北壁面で検出した。東列最北端の石積土壙である。本体部は、北側の発掘区外に入っている。

SX22石積土壙

SE04に大半を切られている。掘り方は２段掘りで、西壁の積み石が上下２段になっている。二つの石積土壙が上下に重複している可能性もある。

SX23石積土壙

残っている石を繋ぐと石積土壙の形状となる。しかし積み石は、安定感がない。特に南壁には薄い板状の石を立てており、下段の石とは思えない

SX24石積土壙

Ｃ２グリッドの２面で検出した。東列の中心軸より外れ、さらに掘り方自体も北に振れる平行四辺形である。下段の腰石は、大きめの石が用いられており、特に東壁は一回り大きい３個の石が据えられて、安定感がある。

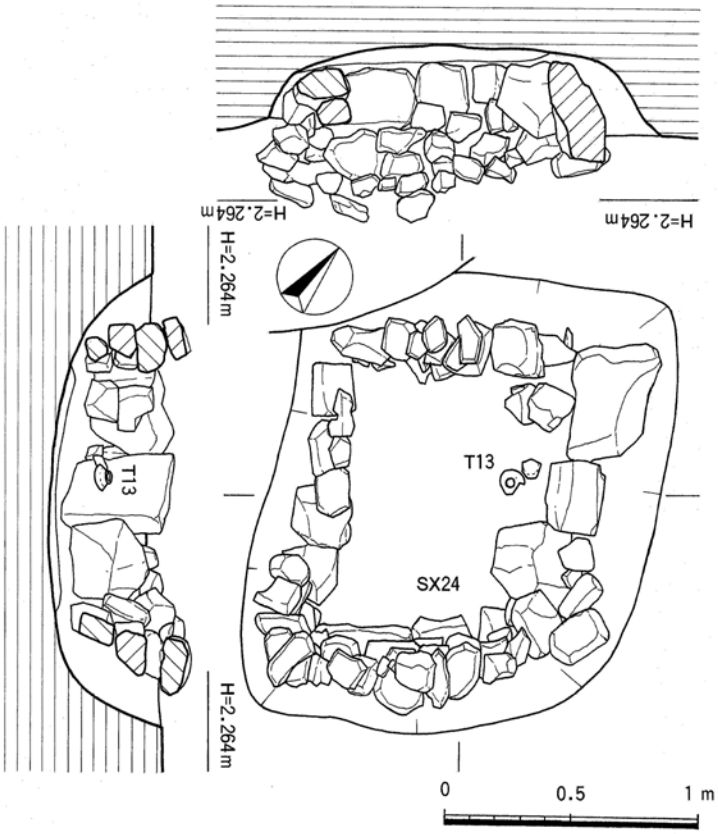
遺　物　SX24からは、土師器、瓦質土器、鉄滓、焼土塊が少量出土した。

土師器　H39は、回転糸切りの皿、底部の厚さは均一ではなく、体部も微妙な凹凸がある。

陶　器　T13は、蛇の目状高台をもつ碗。高台の削り出しは粗雑。見込内底と高台に目跡。

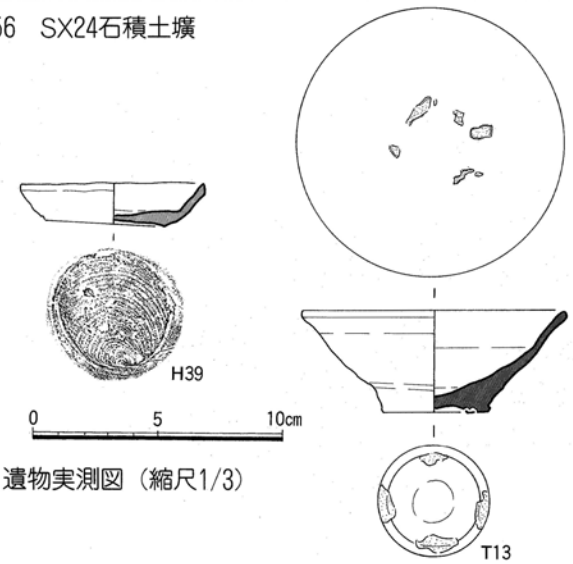
SX25石積土壙

２面で検出した。北壁と、東壁の石１個が残っているにすぎないが、北壁が、数段積み上げてあることや、方向が他の石積土壙と大きく異ならないことなどから、石積土壙とした。積み石は、下段に大きめの方形石を据えて、内側の面を揃えている。東壁に、わずか１枚だけ残っている板状の石は、厚さ15cmと薄く、この上部に積み石をするには適していない。開閉するような機能も考えられる。



55　SX24石積土壙実測図（縮尺1/30）

56　SX24石積土壙



57　遺物実測図（縮尺1/3）

SK08瓦溜め土壙

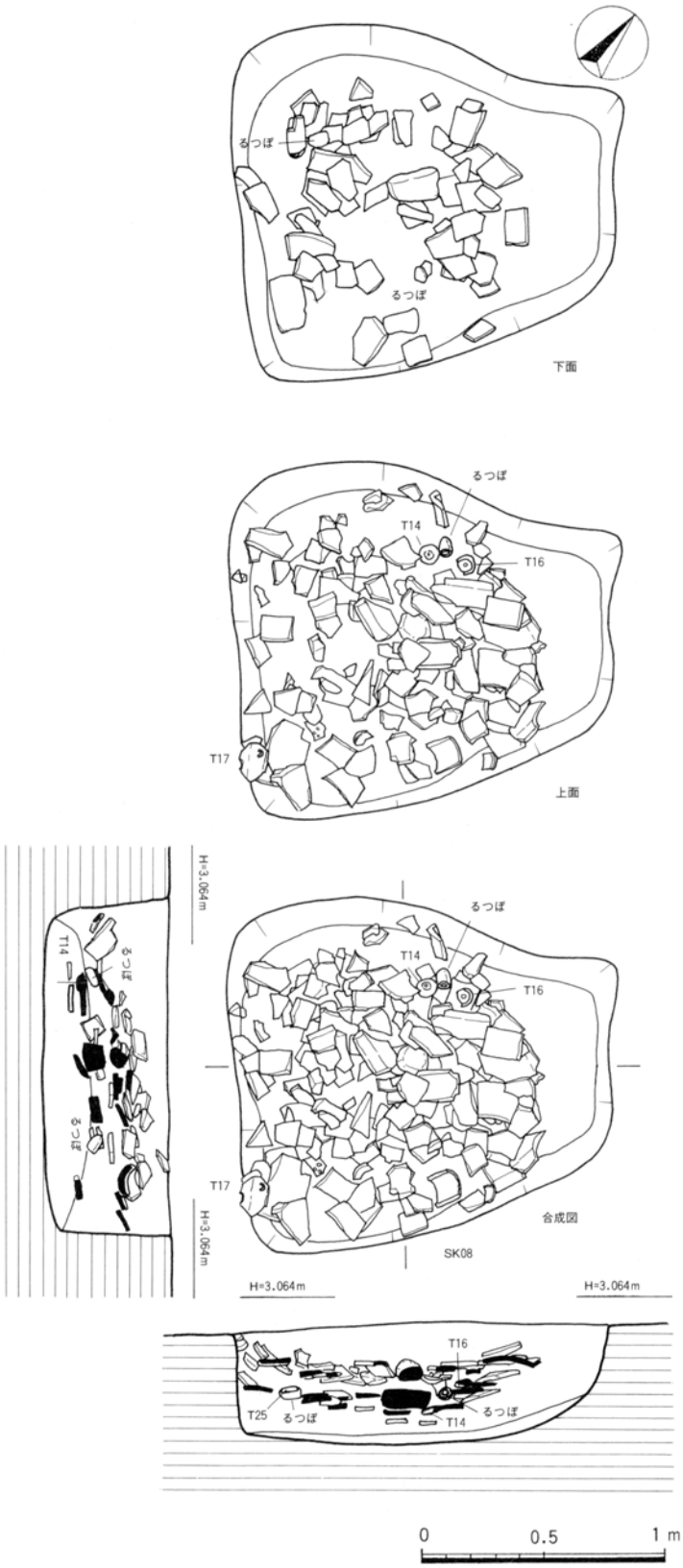
SE01とSE03の二つの井戸の中間に位置している。SE02井戸の掘り方の上部にあることから、SE02井戸よりも後の時期が考えられるが、井筒とは離れているので、廃絶時の先後関係までは明らかにできない。長軸156㎝、短軸146㎝の隅丸方形のプランで、深さ50㎝。壙内から、土師器、磁器、陶器、銅銭、坩堝など多様な遺物が出土したが、圧倒的に瓦が多いことから、瓦溜め土壙と呼んだ。ただ、軒先瓦が少なく、他の道具瓦も見かけないこと、また数層に折り重なっていることなどから、家屋解体時に一度に捨てたのではなく、ある程度の時間が経過したと考えるべきだろう。

遺　物　大量の瓦類に混じって、土師器、瓦質土器、陶器、磁器、鉄滓、坩堝などの各種遺物が少量ながら出土した。

陶　器　素焼きの灯明皿は、石積土壙で出土しているが、今回の調査区では陶器製は珍しい。T14は、２枚の皿を重ねたような器形をしており、外皿の外面は、丁寧な削りが加えられている。外皿は、口径9.7㎝、底径は4.3㎝、器高は2.9㎝である。外皿の外面と、内皿の口縁部は、露胎で、その他の部分には、明黄緑色の釉がかかっている。内皿の口縁部には、灯芯の煤が付着している。

土師器　H40は、口径6.0㎝の皿。底径は3.9㎝、器高は1.1㎝の大きさである。底部には、回転糸切り痕が残る。

磁　器　J25は白磁で、丸味のある底部であることから、皿よりも蓋とすべきか。口径は5.8㎝、器高は1.4㎝である。口縁部は露胎で、内外面には、削り痕が見られる。J26は青白磁の碗。底部径は5.0㎝で、高台は露胎になっている。高台を削り出す時の、轆轤回転は時計回りである。J24は瑠璃釉の磁器で、胴部上半が欠け



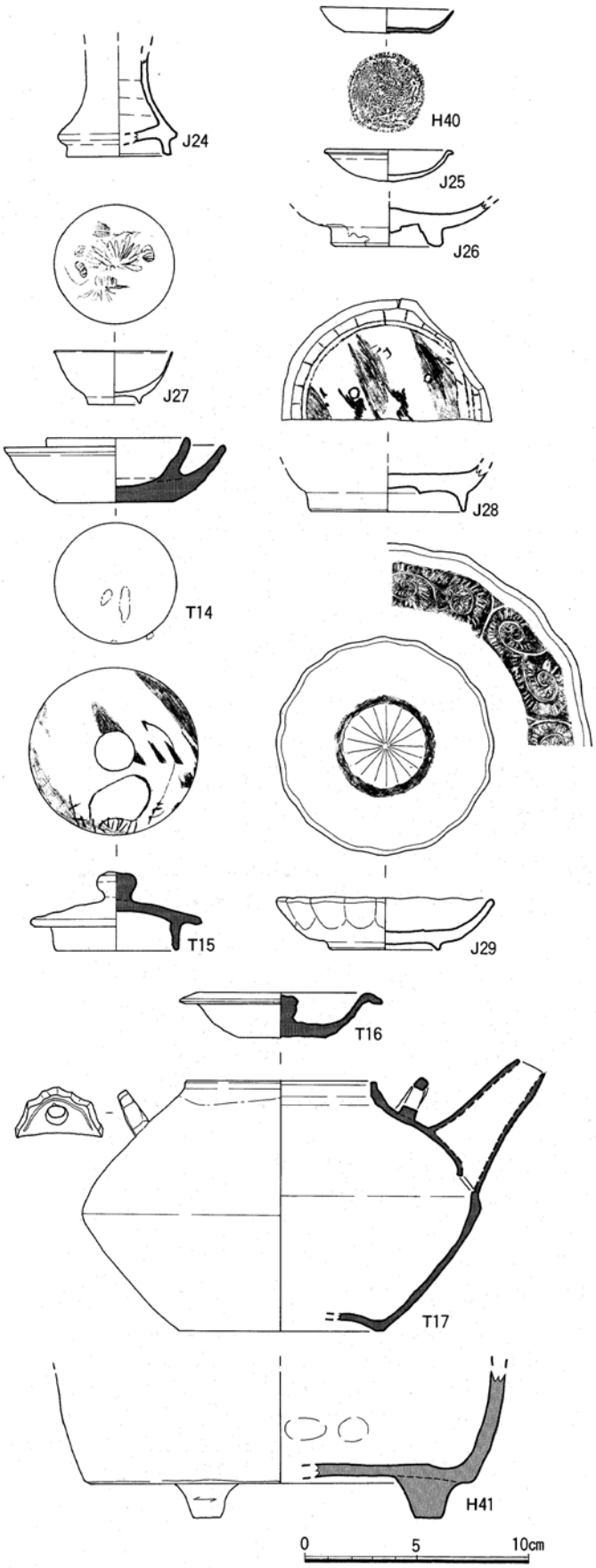
58　SK08瓦溜土壙実測図（縮尺1/30）

ているが、器種はお神酒徳利であろう。復元高台径は、4.8cmとなる。内面と畳付は、露胎である。J27は、白磁の盃。口径5.2cm、高台径2.3cm、器高2.4cmである。白色釉を重ねて草花文を描いているが、釉調が溶け込んで文様的効果は出ていない。口縁部内側端は、ほのかに紅色がさしている。J28は、染付の碗。復元高台径は7.0cm。蛇の目凹形高台は、露胎になっている。施釉された部分には、目立たない程度の貫入がある。内面には、小さく丸い目跡が2か所にある。J29は、染付の皿。口径は7.7cm、高台径は5.0cm、器高は2.3cm。形押しで、見込み内底に18弁の菊花文があり、その外周に型紙刷りで細かな蛸唐草文を描いている。釉には、細かな貫入があり、畳付だけは露胎になっている。

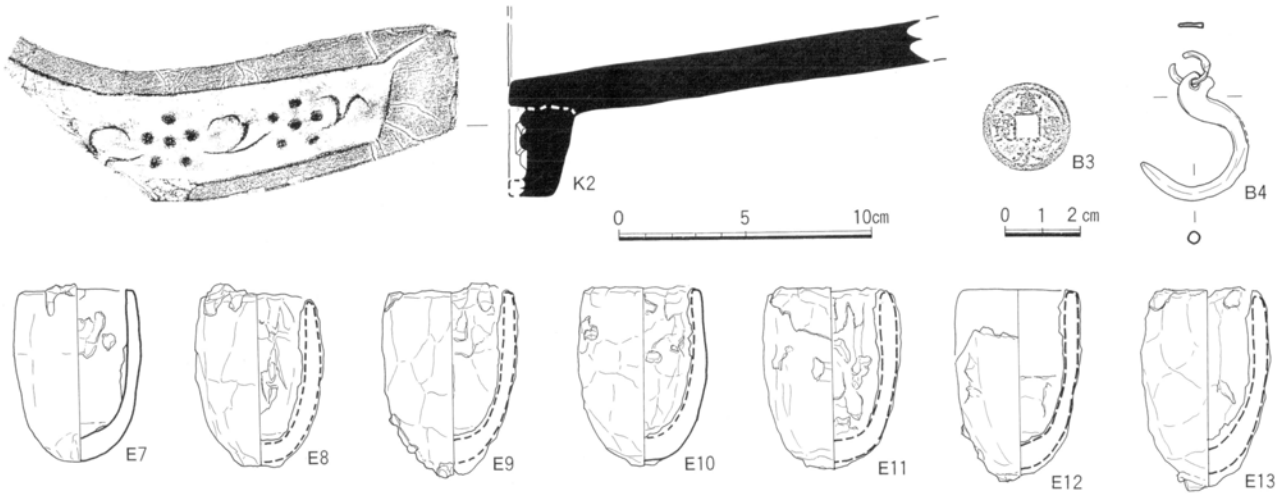
陶　器　T15は、天井部に摘みをもつ蓋であるが、見合う本体はない。最大径は7.6cm、摘みまでの高さは、3.5cmである。天井部の釉かけは、まず緑灰色釉を外面全体にかけ、

次に白色釉を塗り、最後に赤褐色釉で文様を描いている。T16は土瓶の蓋。出土時には、離れていたが、T17とセットになるのであろう。口径は9.0cm、底径は3.8cm、器高は2.0cm。底部には、回転糸切り痕が残っており、切り離し法がわかる。外面の釉調は、茶色を帯びた橙色である。T17は土瓶の身である。蓋を被せる口径は、8.4cm、底径は9.0cm、器高は12.1cmを測る。内面と底部は無釉。胴部上半の透明釉は、胎土の黄橙色をより鮮明にする効果が出ている。胴部最大径より下方には、きめ細かな煤が付着しており、土鍋など台所用具とは異なる使い方や

59　土瓶（T16·17）



60　遺物実測図（縮尺1/3）



61　遺物実測図（縮尺1/2·1/3）

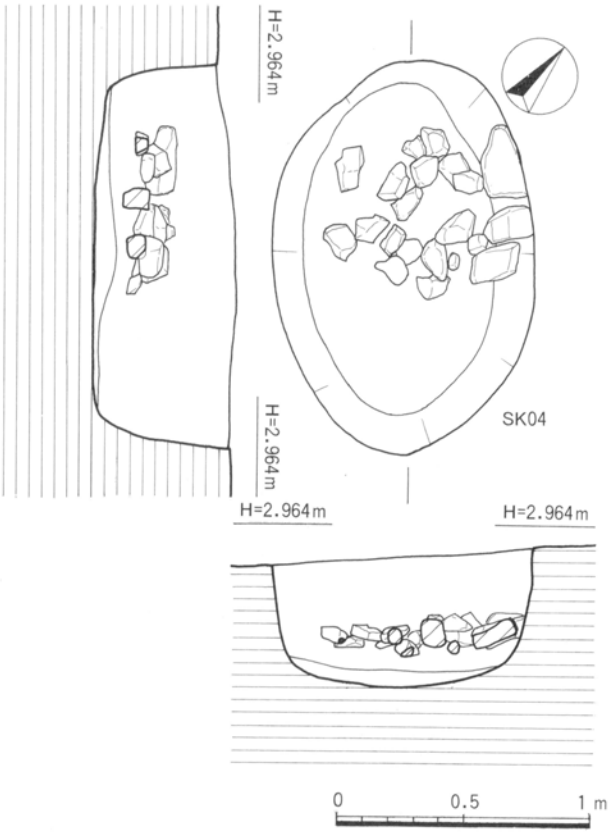
燃料だったのだろう。注ぎ口が取り付く器面には、直径7㎜程の孔3個が、逆三角形の位置で並んでいる。この孔は、注ぎ口を接合する前に外側から内側に向かって開けている。

瓦質土器　H41は火鉢で、3か所に脚が付く。内面に指圧痕が残る。

瓦　類　K2は、軒平瓦である。瓦当と平瓦の接合方法が、断面で観察できる。瓦当文は、小珠6個の梅花文の間に唐草を配する構成である。瓦当のカーブが左右対称でないことから、桟瓦の可能性が強い。出土した瓦のほとんどが、平瓦であった。

金属器　B3は銅銭。江戸時代の「寛永通寶」である。B4は、青銅製の吊り金具である。小さな環が上部の小さな孔に残っている。

坩　堝　E7～13は、瓦質の坩堝である。付着物を含んだ法量は、口径が4.6㎝～9.0㎝、胴部中位の径は5.0㎝～5.2㎝、器高は6.8㎝～7.9㎝である。外面には、青銅と思われる金属が溶解して強く付着している。その色は、黒褐色、黄褐色、淡茶色と様々な色調をしている。博多遺跡群では、鋳型や坩堝など鋳物関係資料の出土例は数地点であるが、本例のように砲弾形の坩堝は、初めての出土である。本報告書では、溶解物の分析結果が間に合わなかった。機会をとらえて、詳しく報告したい。



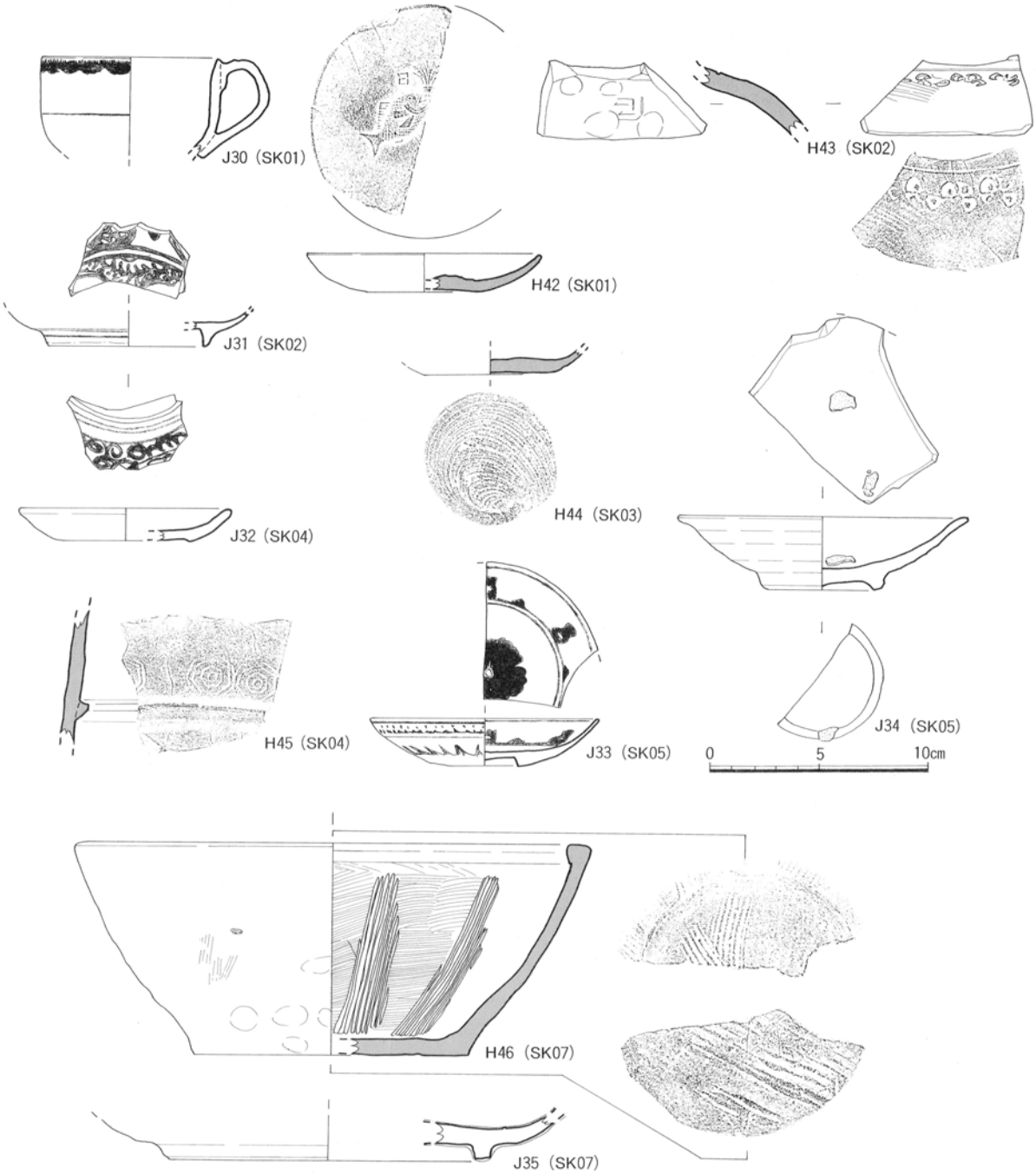
62　SK04土壙実測図（縮尺1/30）

SK04土壙

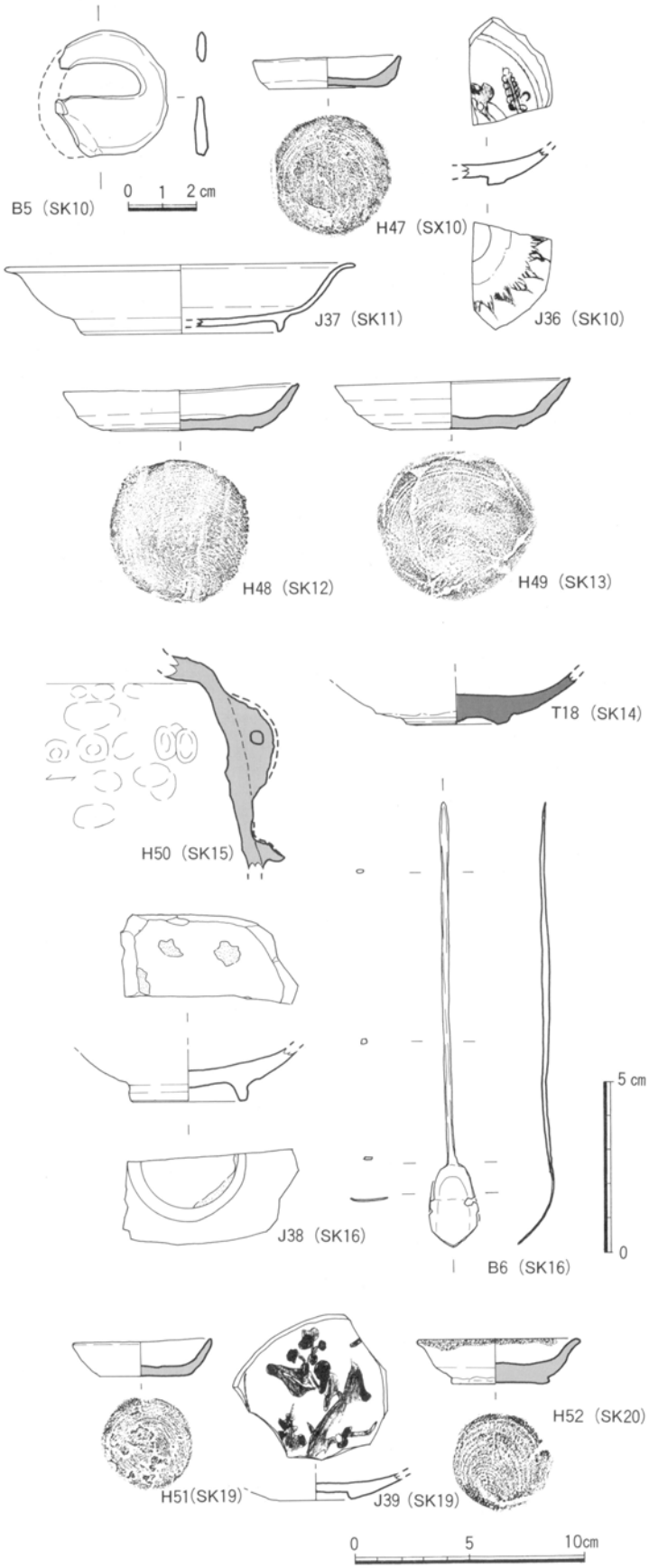
１面、Ⅱ区Ｂ４グリッドにある長楕円形の土壙である。長軸160㎝、短軸106㎝、深さ60㎝、石積土壙と同じような角礫10数個が、土壙中位に見られる。これらの角礫は、敷き詰めたものではないが、乱雑に投げ込んだ状況でもない。用途不明。

この他に大小の土壙やピットなどを１、２面の全域にわたって検出した。多くは使用目的が明らかでなく、紙数の制約もあって省略せざるをえないが、出土遺物については、土壙ごとに説明する。

磁　器　J30は、取っ手がついた色絵のカップである。復元口径は、8.2㎝で、前面に施釉されている。口縁部外面には、文様があり、胴部中位には、黒い圏線がある。



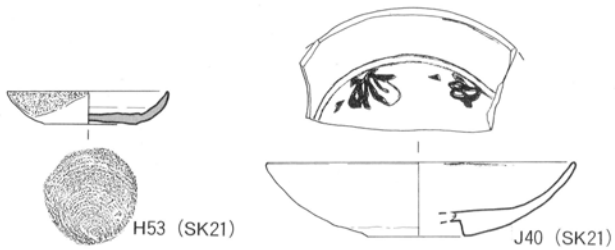
63　遺物実測図（縮尺1/3）

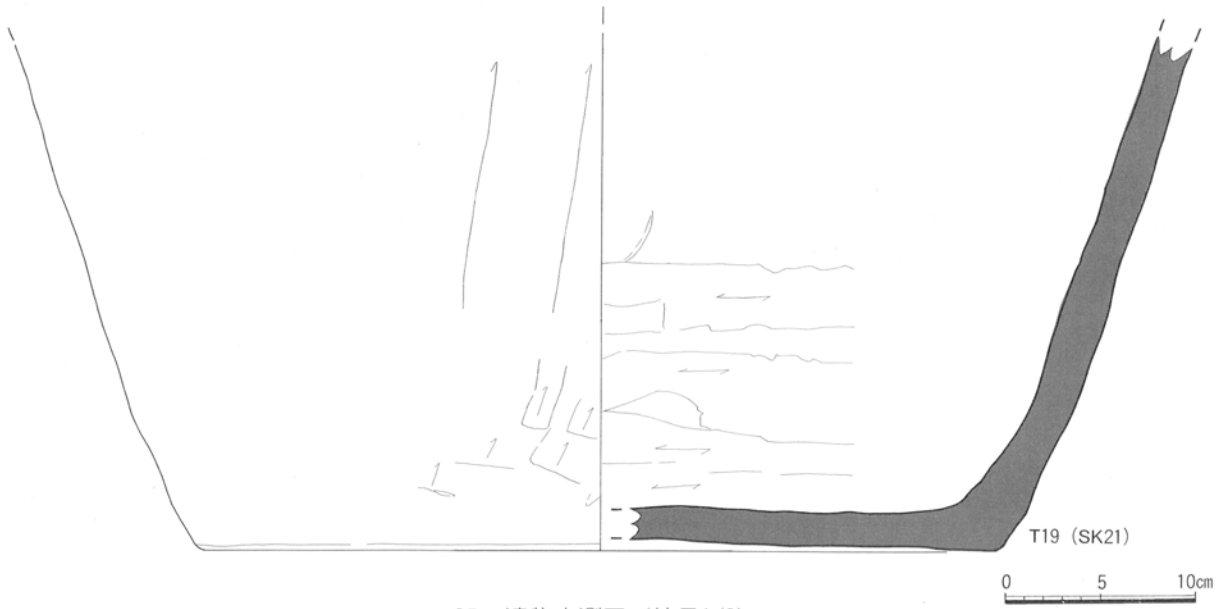


64　遺物実測図（縮尺1/2·1/3）

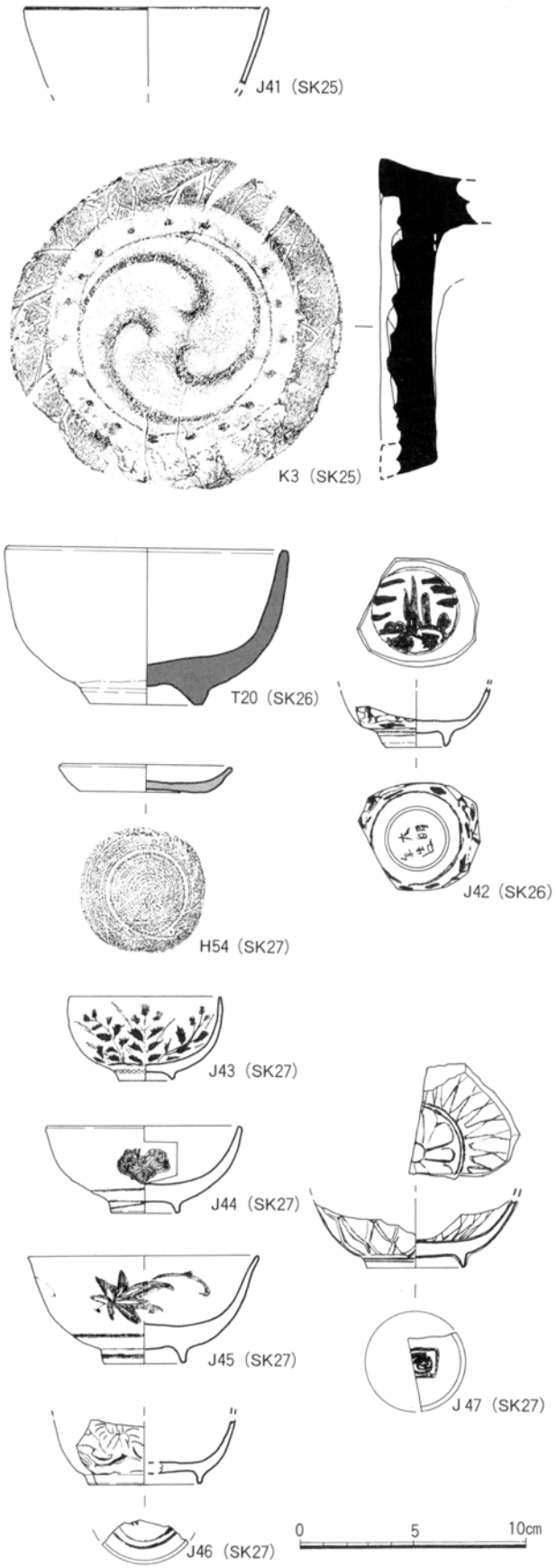
H42は、土師器の皿。復元口径10.8㎝、復元底径5.0㎝、器高は1.8㎝である。内面には、型押しの魚と稲穂が浮き上がっている。魚は鯛か。その上に「日」の文字も読める。器面は、きわめてなめらかな仕上げとなっている。H43は、瓦質の釜である。内面は、指押さえ後にヘラ状工具でナデを加えている。外面は、回転ナデの後にハケ目調整である。外面には沈線が巡り、その直下には、スタンプで花蕾様の文様を横に連ねている。J31は、染付の碗。復元底径は7.2㎝で、畳付は露胎である。H44は、土師器の皿。底径は、6.0㎝を測る。H45は、瓦質の火鉢。内外面の調整は、横ナデで、一部にナデを加えている。凸帯直上は、四重にめぐる多角形文が、２個１組で並んでいる。J33とJ34は、SK05から出土した。J33は、中国明の青花である。復元口径は10.4㎝、復元底径は3.4㎝、器高は2.2㎝。内面には、菊花文を、外面には、蕉葉文などを描いている。畳付は、露胎である。J34は、SK05から出土した白磁の碗。復元口径は、13.2㎝、復元底径は、5.6㎝、器高は、3.4㎝である。畳付は露胎で、釉には貫入が見られる。内面と畳付には、砂目跡が残っている。H46は、瓦質の擂鉢。復元口径は23.6㎝、復元底径は12.4㎝である。内面はハケ目調整、口縁部は横ナデ、外面はハケ目の後にナデ調整。内外面とも長石粒が多く露出しており、外面には籾の圧痕が一か所に見られる。また底部外面には、板状圧痕がある。おろし目は、10本１組で、本来は19本程度あったと思われる。焼成時の歪みが大きく、摩耗が少ないことから、ほとんど使用されないまま捨てられたのであろう。J35は、青磁皿。復元口径は、14.2㎝で、高台内には、目跡が弧状に付いている。内面には、削りによる細い沈線が巡っており、釉下に白い線のように見える。釉色は、暗黄緑色で貫入が見られる。B５は、SK10から出土した金属製品。栓抜きのような形状をした鉄製品。用途不明。H48は、土師器の皿。復

元口径は、6.6㎝、底径は5.0㎝、器高は1.4㎝。回転ナデ調整は、全体に雑。J36は、明の青花皿である。畳付は露胎。J37は、SK11から出土した明の白磁皿。復元口径は15.4㎝、復元底径は8.6㎝、器高は3.6㎝である。畳付は露胎。厚めにかけられた透明釉は、気孔が10個ある。H48は、土師器の皿。口径10.3㎝、底径6.1㎝、器高は2.1㎝である。口唇部は、少し窪んだ面取りをしている。H49は、土師器の皿。口径は10.4㎝、底径5.6㎝、器高は2.2㎝である。口縁部にはH48と同じような面取りがある。T18は、陶器の碗。底部径は、5.4㎝で、高台は露胎である。釉には貫入がある。H50は、瓦質土器の釜。内外面には、黒褐色の炭化物が付着している。J38は、白磁の碗。底径は5.1㎝で、高台幅は３～５㎜と均一になっていない。全面に淡青白色の釉がかけられ、見込と高台には、目跡が残っている。胎土は、緻密さがなく砂っぽい。Ｂ６は、青銅製の匙。全長13.0㎝、幅1.5㎝である。皿部は、きわめて薄い作りで、その先端はシャープに尖っている。H51は、土師器の小皿。口径は6.2㎝、底径4.0㎝、器高は1.7㎝。底部は、回転糸切りで、余分な粘土が付着している。J39は、碁筍状の底部をした明の青花皿。底径は3.2㎝。畳付の釉は、掻き取っている。釉にはわずかに貫入。H52は、土師器の灯明皿。復元口径は、7.1㎝、底径は4.3㎝、器高は2.0㎝。底部が厚く、胴部との境が段をなしている。H55も同じように土師器の灯明皿。口径は6.4㎝、底径は3.6㎝、器高は1.3㎝である。轆轤の回転方向は、時計回り。J40は、碁筍底の明の青花皿。内面の釉は、淡い青白色を呈している。わずかに貫入があり、また口縁端の釉が剝げて、薄い赤褐色となっている。T19は、陶器の甕。復元底径は32㎝。内面は茶褐色、外面は、明褐色～淡灰色。胎土断面は、明灰色である。内面の調整は、底部が回転ナデ、胴部が横方向の粗いヘラ状工具のナデ、胴部外面は縦方向のナデである。焼成はよく、堅く焼き締まっている。J41は、青白磁の碗。復元口径10.8㎝。外面には、淡緑白色の釉が、内面には透明釉がかけられている。口唇部は、薄い茶褐色となっている。Ｋ３は、軒丸瓦。瓦当は、正円ではなく、縦方向に長い。その長さは、14.1㎝。瓦当文は、三巴文で、珠文の数は、19個である。巴は細く長い。尾は次の巴から離れている。T20は、陶器の碗。復元口径12.5㎝、





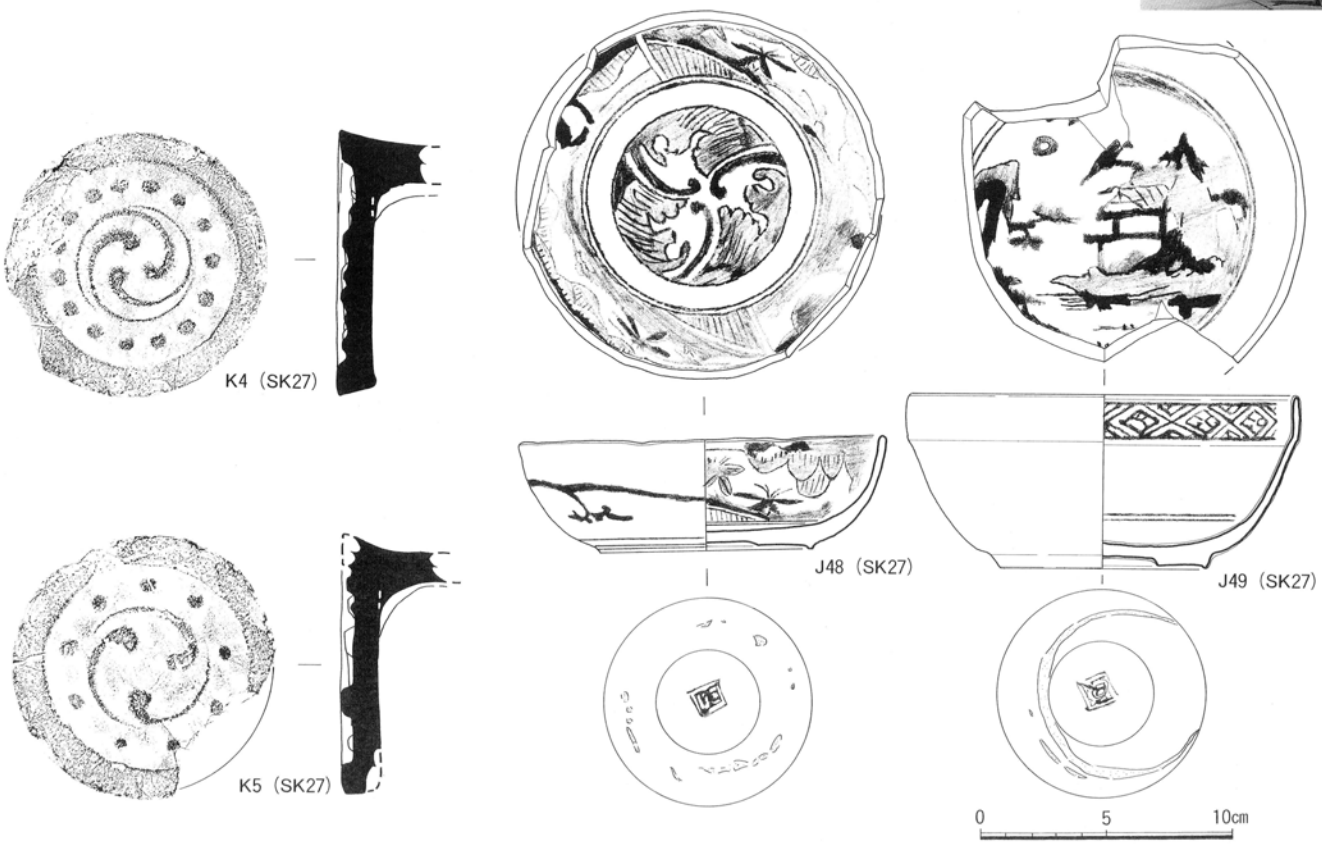
65　遺物実測図（縮尺1/3）



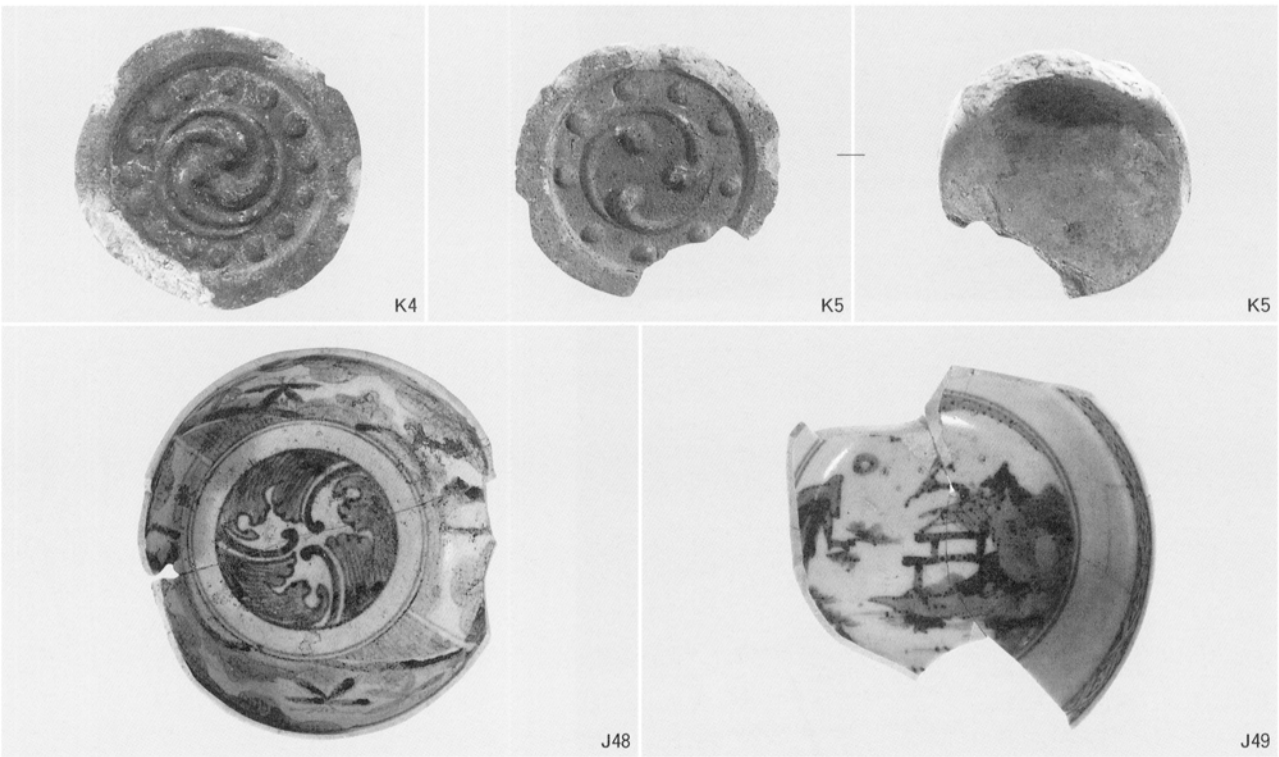
66　遺物実測図（縮尺1/3）

復元底径は5.0㎝、器高は6.9㎝。削り出した高台部は、露胎。黄緑色の釉には、細かな貫入と気孔がある。また釉かけが均一でなく、まだら状となっている。胎土にも、海綿状の気孔が目立つ。H54は、土師器皿。口径は7.7㎝、底径は5.8㎝、器高は1.2㎝。J42は、染付碗。底径は2.7㎝、畳付は、露胎。高台には、「大明年造」の銘がある。J43は、染付の湯飲み碗。口径は6.6㎝、底径は2.4㎝、胴部の最大径は6.8㎝で、器高は3.8㎝である。畳付は露胎で、釉には細かな貫入がある。J44は、染付碗。口径8.6㎝、底径3.1㎝、器高3.8㎝。畳付には、砂粒が付き、外面には桐葉様のコンニャク印判が３か所にある。J45は、染付碗。口径10.1㎝、底径3.6㎝、器高4.7㎝。畳付は露胎、釉には細かな貫入と気孔がある。外面の文様は、紅葉を３か所に配している。J46は、青磁染付の碗。復元底径は5.0㎝で、畳付は露胎。高台内には、二重圏線を巡らせ、その中に偏らせて銘を入れている、破片で解読できない。J47は、染付碗。底径は4.4㎝、畳付は露胎。高台中には、渦福文の銘がある。見込の文様は、二重網目文で、内底には菊花文を描いている。外面も二重網目文である。Ｋ４は、巴文の軒丸瓦。瓦当の最大径は10.8㎝である。巴の頭は丸く、細長い尾が付いている。珠文は、15個を数える。Ｋ５は、同じような巴文の軒丸瓦であるが、３個の巴も珠文も間が離れ、間延びした印象の瓦当文となっている。瓦当の最大径は、10.2㎝。

J48は、染付皿。口径14.6㎝、底径8.2㎝、器高4.5㎝。蛇の目高台は、露胎で、かすかながら目跡が残っている。外面に唐草文、内面には波頭文などを描いているが、大半はかすれたように色褪せている。口縁部は、８個の輪花となっている。J49は、青磁染付の碗。復元口径15.6㎝、底径8.2㎝、器高6.9㎝。蛇の目凹形高台には、中心より少しずれてさや跡が残っている。このために、底部はやや変形している。内面の絵柄は、水辺に面して、四阿や草木の風景を描いている。外面には、青磁釉をかけている。



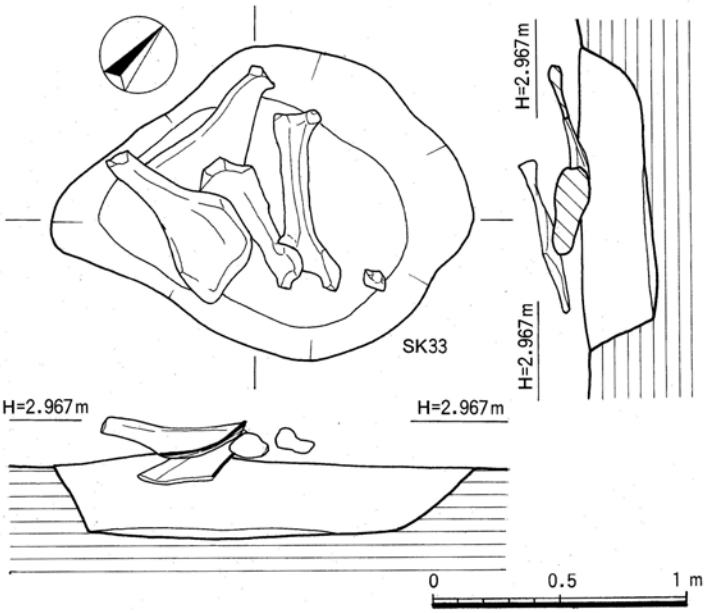
67　遺物実測図（縮尺1/3）



68　瓦（K4・5）・染付皿（J48・49）

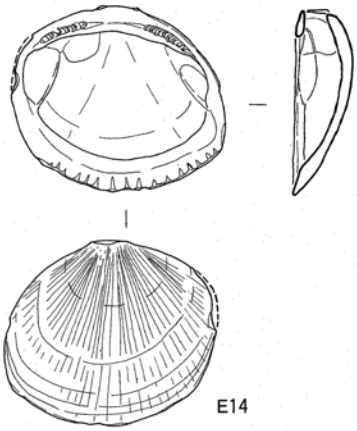
動物骨・貝殻土壙

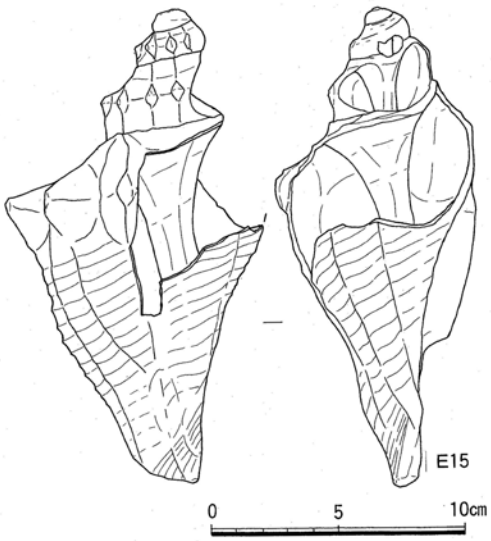
発掘区のほぼ中央、Ｂ４グリッドにある。１面の汚れていた土層をわずかに掘り下げて検出した。平面プランは東西に長い無花果状で、長軸83㎝、短軸62㎝、深さ16㎝を測る。土壙の底面は、ほぼ水平に掘られている。底面より約10㎝上方に、大型動物の肩胛骨と四肢骨各２本が丁寧に置いたような状況で出土した。解体後に廃棄したのではなく、祭祀的な意図が推測される。一方、巻き貝と二枚貝、イルカの顎骨などが集中して出土する浅い落ち込みがあるが、出土状況だけでは、廃棄、祭祀の別を判断できない。



69　SK33動物骨土壙実測図（縮尺1/30）

70　SK33動物骨土壙　SK34貝殻土壙





71　遺物実測図（縮尺1/3）

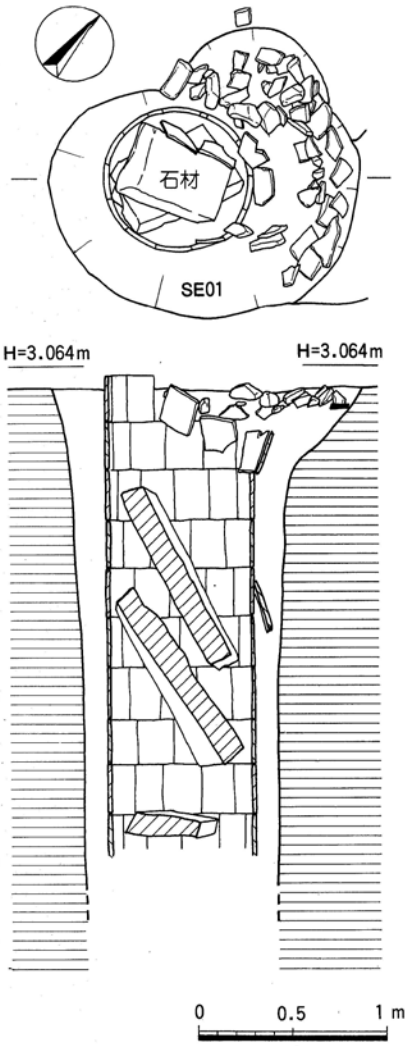
2．井　戸（SE）

1面で4基の井戸を検出したが、井筒に専用の瓦を用いて積み上げたものと木桶を使った2種がある。

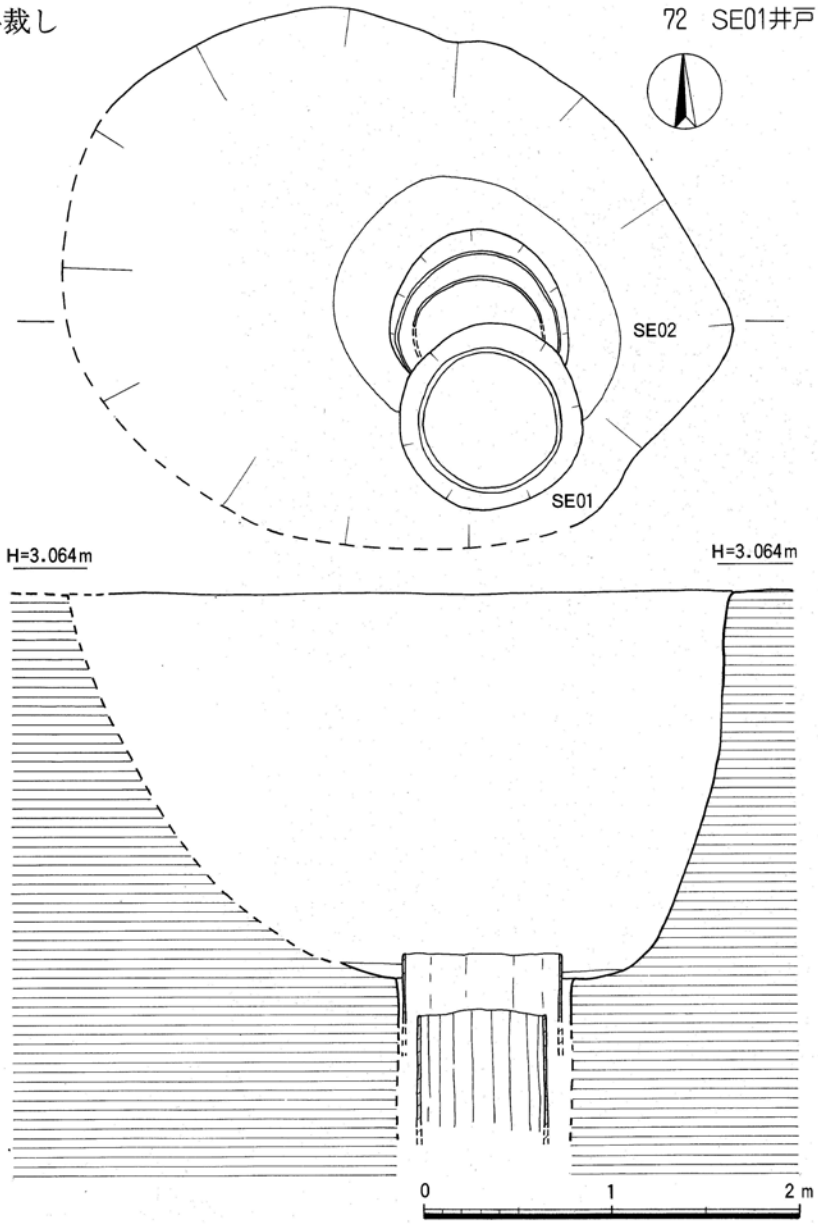
SE01井戸

Ⅰ区Ｂ３グリッド、SX06石積土壙の北西1.5ｍにあり、石積土壙西列の軸線上に位置している。井筒は、専用に製作された平瓦を積み上げている。安全作業を優先したために、遺構検出面から260㎝の深さで掘り下げを断念した。井筒は直径80㎝で、10段を確認した。同一規格の井戸瓦を用意できなかったのか、半裁した井戸瓦を途中に用いている。

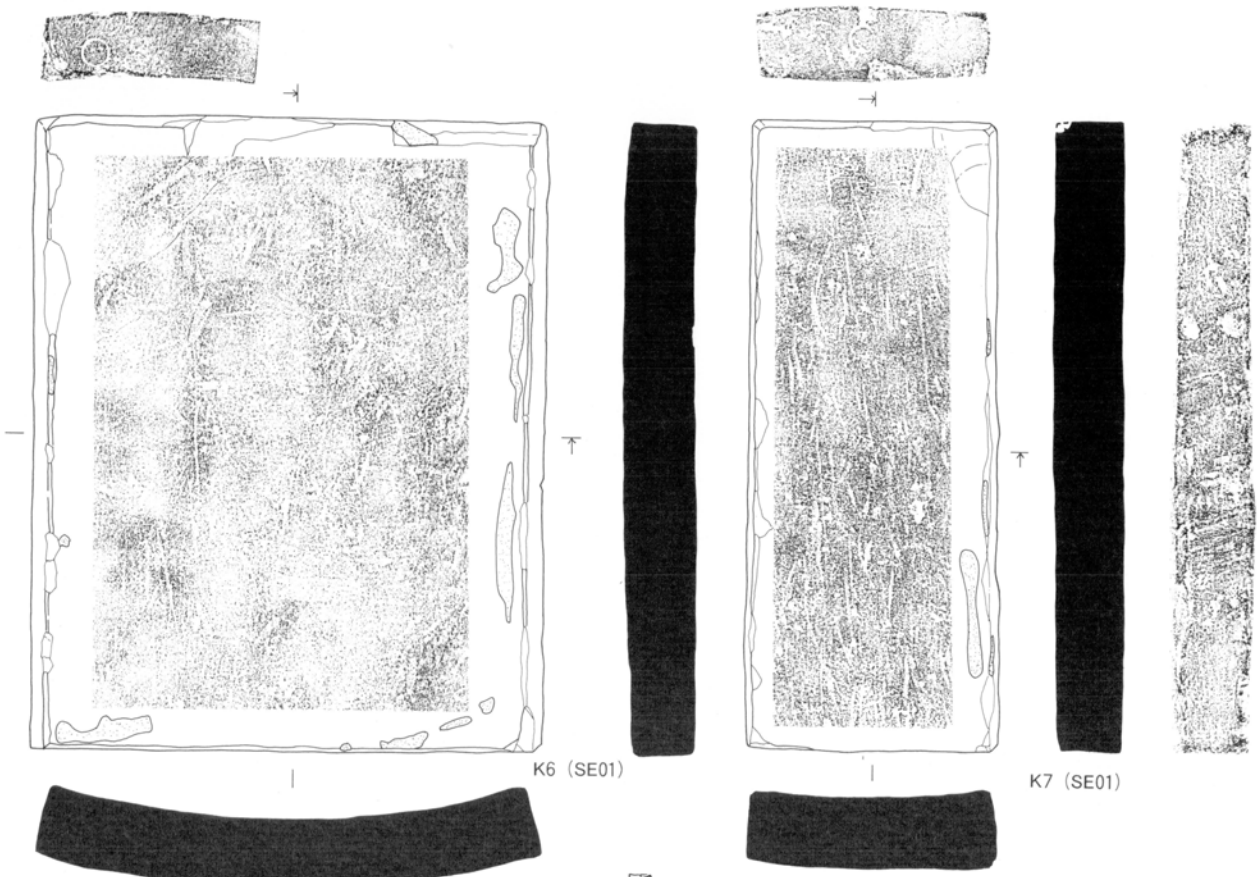
72　SE01井戸

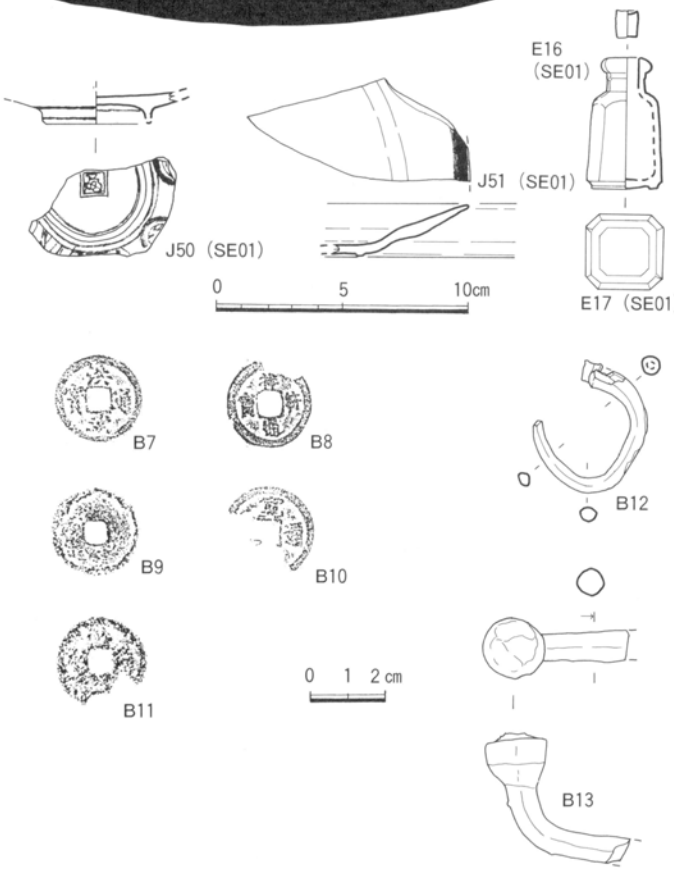


73　SE01井戸実測図（縮尺1/40）



74　SE02井戸実測図（縮尺1/40）





遺　物　SE01とSE02から出土した遺物を合わせて図示した。このうちB７～13は、SE02の井筒より出土。

瓦　類　K６は、10段目の井戸瓦である。高さは25.2㎝、幅は20.5㎝、最大厚2.8㎝。平瓦の谷に当たる内湾側には、製作時の傷があり、縁辺には、目地の白色粘土が付着している。短側面には、直径1、1㎝の丸いスタンプ文がある。K７は、４段目の井戸瓦。井筒の径に合わせるために、鑿のような工具で、縦に割っている。高さ25.0㎝、幅10.1㎝、最大厚2.8㎝。傷、粘土、スタンプ文がある。

磁　器　J50は、染付の碗。復元底径4.2㎝、高台内の銘は、崩れた「渦福」。J51は、色絵の皿。外側に、黒、赤、うす紫の圏線を巡らせている。

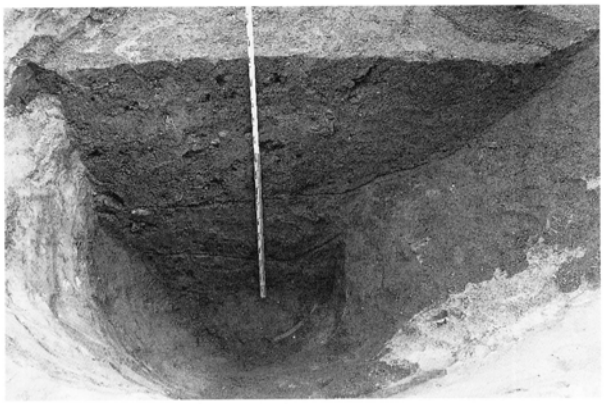
ガラス製品　E17は、高さ5.2㎝で、薄緑色の小瓶。E16は、そのコルク栓。

金属器　B７～11は、銅銭。B12は、吊り金具状の青銅製品。B13は、煙管の雁首部である。

75　遺物実測図（縮尺1/2·1/3）

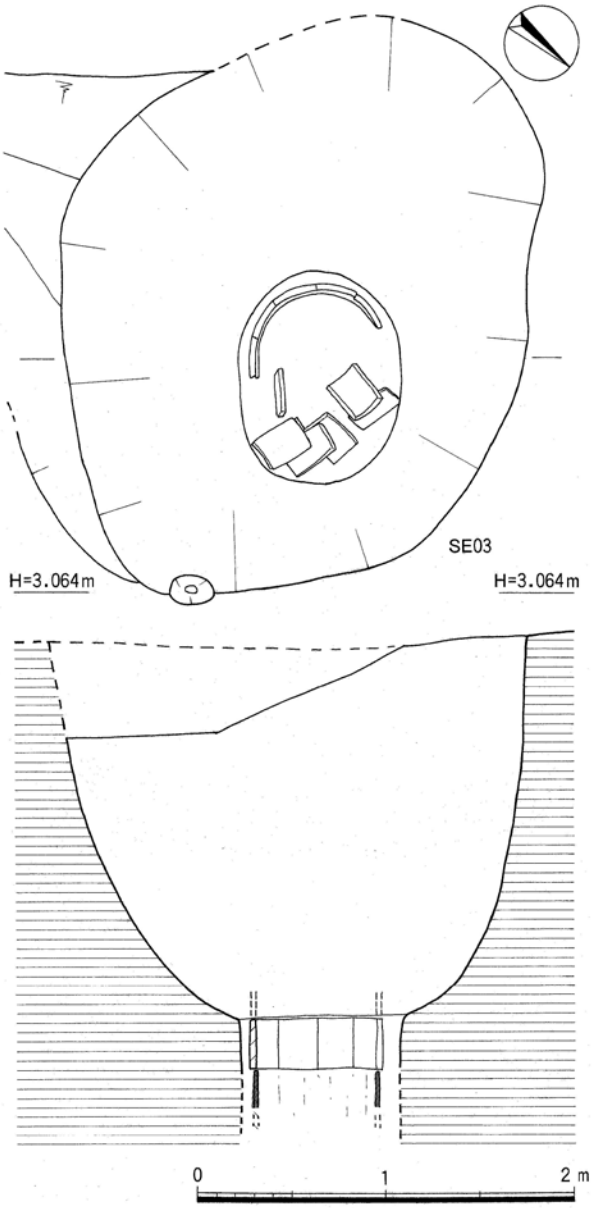
SE02井戸

掘り方は、360㎝×272㎝の不整円形で、その東寄りに井筒がある。190㎝の深さで確認した木桶は、二重になっており、外側は直径84㎝、内側は68㎝である。保存状態は悪いが、内側の木桶は、幅11㎝、長さ74㎝、厚さ18㎜の板材が用いられている。たがは認められない。



76　SE03井戸

77　SE03井戸



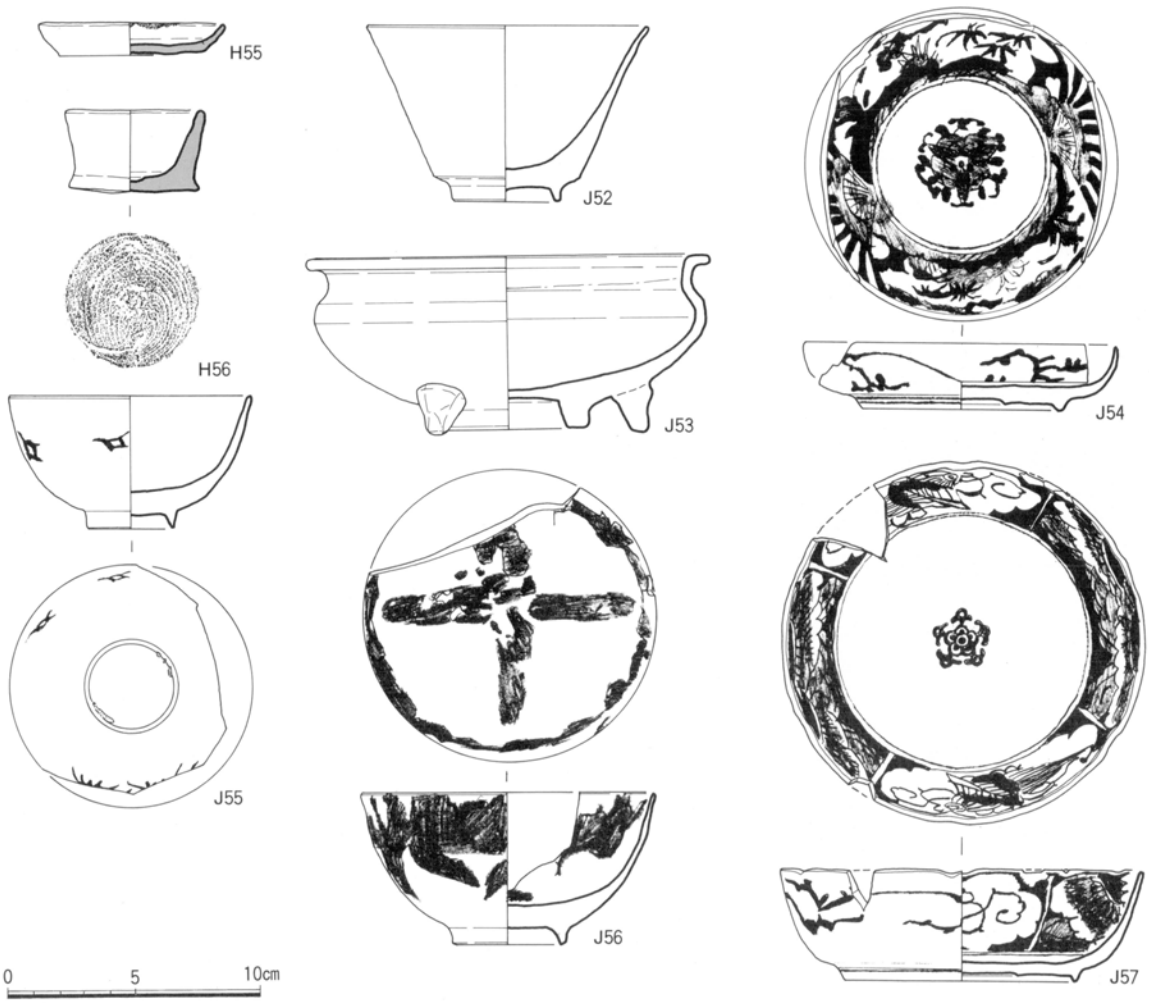
78　SE03井戸実測図（縮尺1/30）

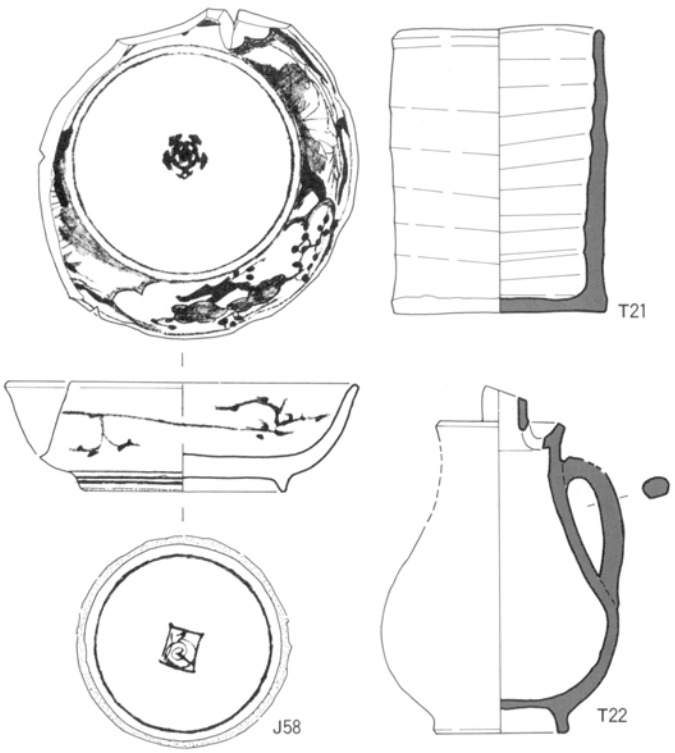
SE03井戸

SE01井戸の北西側に隣接している。掘り方上面は、長軸312㎝、短軸240㎝の不整円形である。深さ２ｍで井筒がある。直径は70㎝を測る。木桶は保存状態が悪く、大きさや構造は不明。井戸瓦は１段しか残っていないが、上部の段は、廃絶時に抜き取って転用したのであろう。レンズ状に埋没している上部の土層からも井戸瓦の抜き取りをうかがうことができる。

遺　物　土師器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦類、鉄滓、貝殻など合わせてコンテナ９箱分の遺物が出土した。

土師器　**H55**は、土師器の灯明皿。口径7.5、底径5.8㎝、器高1.4㎝。底部の切り離しは、回転糸切りである。**H56**は、小容器である。復元口径5.6㎝、底径5.3㎝、器高3.3㎝。底部には、回転糸切り痕が残る。用途不明。

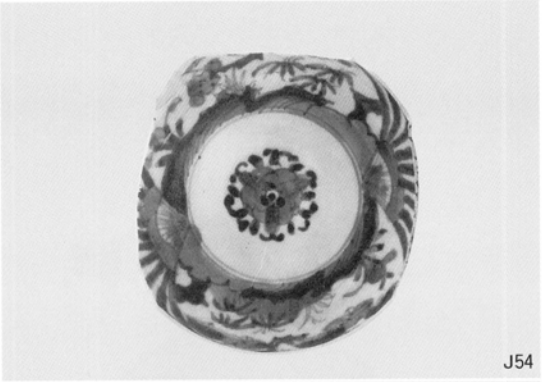


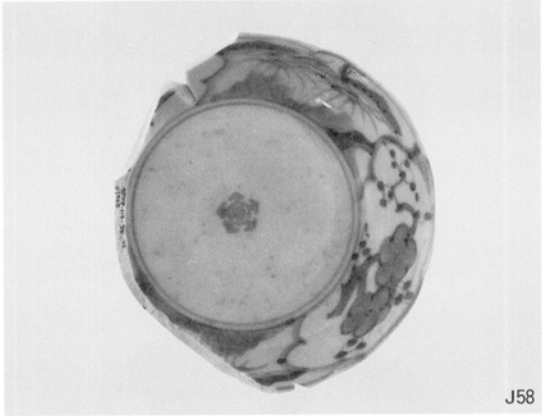


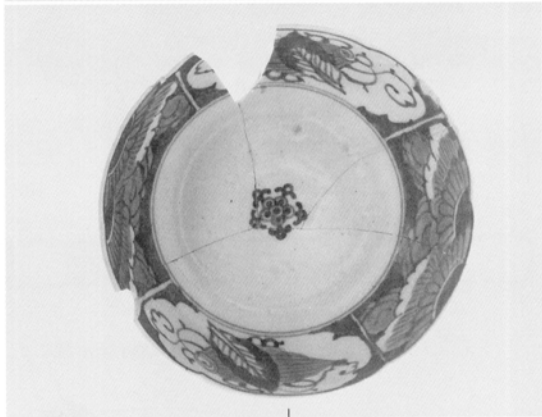
79　遺物実測図（縮尺1/3）

磁　器　J52は、白磁の碗。口径11㎝、底径15.6㎝、器高7.0㎝。畳付は露胎で、１か所に目跡が付いている。淡黄白色の釉には、22個の気孔があり、細かな貫入がある。J53は、青磁の香炉。復元口径16㎝、底径6.0㎝、器高7.0㎝。３か所に脚が付き、高台は脚より少し浮いている。脚、高台の畳付は、いずれも露胎で、見込の露胎部には、回転ナデ調整がかき目状に残る。黄灰色の釉には、11個の気孔があり、高台から胴部中位にかけては貫入がある。J54は、染付の皿。口径12.4㎝、底径7.8㎝、器高2.6㎝。蛇の目凹形高台は、露胎

である。口縁部は、わずかに内傾している。内面には、扇文や笹文などを描き、外面には、唐草文と3本の圏線を描く。施釉部には、12個の気孔と細かな貫入がある。J55は、染付の碗。口径9.6㎝、底径3.5㎝、器高4.2㎝。淡黄白の釉には貫入があり、暗緑色、暗青色の文様がある。高台は露胎で、畳付には目跡が残っている。J56は色絵の碗。口径11.0㎝、底径5.6㎝、器高7.0㎝。畳付には目跡があり、内外面には、少し銀の光沢のある茶褐色の文様が描かれている。この文様の色は、微妙に変化しており、最も釉が厚い部分は銀光りした茶褐色で、その周囲には、黒がにじんでいる。また最も釉が薄い部分は、暗黄緑色となっており、巧みにグラデーションを利用した表現である。J57は、染付の輪花皿。口径14.4㎝、底径9.2㎝、器高4.4㎝。蛇の目凹形高台は、露胎で、見込内面は、4区画して文様を描き、外面には、唐草文を巡らせている。J58は、染付の輪花皿。口径14.0㎝、底径8.2㎝、器高4.4㎝。畳付には、砂が付着している。高台内には、1条の圏線を巡らせ、ほぼ中央に「渦福」の銘を入れている。見込みには、松竹梅文。内底には、五弁花文を描く。外面の唐草文は、簡略化されている。これらの文様は、発色が悪く、白っぽい色合いをしている。


J54

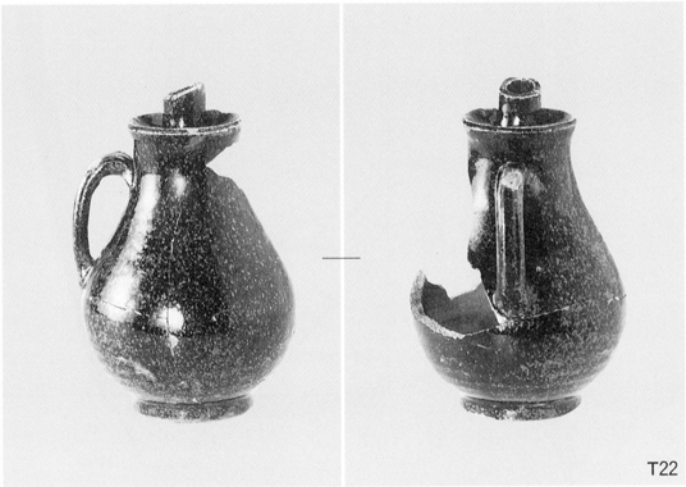

J58



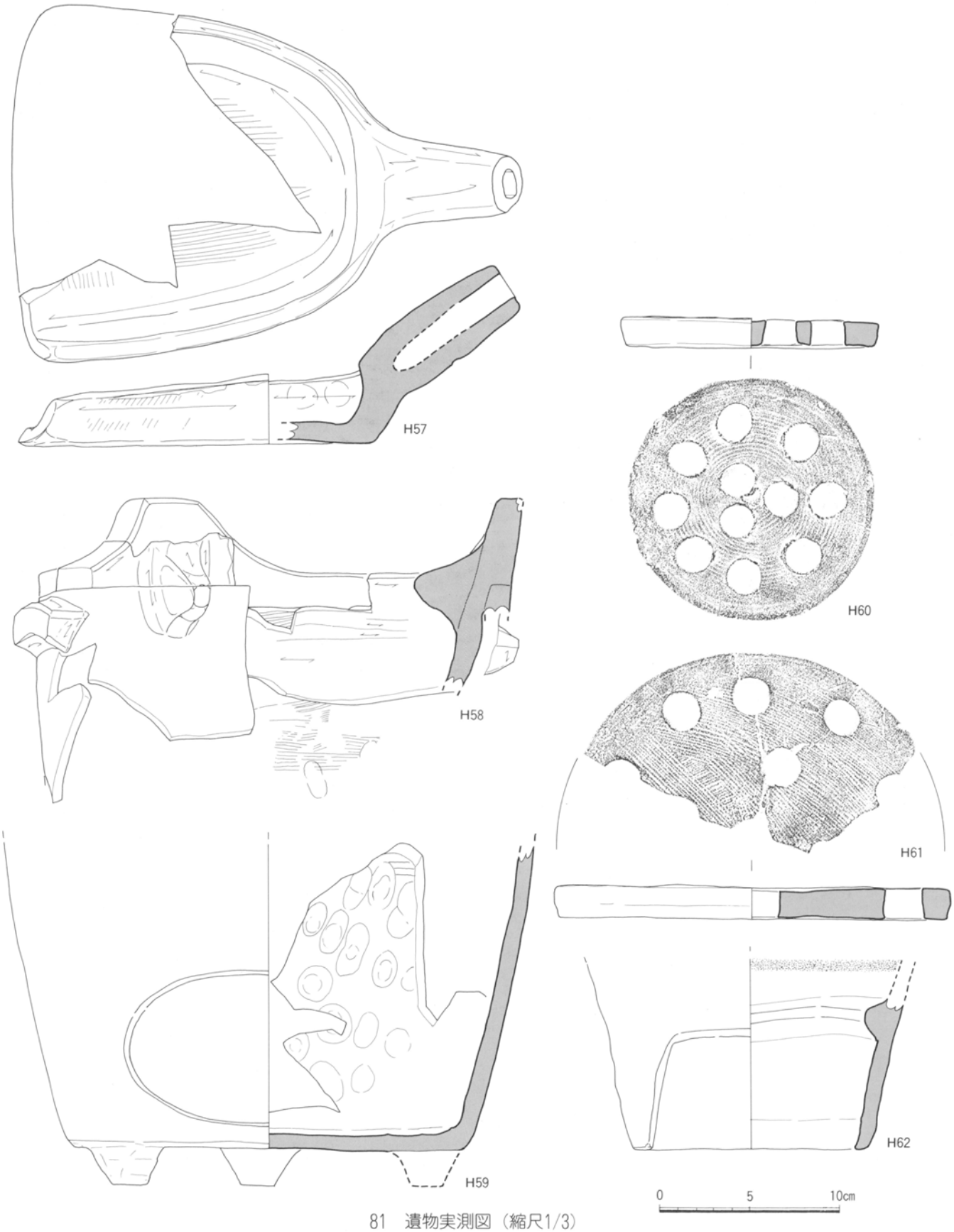
J57

陶　器　T21は、箸立て状の陶器。復元口径と底径は8.4㎝、器高11.3㎝の円筒状である。底部外面は、無釉。施釉部は、釉が厚い部分から順に、暗黄緑色、茶褐色、赤褐色と変化している。器面は、轆轤による凹凸が目立つ。T22は、油壺。注口径1.8㎝。受け部径5.1㎝、底径5.3㎝、器高13.8㎝。注口を除いた内面と、畳付には露胎となっている。釉は、黒褐色で、まだら状に茶褐色釉がある。受け部には、注口から垂れた油を、再び取り込むための円孔が取っ手側に開いている。

土師器　H57は素焼きの十能。ちり取り状の器形で、円柱の取っ手が付く。復元全長28.5㎝、復元幅19.8、

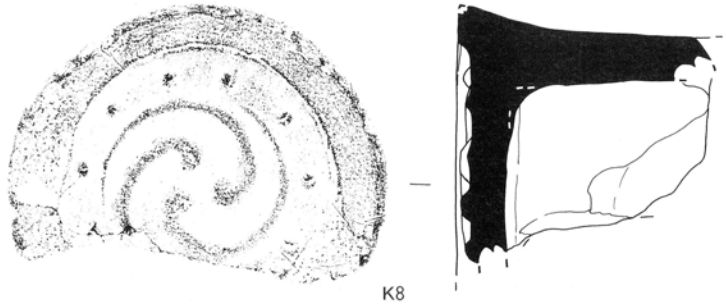

T22

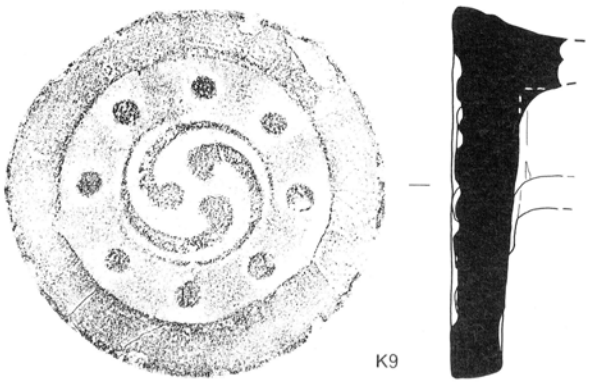
80　磁器（J54・57・58）、陶器（T22）

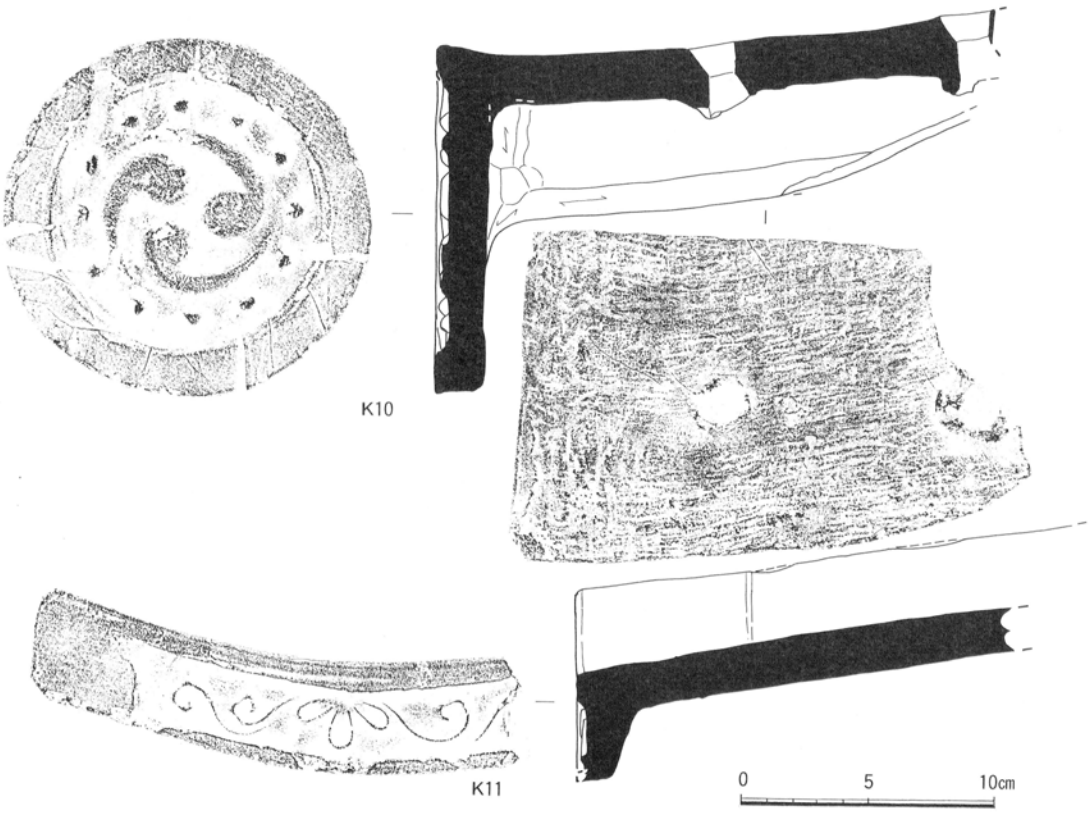


81　遺物実測図（縮尺1/3）

器高9.8cm。側面と内面にはハケ目の調整痕が残る。H58は、七輪の胴上半部。器壁は、二重の作りで、外面は丁寧なナデ。外壁内面はハケ目の後、ナデ。内壁外面は横ナデ、内壁内面はケズリのように強く横ナデしている。上端部には、3か所で山形に突出し、その内面には、鍋受けの突起を貼り付けている。また外面の2か所には、弧状に粘土を貼り付けて、取っ手としている。H59は、七輪の胴下半部である。底径21.6cm。平坦な底部には、3か所に脚を付けている。外面の調整は、丁寧なナデ。底部内面は、ヘラ状工具によるナデ。胴部内面には、指押さえ痕が多数残っている。H60は、七輪のさや。上面径14.2cm。下面径13.8cm。

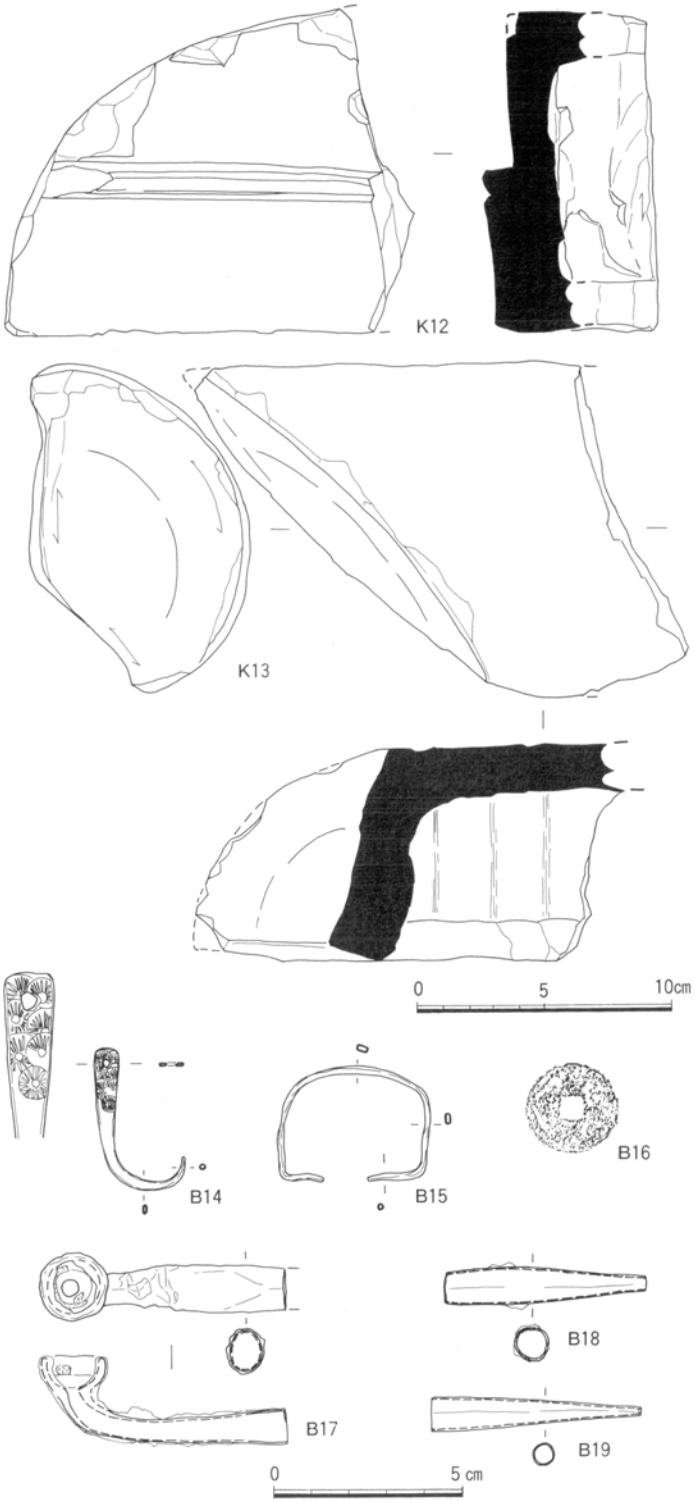






82　遺物実測図（縮尺1/3）

厚さ1.7㎝。孔は、中央に三角形状に３個、その周囲に８個を配している。両面とも、強い火力を受けた痕跡はない。H67も同じ七輪のさや。一回り大きく、上面径21.6㎝、厚さ1.8㎝。上面は、ハケ目調整で、下面は、熱を受けて表面が剝離している。H62は、七輪の底部。底径は、13.0㎝で、内面上部には、煤が付着している。はまを受ける凸帯が一周しており、その径は、H60の径と一致するのでセットになる可能性が強い。



83　遺物実測図（縮尺1/2･1/3）

瓦　類　K８～10は、巴文の軒丸瓦。瓦当径は、順に14.8㎝、14.5㎝、14.4㎝である。K８の巴文は、細身で尾が長い。次の巴頭には、連結していない。珠文は、11個か。K９は、巴文と珠文が大きな作りである。珠文は８個。K10は、巴文がさらに大きくなり、尾も短くなる。ただ珠文は、逆に小さく12個と多い。K８とK10の丸瓦の背には、釘孔が開けられている。K11は、軒平瓦。瓦当文は、３弁の花文を中心にして、左右に唐草と花文を繰り返している。K12は、鬼瓦の破片か。全長7.0㎝で、燻しはなく、暗灰色を呈する。外面はナデ、内面は粗いケズリである。全形が不明なために、実測図は、上下逆の可能性もある。K13は、谷丸瓦。高さ8.0㎝で、暗灰色をしている。器面はナデ調整。内面には、成形時についた細線が４条残っている。

金属器　B14は、青銅製の吊り金具。全長は、3.8㎝。７個の菊花文が、重なっている。B15は、蒲鉾状の青銅製品。幅4.0㎝、高さ3.0㎝。用途不明。B16は、銅銭。文字の痕跡はあるが、錆が進み判読できない。B17は、青銅製の煙管雁首。管の中間部分は、少し潰れて楕円形になっている。B18、19は、青銅製の煙管吸い口。全長は、それぞれ5.3㎝、5.0㎝、最大径は、1.0㎝と0.9㎝である。どちらも１㎜以下の薄い作りである。

SE04井戸

掘り方は、直径240㎝のほぼ正円で、断面は深さ２ｍまで深い擂鉢状をなし、さらに中央部に直径70㎝で円形に掘り込んでいる。木質の残りは確認できなかったが、形状がSE03井戸によく類似していることから、井戸瓦と木桶を用いた井筒だったのであろう。

遺　物　コンテナ２箱分の土師器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦類、土錘、金属器類が出土。

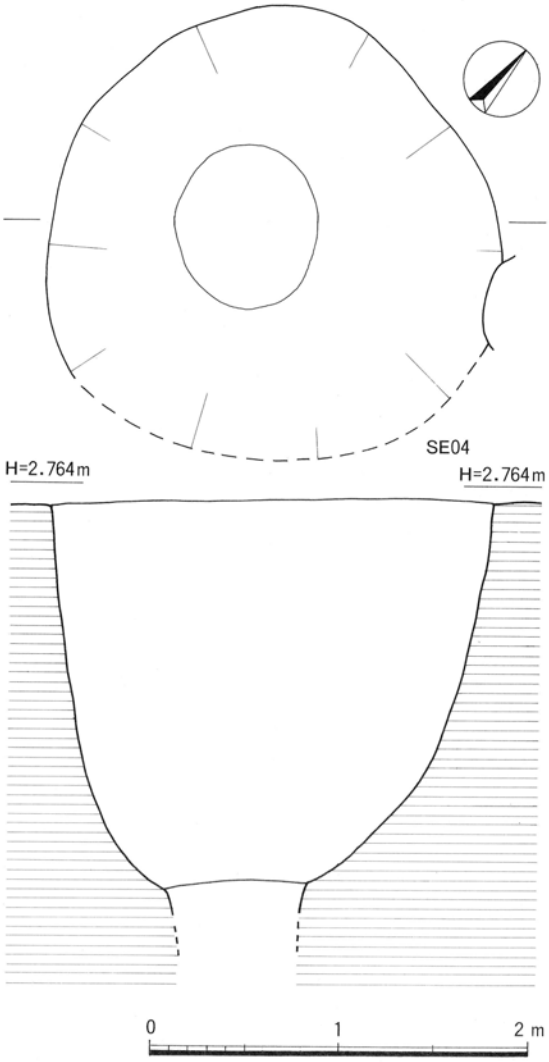
土師器　H63は、口径7.1㎝、底径5.5㎝、器高1.4㎝の皿。底部に回転糸切り痕。

磁　器　J59は、染付の猪口。復元口径7.0㎝、底径3.9㎝、器高5.3㎝。高台内底には、「大明年製」の４文字の銘がある。J60は、染付の碗。復元口径8.4㎝、底径3.4㎝器高4.9㎝。畳付は露胎で、外面には簡略化した雨降り文が描かれている。J61は、染付の瓶。復元底径6.8㎝、復元最大径11、7㎝。

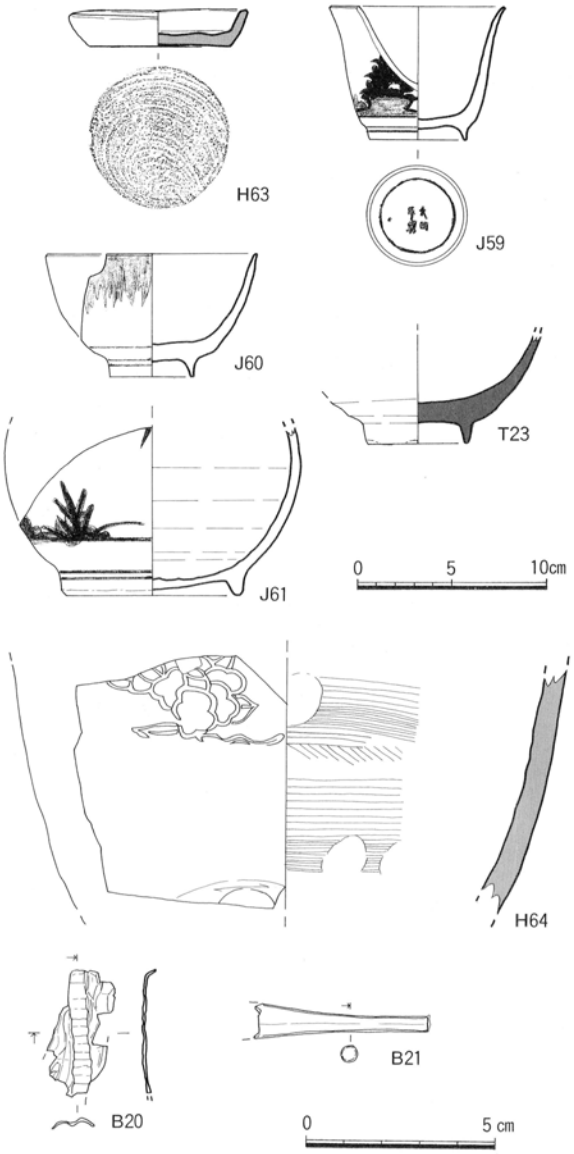
陶　器　T23は、底径4.0㎝の碗。畳付は露胎。胎土は明褐色で、この上に灰白色の釉で、縞模様を描いている。

瓦質土器　H64は、火鉢か。黒灰色を呈し、外面には花文のスタンプがある。胴部下端には、脚を付けたような痕跡が認められる。

金属器　B20は、青銅製品。一部に金箔が残っており、刀装具か。B21は、青銅製の煙管吸い口部。



84　SE04井戸実測図（縮尺1/30）



85　遺物実測図（縮尺1/3）

86　遺物実測図（縮尺1/2・1/3）

3．その他の遺構の遺物

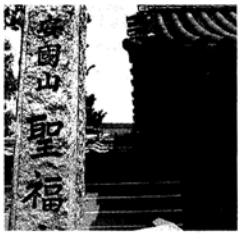
ここでは、溝、ピット、包含層、トレンチから出土した遺物について説明を加える。出土した遺構番号を、遺物番号に併記している。

磁　器　J62は、染付の碗。薄手の作りで、釉は風化のためか、がさがさした手触りとなっている。口径不明。J63は、染付の碗。復元口径10.4㎝。外面には、口縁部に渦巻き文の帯を巡らし、胴部には笹文を描く。発色は、深緑色となっている。J64は、白磁の瓶。胴部の最大径は、17.8㎝。内外面に黄白色の釉をかけており、貫入がある。全体的に黒ずみ、外面は、釉が剝げ落ちていることから、火熱を受けたか。

金属器　B22は、鉄製の鎹である。大きさは、12.4㎝×4.3㎝で、断面は長方形である。先端は、やや外に開いている。

磁　器　J65～71は、SP９から出土した。J65は、白磁皿。口径12.0㎝、底径6.4㎝、器高3.3㎝。型押しで、口縁部は輪花、胴部は花弁状の凹凸がある。J66～71は、蓋、漏斗、身の３部材からなる痰壺と判断した。J66は、摘みのある蓋。口径7.8㎝、摘みまでの高さ3.0㎝。J67かJ71とセットになる可能性がある。

J67は、取っ手のついた円柱状のカップである。口径9.0㎝、底径7.2㎝、器高は7.5㎝である。淡い灰白色を呈し、高台だけでなく口縁端部も露胎になっていることからも、飲用には適さないことがわかる。J68は、漏斗形の器形で、J69とセットになると思われる。口縁部は、水平に小さく開いていることから、J66のような蓋はなかったので



あろう。J69は、口径12.4㎝、底径11.6㎝。器高9.3㎝。高台と口縁端部は、露胎。口縁部がわずかに開く円柱状で、底部は上げ底状となっている。取っ手はない。J70は、口径9.0㎝、器高3.8㎝の漏斗形で、中央の孔は、径2.6㎝である。口縁部は、直立し、厚く作られて段をなしている。これは、蓋受けと身にかけるためで、釉も削り取られている。J71は、復元口径8.4㎝、復元底径7.0㎝、器高は7.0㎝で、J67とほぼ同じ大きさのカップである。釉は、淡黄白色。高台と口縁端部は、露胎。取っ手の外面には、整形時に付いたと思われる細かな横線がある。

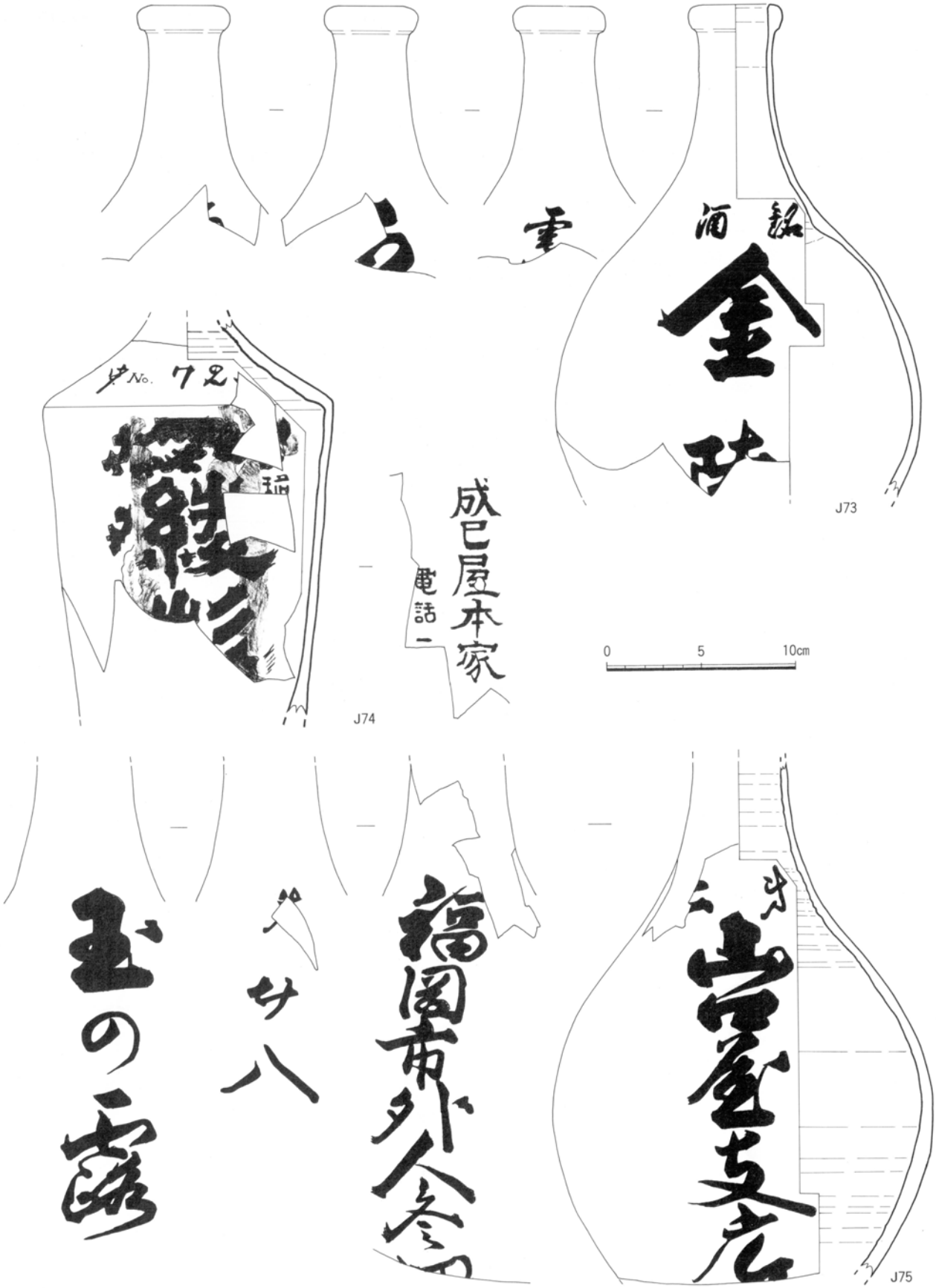
瓦　類　K14は、三巴文の軒丸瓦。瓦当径は、13.1㎝。巴文も珠文も、突出している。巴の頭部は、珠文のように大きく、尾との湾曲も強い。尾は細身であるが、短い。珠文は、12個。

ガラス製品　E18は、高さ16.4㎝のガラス瓶。胴部の断面形は、楕円形で、頸部から口縁部は円形となっている。口径3.4㎝。透明であるが、わずかに緑がかっており、気泡が多く見られる。口縁部は、小さく膨らんで段をなしている。

磁　器　J72～75は、SP 9 から出土した染付の通い徳利である。J72は、口径4.3㎝、底径9.1㎝、器高27.8㎝。外面には、「銘酒　清力」、「第百十□」、「川野酒店」、「博多中対馬小路四つ角」と書かれている。「清力」は、福岡県大川市にある明治 9 年(1876)創業の酒造会社の製品で、現在も生

87　通い徳利

88　遺物実測図（縮尺1/3）

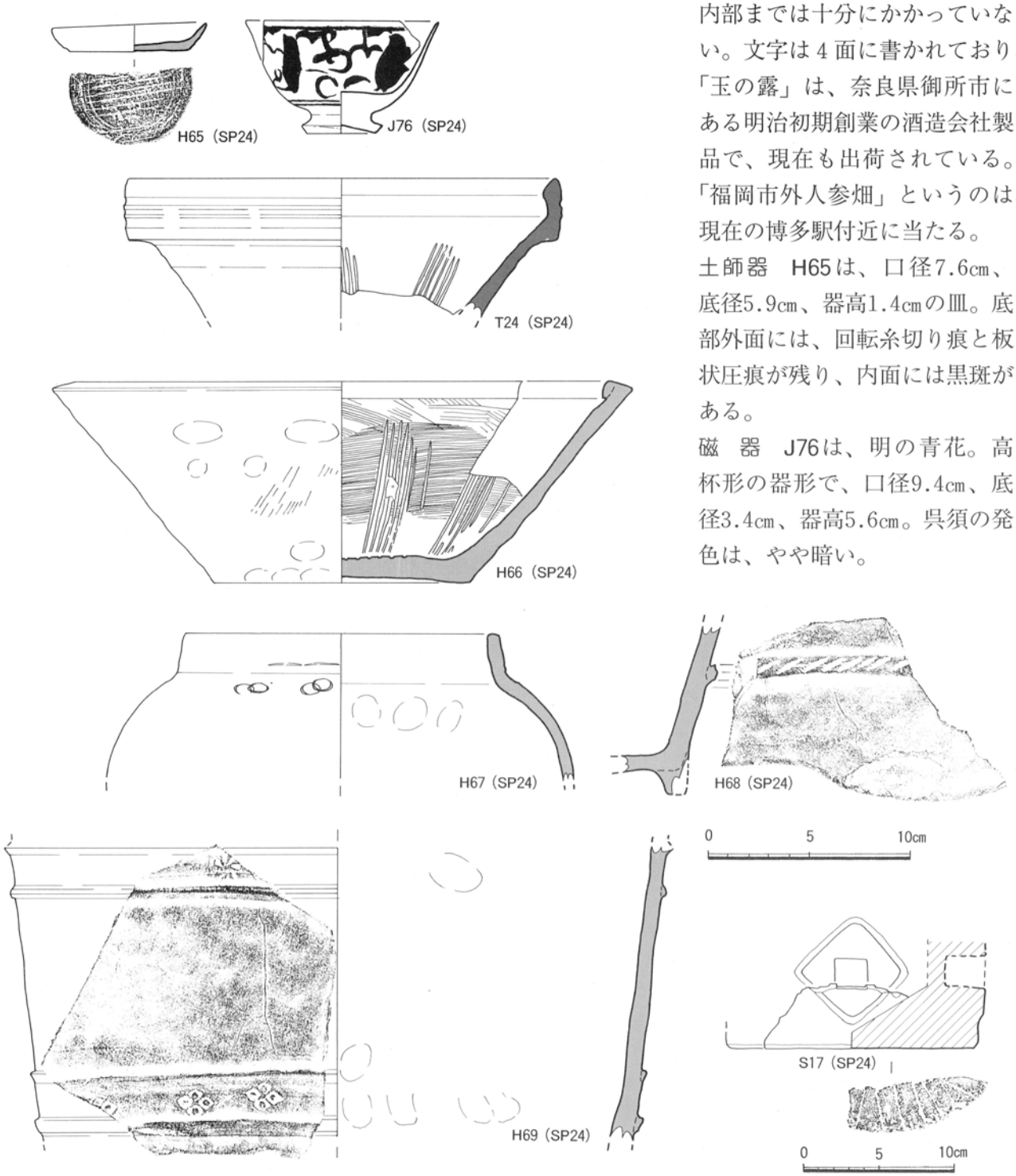


89　遺物実測図（縮尺1/3）

産されている。J73は、口径4.4㎝、胴部最大径21.0㎝。外面の四か所に文字が書かれているが、「銘酒　金陵」と「電」だけが読める。後者は電話番号の意味であろう。「金陵」は、香川県高松市の酒造会社の製品で、寛政元年（1789）創業。現在も作られている。J74は、肩の張る器形で、肩部径15.6㎝。胴部の前後には文字があり、前面肩部の「中」と「72」だけが、手書きである。「綾杉」は、宝暦10年（1760）に福岡城下橋口町（現在の中央区天神１丁目）で創業した綾杉酒造の製品である。昭和半ばになって福岡市南区に移転している。J75は、口縁部と底部を欠く。胴部最大径は20.1㎝。釉は、内部までは十分にかかっていない。文字は４面に書かれており、「玉の露」は、奈良県御所市にある明治初期創業の酒造会社製品で、現在も出荷されている。「福岡市外人参畑」というのは、現在の博多駅付近に当たる。

土師器　H65は、口径7.6㎝、底径5.9㎝、器高1.4㎝の皿。底部外面には、回転糸切り痕と板状圧痕が残り、内面には黒斑がある。

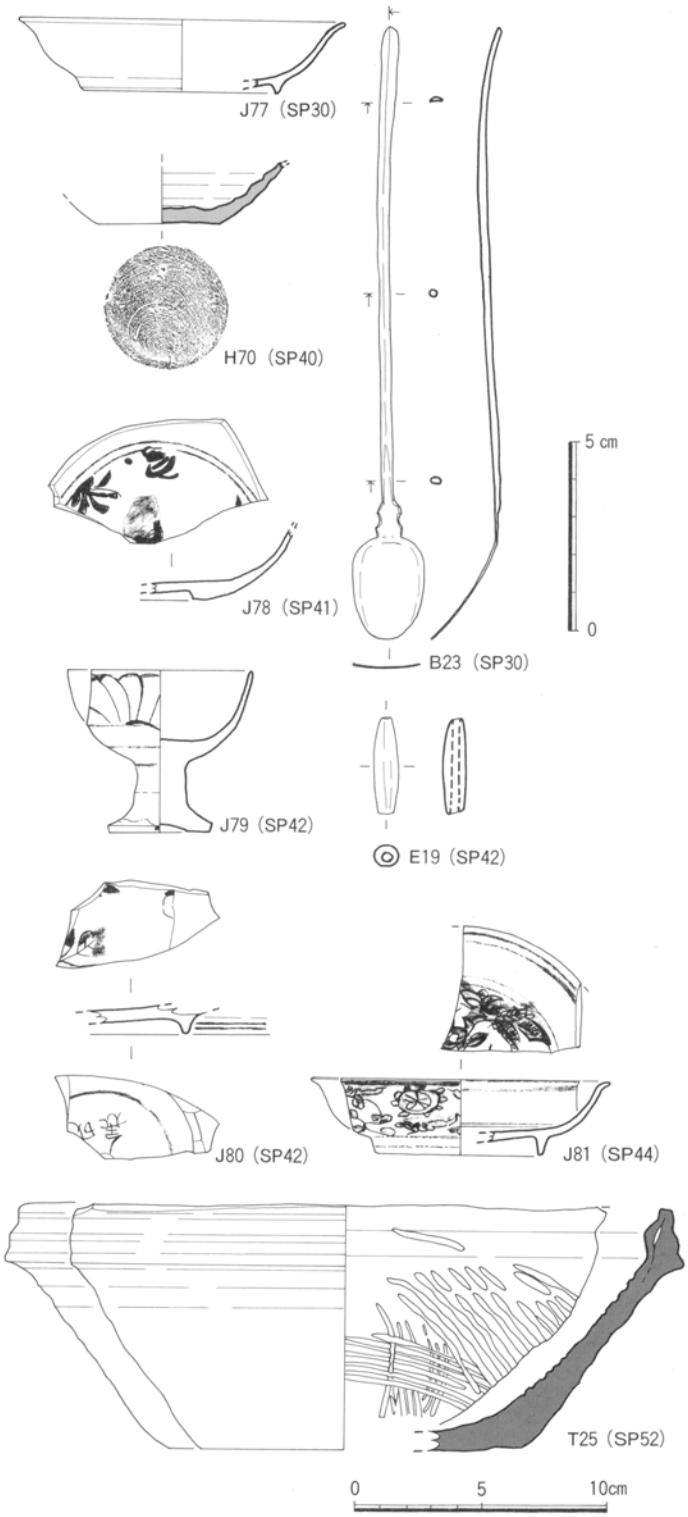
磁　器　J76は、明の青花。高杯形の器形で、口径9.4㎝、底径3.4㎝、器高5.6㎝。呉須の発色は、やや暗い。



90　遺物実測図（縮尺1/3･1/4）

陶　器　T24は、備前焼の擂鉢。口径21.2㎝、内面と口縁部は茶褐色、外面は暗灰色である。外面には、白灰色のものが斑点状に付着している。

瓦質土器　H66は、口径28.8㎝の摺り鉢。底径13.6㎝、器高10.0㎝。内面は、ハケ目調整で、底部付近は使用による摩滅が進んでいる。口縁部は横ナデ調整。外面はハケ目調整、指押さえ痕が残り、やや凹凸が目立つ。底部外面には、板状圧痕があり、胴下半部から底部は、火熱ではじけたような剝離をしている。H67は、口径15.6㎝の釜。外面は燻しで黒色となる。肩部には、２個１組の輪状スタンプ文と、工具らしい圧痕が残っている。H68は火鉢。内面は横ナデとヘラ磨き風の横ナデ調整。外面は、横ナデ調整。外面の凸帯には、斜めの刻み目を加えている。H69も火鉢。残存部の最大径は、33.0㎝。黒灰色を呈している。内外面とも、ナデ調整で、外面の上部凸帯の間には、菊花文、下部の凸帯の間には、四つ菱形文のスタンプが押されている。



91　遺物実測図（縮尺1/3）

石製品　S17は、茶臼の上臼。砂岩製で、復元径は、16.6㎝。胴部には、菱形の削り出しがあり、挽き手穴が開けられている。

磁　器　J77は、明の白磁碗。口径13.0㎝、底径8.0㎝、器高2.8㎝。畳付は露胎で、砂が少量付着している。

土師器　H70は、底径4.8㎝の灯明皿。底部は、回転糸切りで、体部内面の凹凸が目立つ。

磁　器　J78は、明の青花皿。碁笥底をなす。

金属器　B23は、青銅製の匙。全長16.3㎝、幅1.8㎝。きわめて薄い作りである。

磁　器　J79は、染付の仏飯器。口径7.3㎝、底径4.1㎝、器高6.4㎝。

土　錘　E19は、全長3.8㎝、最大径1.0㎝の土錘。孔径は、３㎜である。

磁　器　J80は、染付碗の底部破片。背の低い小さな高台には、外面に２条の線を描く。高台内の銘は、成、製の２文字が残るが、「大明成化年製」の６文字だったのだろう。J81は、明の青花皿。口径12.0㎝、底径6.8㎝、器高3.0㎝、内外面に草花文を描いている。

陶　器　T25は、備前焼の擂鉢。焼成時に口縁部は変形し、25.8㎝×27.0㎝の口径になっ

ている。底径14.0㎝。口縁部外面の段部には、重ね焼きの際に付いたと思われる土が残っている。内外面とも赤茶色を呈する。

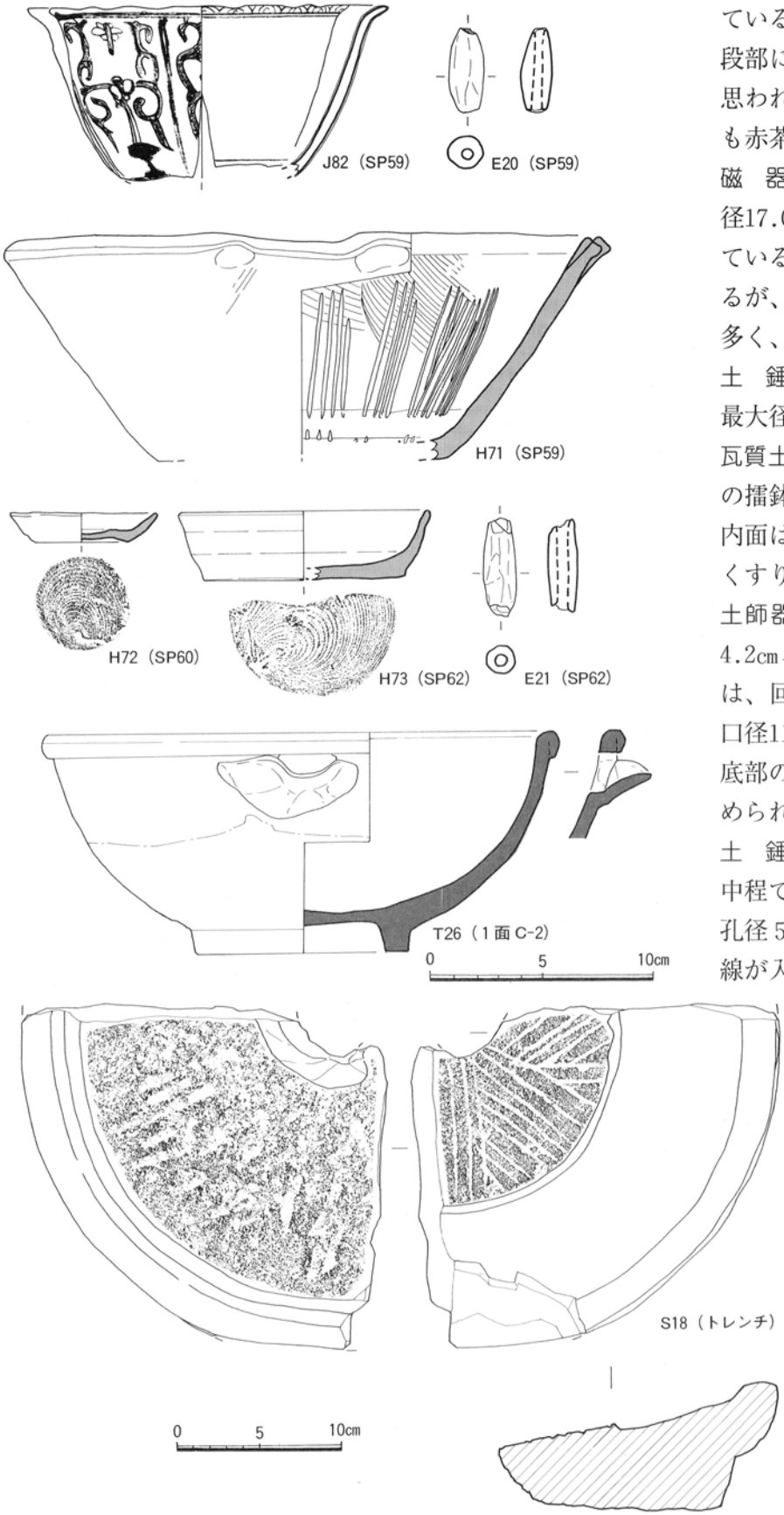
磁　器　J82は、染付の碗。復元口径17.0㎝、口縁部は、不規則に波打っている。釉は、全面にかけられているが、貫入があり、気孔もきわめて多く、粗雑な印象を受ける。明か。

土　錘　E20は、全長3.8㎝の土錘。最大径1.6㎝、孔径4.5㎜である。

瓦質土器　H71は、復元口径27.0㎝の擂鉢。底径13.0㎝、器高10.2㎝。内面は、長年の使用によってか、よくすり減っている。

土師器　H72は、口径6.6㎝、底径4.2㎝、器高1.4㎝の小皿。切り離しは、回転糸切り。H73は、灯明皿。口径11.4㎝、底径9.2㎝、器高3.2㎝。底部の回転糸切り痕の中に籾痕が認められる。

土　錘　E21は、全長4.4㎝の土錘。中程で膨らんでおり、最大径は1.3㎝。孔径５㎜。孔内には縦方向に数本の線が入る。



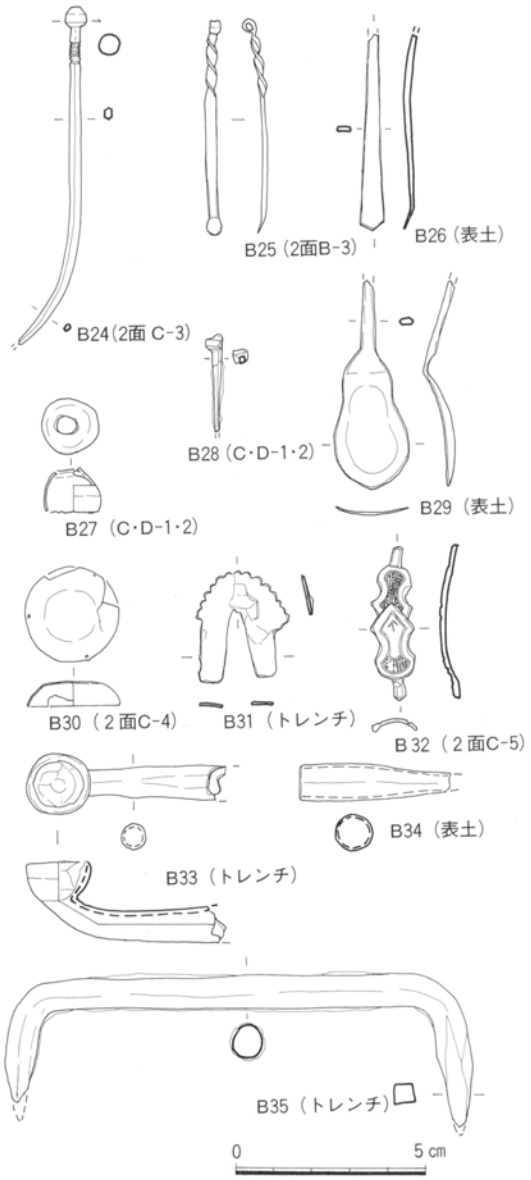
92　遺物実測図（縮尺1/3･1/4）

陶　器　T26は、口径23.2㎝の片口。底径9.7㎝、器高10.0㎝、高台、胴部下半から高台、口縁部端は、露胎となっている。釉は、外面が黒褐色、内面が茶褐色である。高台の削り出し、片口の貼り付けなど、素朴だが、堅実な作りである。

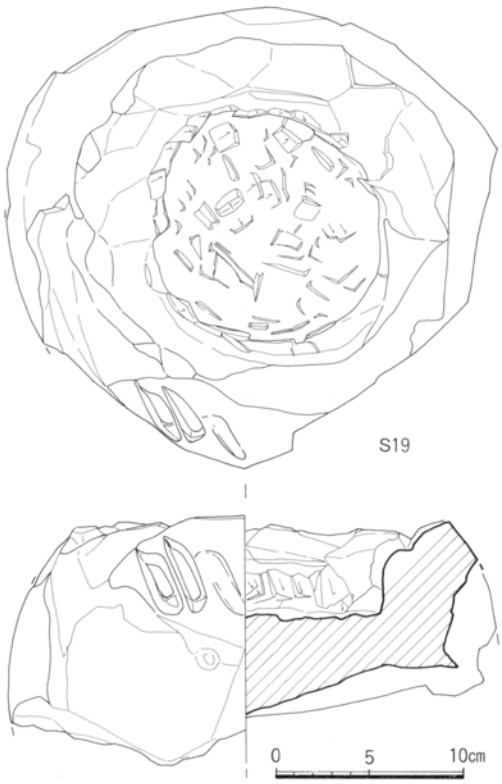
石製品　S18は、茶臼の下臼。砂岩製で、復元径40㎝、器高8.0㎝。目は、６分画８溝式であろう。こぼれ目らしきものがある。

金属器　B24は、断面形長６角形の細い棒状の作りで、全長9.0㎝。端に小珠が付き、もう一方は、曲がっている。耳かきか。B25は、図の下端の作りから、明らかに耳かきであろう。図上半のねじりは、滑り止めの工夫か。B26は、一端が匙状に曲がっているが、角張っており、用途不明。B27は、半球状の青銅製品。B28は、釘状の青銅製品。B29は、青銅製の匙。薄い作りで、瓢形をしている。B30は、皿形の青銅製品。B27と同じように被せて使用する飾り金具か。B31は、飾り金具と思われるが、使用部位は不明。B32も飾り金具で、金箔が残っている。B33は、煙管の雁首部。B34は、煙管の吸い口部で、青銅製。B35は鉄製の鎹。中央部の断面は、楕円形であるが、両端は、断面方形で、よく尖っている。

石製品　S19は、１面の遺構検出時に出土した。五輪塔の水輪か。上端部径20㎝、最大径30㎝前後、砂岩製で、外面には文字らしき彫り込みがあるが、判読できない、鑿痕が無数に残っていることからすると、製作途中の可能性もある。



93　遺物実測図（縮尺1/2）

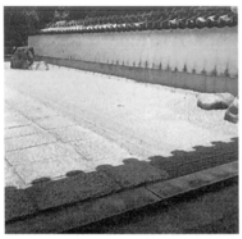


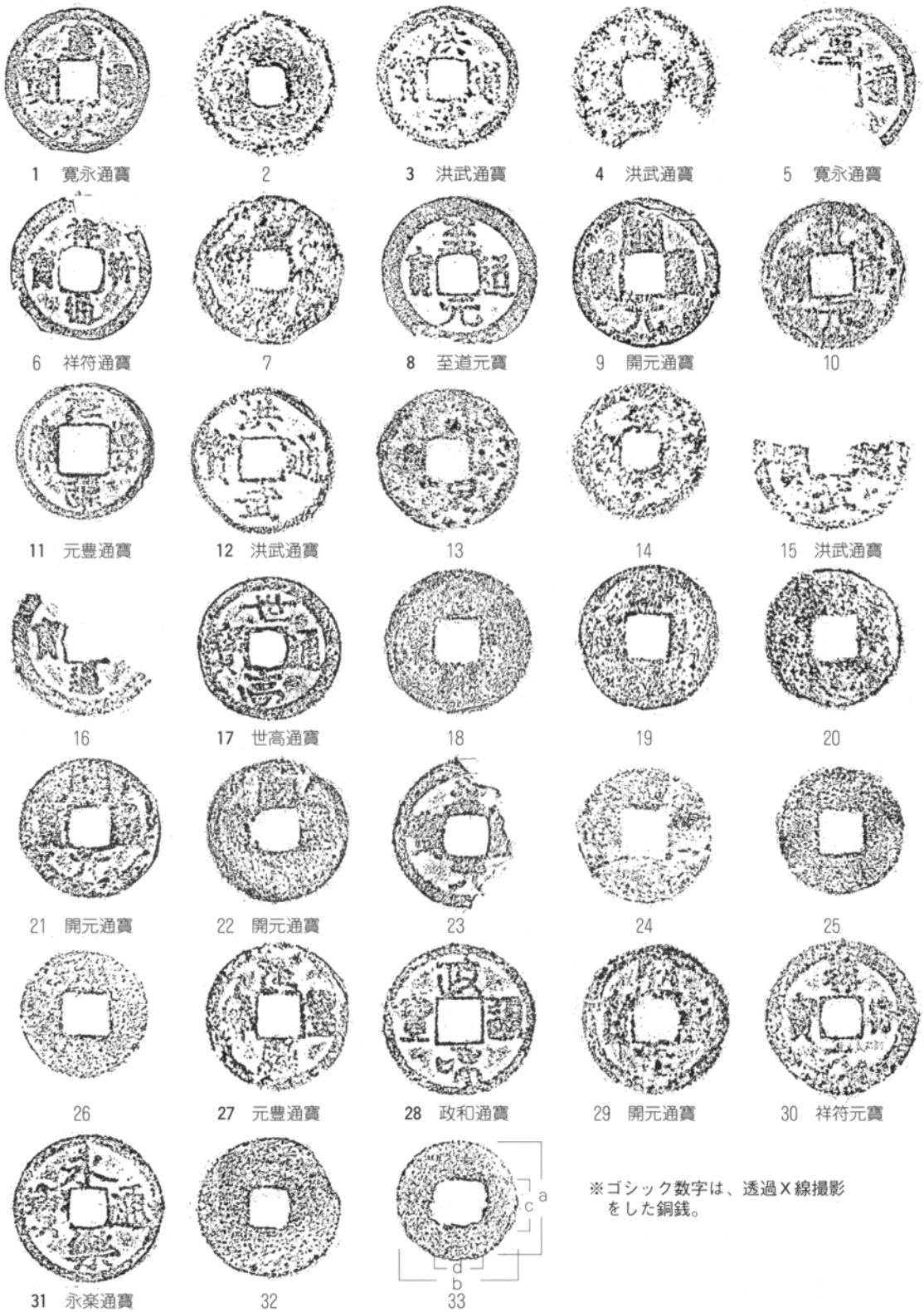
94　遺物実測図（縮尺1/4）

銅　銭　銅銭については、出土した各遺構ごとに図示し、簡単な説明をしたが、この他にも表土や包含層からも出土しており、また法量や初鋳年代など加えて、下のように一覧表を作成した。博多遺跡群として、枚数や種類などに特記するようなことはないが、琉球の「世高通寶」は、出土例としては、珍しい銅銭であろう。

出土銅銭一覧表（博多遺跡群第113次調査）ゴシック数字は、透過X線処理をした銅銭

No	遺物No	処理No	出土遺構グリッド	銭貨名(文字)	時代	初鋳年	西暦	外径		内径	
								a	b	c	d
1	1325	13904	SK08	寛永通寶	江戸	寛永13年	1636	23.50	23.80	18.95	19.10
2	1326	13908	SE02 井筒	文字なし				23.30	23.40	0.57	0.58
3	1327	13909	SE02 井筒	洪武通寶	明	洪武元年	1368	23.10	23.20	5.10	5.55
4	1328	13910	SE02 井筒	洪武通寶	明	洪武元年	1368		23.65	5.90	6.10
5	1329	13911	SE02 井筒	寛永通寶	江戸	寛永13年	1636	24.40		5.60	
6	1330	13912	SE02 井筒	祥符通寶	北宋	大中祥符元年	1009		23.00	6.45	6.65
7	1331	13913	SE03	□□□□				24.30	24.65	5.90	5.90
8	1332	13914	SX12 掘り方	至道元寶	北宋		995		25.10	5.80	5.80
9	1333	13915	SP17	開元通寶	唐	武徳４年	621	24.00	24.10	6.00	6.20
10	1334	13919	B.C-2,3 2面包含層	通寶	北宋	元年	1078	23.70	23.65	5.95	5.95
11	1335	13920	B.C-2,3 2面包含層	元豊通寶	北宋	元豊元年	1078	22.30	22.45	7.35	7.60
12	1336	13922	B.C-2,3 2面包含層	洪武通寶	明	洪武元年	1368	24.10	24.10	5.65	6.00
13	1337	13924	B.C-4　2面包含層	□□□□				23.00	23.00	6.10	6.10
14	1338	13925	B.C-4　2面包含層	□□□□				22.45	22.45	5.30	5.40
15	1339	13926	B.C-4　2面包含層	洪武通寶		洪武元年	1368		25.30		6.05
16	1340	13927	B.C-4　2面包含層	□□通寶				24.20			
17	1341	13928	C-4　2面包含層	世高通寶	琉球		1461	23.10	23.20	5.70	5.40
18	1342	13929	C-4　2面包含層	□□□□				23.60	23.60	6.60	6.60
19	1343	13930	C-4　2面包含層	□元□□				23.30	23.30	6.70	6.80
20	1344	13931	C-4　2面包含層	無文銭				22.80	22.70	7.05	7.05
21	1345	13932	C-4　2面包含層	開元通寶	唐	武徳４年	621	22.90	23.00	5.90	6.10
22	1346	13933	C-4　2面包含層	開元通寶	唐	武徳４年	621	23.60	23.70	6.55	7.35
23	1347	13934	C-4　2面包含層	□□元寶				24.00		6.10	6.40
24	1348	13935	C-5　2面包含層	無文銭				22.00	21.95	7.10	7.70
25	1349	13936	C-5　2面包含層	無文銭				20.20	20.70	6.60	6.65
26	1350	13937	C-5　2面包含層	無文銭				20.60	20.40	6.30	7.00
27	1351	13938	C.D-5　2面包含層	元豊通寶	北宋	元豊元年	1078	23.30	23.70	6.40	6.30
28	1352	13939	表　土	政和通寶	北宋	政和元年	1111	24.40	24.50	6.40	6.40
29	1353	13940	表　土	開元通寶	唐	武徳４年	621	24.40	24.25	6.85	6.85
30	1354	13941	表　土	祥符元寶	北宋	大中祥符元年	1009	25.10	25.10	5.90	6.10
31	1355	13942	表　土	永楽通寶	明	永楽元年	1408	23.70	24.20	5.60	5.30
32	1356	13943	表　土	□□□□				23.10	23.30	6.10	6.10
33	1357	13944	表　土	無文銭				17.50	19.40	7.15	7.95





※ゴシック数字は、透過X線撮影をした銅銭。

95　出土銅銭拓影（実大）

４．博多113次調査出土銅銭の透過Ｘ線撮影

片多雅樹　（福岡市埋蔵文化財センター）
比佐陽一郎（　　同上　　）

１．はじめに

出土遺物を保存処理する際、事前に理化学的調査を行うことは不可欠である。福岡市埋蔵文化財センターは４月に増改築工事を終え、リニューアルオープンを果たし、収蔵庫の増設、保存処理施設も大規模に新設され、遺物の事前調査を行うための分析機器も充実している。今回は博多113次調査地区にて出土した金属遺物に関して、銅銭を中心に透過X線観察を行ったので、ここにその成果を報告する。医療分野では広く知られている透過Ｘ線であるが、埋蔵文化財の分野でも、Ｘ線の発見後わずか40年後の1935年に、大阪府高槻市阿武山古墳において、夾紵（きょうちょ）棺内の調査に利用されている。その結果はその後50年を経たフィルムの再調査によって、被葬者解明の手掛かりを得るなど大きな成果を上げている。透過Ｘ線撮影の成果が大きく世間の注目を浴びたのは、1978年の埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣に残された、115文字に及ぶ金象嵌による銘文の発見である。その後文化財の分野に普及が進み、錆に覆われた金属器の原形調査や絵画・仏像の調査などに幅広く活用されている。

２．透過Ｘ線撮影装置の原理と概要

透過Ｘ線観察とは試料にＸ線を照射し、透過の度合いによって内部の観察をおこなう装置（いわゆるレントゲン）で、肉眼では見ることのできない内部構造などの情報を得るのに用いられる。X線は可視光線に比べて非常に波長の短い（エネルギーの大きい）電磁波の一種である。物質にＸ線が照射されると、反射・吸収・透過という現象が起こる（図１）。密度が高ければ高いほど、厚みがあればあるほどX線の吸収率は高い。それらの構造的な差異をテレビカメラ、フィルムなどで測定し透過像を得る。装置の概念図を図２に示す。下から上向きにＸ線を照射する。照射されたＸ線は資料台上の検査対象物を透過し、蛍光板に達する。蛍光板はＸ線のエネルギーに反応し蛍光を発する。Ｉ．Ｉ．（イメージ･インテンシファイア）システムにより、Ｘ線強度を電気信号に変えて、テレビモニターでリアルタイムに観察[1]し、プリンタで出力、MOディスクに記録保存することができる。

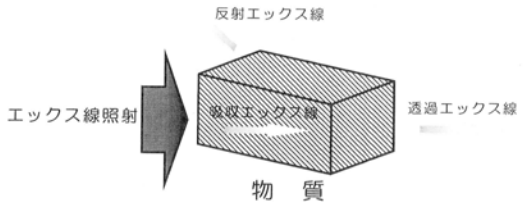


図１　Ｘ線の性質

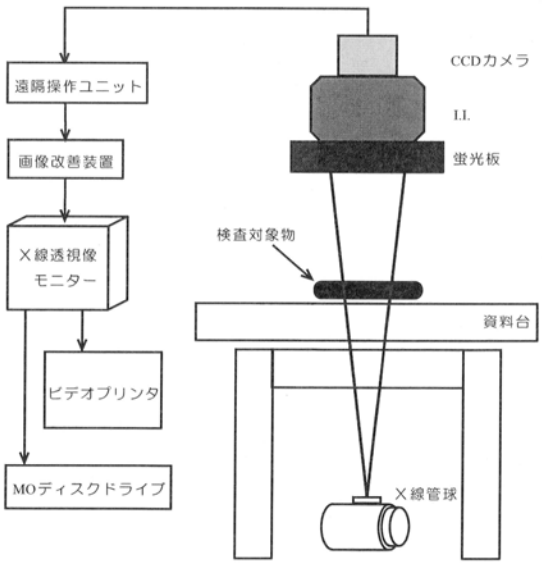


図２　装置概念図

＜仕　　様＞

装　置　　：日本フィリップス MG226/2.25
管電圧　　：10～226kV
管電流　　：0～10mA
焦点寸法　：0.6/2.0mm（二重焦点）

検出器形式：X線蛍光増倍管（I.I.：イメージインテンシファイア）
入力視野　：約22cm直径
撮影解像度：40万画素CCDカメラ

3．結果と考察

錆と砂に覆われた出土銅銭（数字は遺物処理番号）と、調査結果（読みとれた文字）を図3に示す。

調査の結果、錆や埋土に覆われ、肉眼では文字の判読が不可能であった資料でも、透過X線により鮮明に文字の解読が行えた。ただし、今回は掲載していないが、腐蝕により銭本体が極端に脆弱化している場合には、腐蝕生成物と本体に透過度の差が少なくなるため、判読は困難なものもあった。このような資料は、今後のクリーニング作業に注意を要することを示しており、これはこれで事前調査機器としての本来の役割を果たす結果となった。いずれにせよ、腐蝕の状況にもよるが、透過X線による調査が出土銭貨の判読に、ある程度有効である事が確認されたといえよう。

では、なぜ文字が浮かび上がるのか。錆で文字や文様が見えないものの多くは、錆ぶくれや錆汁による砂等の付着によって表面が覆われている。錆の多くは金属が酸化したものであり、元の金属よりも密度は低い[2)]。また付着した砂は鉄分を含むことはあるが、主成分はケイ素であるため、X線を容易に透過させる。よってメタル（オリジナルの金属部分）の文様の凹凸による厚みの差が、X線透過率に大きく起因し、コントラストとして情報が得られるわけである。

出土銭貨が、中世社会の経済や流通・交易活動を知る上で、重要な資料であることは、いまさら述べるまでもない。これらは大量埋納など特殊な場合以外でも、中世都市の発掘調査では一地点から多量に出土する場合が少なくなく、その情報処理には莫大な労力を有する。これまで当センターには最も基本的な事前調査機器である透過X線撮影装置がなく、これら出土銭貨の判読は、1点ずつのクリーニングや、錆取り作業を待つ意外に方法がなかった。今回の成果は、本市における銭貨調査の新たな方法となり得るものであり、この方法が今後の銭貨研究、更には中世社会の解明に有意義な成果をもたらすことを期待したい。

註

1）当法で得られる画像は、従来のX線フィルムを用いた画像とは、濃淡逆になる。つまり、X線が強く照射された箇所が黒く感光するX線フィルムに対して、I.I.は蛍光を発して白く明るく映る。

2）例　鉄：d（密度）＝7.87g/cm³　＞　鉄サビ（酸化鉄）：d＝5.7g/cm³
　　青銅（銅70％、錫25％、鉛5％の場合）：d＝8.63g/cm³　＞　銅サビ（緑青）：d＝4.0g/cm³

参考文献

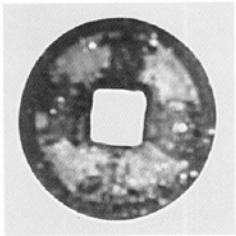
田口勇・齋藤努 1995　『考古資料分析法』考古学ライブラリー65　ニュー・サイエンス社
太田保　　1982　『東洋古銭価格図譜』万国貨幣洋行

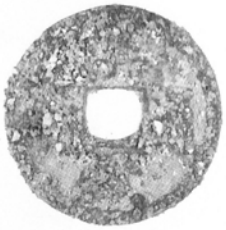
謝辞

本稿作成に当たって、調査・報告の場を与えていただいた埋蔵文化財課力武卓治氏、並びに福岡市埋蔵文化財課調査員北村幸子氏には大変お世話になった。ここに記してお礼申し上げます。

4．結果

No.1　13904


寛永通寶

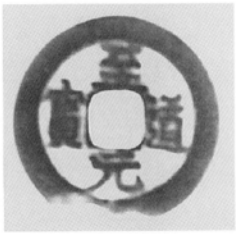

No.3　13909

洪武通寶

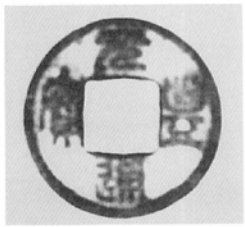
No.4　13910

洪武通寶

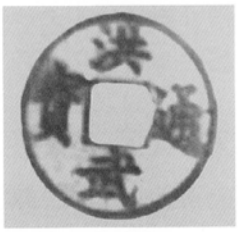
No.8　13914


至元通寶

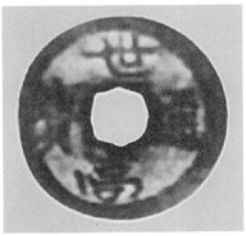
No.11　13920


元豊通寶

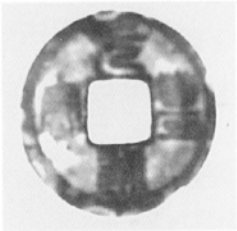
No.12　13922


洪武通寶

No.17　13928


世高通寶

No.27　13938


元豊通寶

No.28　13939

政和通寶

No.31　13942

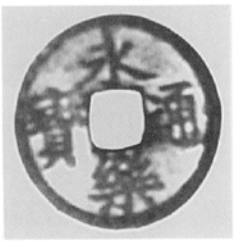

永樂通寶

図３　出土銅銭と透過X線撮影結果（数字は保存処理番号を示す）

第３章　小　　結

これまで検出した遺構とその出土遺物について記してきたが、その時期や性格などについては、十分な考察ができなかった。ここでは、若干の補足を加えて、まとめとする。

今回の調査で検出した主な遺構は、土壙と井戸、そして大小のピットである。土壙は、その構造から、石積土壙と素掘り土壙に分けた。素掘り土壙は、さらに埋まっている遺物によって瓦溜め土壙や動物骨・貝殻土壙などのように呼び分けた。土壙名は、その機能、用途を明らかにして名前を付けるべきであるが、石積土壙のように、まだ機能、用途を確定できない現状では、不統一な用語とならざるをえない。今回の調査区では、244㎡という狭い面積ながら、計25基の石積土壙が現れたことから、その性格の解明に迫ろうと慎重な発掘を行った。しかしながら、収納庫、便所、溜め枡など従来の推定案を結論づけるような決め手をつかむことができなかった。ただ、25基の石積遺構の配置から、町筋や町家一戸における敷地の空間利用が想像できた。また切り合いや、上下層に重なるものもあることから、時間的な幅や構造の変遷を知ることができた。地味であるがこれらの所見を積み重ねることによって、石積土壙がどのような目的で築かれ、またどのように使用されたかが明らかになるだろう。

25基の石積土壙の並びや配置を、もう一度見てみよう。先述したように調査区の長軸に沿って東西２列に並んでいる。切り合って原形を留めていないと思われるものが数基あるが、ある一定の間隔を置いて整然と構築されているのが分かる。一戸の町家に石積土壙が何基備わっていたのか、あるいはすべての町家に必ずあった施設なのか明らかでないが、２列にきれいに並んだ様子からすると、各戸ごとに備わっていたかのような配置である。もちろん25基が同時に使用されていたとは考えがたいが、各石積土壙の間隔から、町家の間口を推定できるかも知れない。もし１戸に１基ということであれば、逆に１基で事足りる便所など、その機能や用途を特定できるであろう。ところで、２列の石積土壙の間に、動物骨・貝殻土壙だけでなく、イルカの骨が投げ捨てたような状況で散乱していた。さらに五輪塔の一部が出土したり、またこの他の主な遺構が見られないことなどから、２列の石積土壙と直交するように町家があり、その裏庭に石積み遺構があった。つまり裏庭を向き合わせて短冊状に町家が建ち並んでいたと想定した。裏庭には、ゴミ穴もあり、信仰の場でもあったと。もちろん肝心な町家の母屋を確認したわけではないので、想像の域を出ないが、これらの石積土壙は、少なくとも無計画に構築し、使用されたものではなさそうである。相当な規制を受けた、いわば都市計画的な結果と思われる。

次に問題になるのは、構築時期と使用期間である。２列の方向は、磁北より34度前後西に振れている。戦国時代末期1587年の「太閤町割り」の姿を留めているという現在の太博通りや町筋の方向と、ほぼ一致、平行していることから、「太閤町割り」後に構築され、営まれたと推測した。次の表は、石積土壙の出土遺物から推定される各石積土壙の下限時期である。もっとも新しい遺物から、各石積土壙のおおよその下限時期を推定した。上限時期は、古い遺物が混入している場合があるので、省略している。このため各石積土壙の、使用期間は示していないが、ほとんどの石積土壙が、17世紀前後から18世紀の中に収まり、先の推定時期と矛盾しない。25基のうちもっとも古いのは、２面で検出したSX24石積土壙である。１面で２列に並ぶ石積土壙と比べると、主軸方向が異なり、平面形もいびつである。図示したT13は、粗雑な削り出しの蛇の目高台をもつ碗で、その器形や作りから16世紀後半代の朝鮮製と考えられる。明らかに「太閤町割り」直前の遺構とすることができよう。本調査地点が位置する「息の浜」砂丘は、中世の12、13世紀頃に「博多浜」の砂丘とつながり、それ以降博多が拡大してきたと考えられているが、「太閤町割り」以前の区画については、まだ調査例が少なく、「息の浜」の中

央部と東部では、町並方向が異なっていた可能性があるという。SX24石積土壙１基だけで、当時の町並方向に言及できるわけではないが、重要な遺構の一つになろう。

石積土壙以上に生活に欠かせないのが井戸である。井戸の配置でも、町筋や町家敷地内の空間利用の状況がつかめると思われるが、今回検出した4基の井戸は、石積土壙の列に並んではいるものの、強い規格性はない。ここでは井筒に用いられている井戸瓦についてのみ触れる。SE01とSE03は、井筒に瓦を用いている。この瓦は、井戸専用に製作されたもので、屋根、塀、壁などの瓦と区別するために、「井戸瓦」と呼んでいる。博多遺跡群では、近世以降普通に見られるもので、上水道が普及してからも、それにコンクリートの蓋をして、最近まで使用されていた。博多遺跡群のような砂丘では、崩壊しやすく最も不向きな井筒と考えがちだが、それを克服する構築方法や技術が考案されていたのであろう。

遺構の時期（主に下限時期を示す）

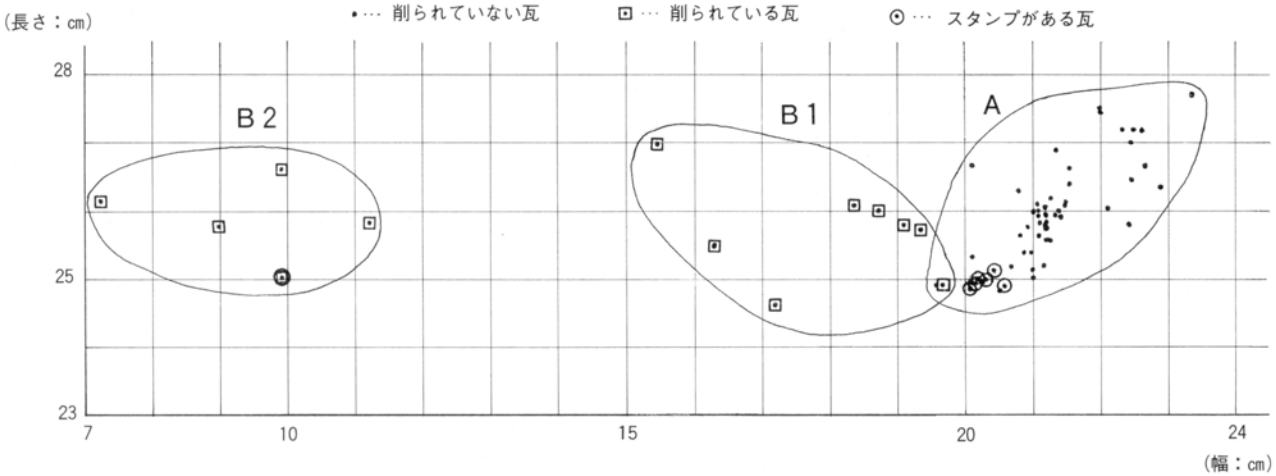
遺構番号	1500年代 前半	1500年代 後半	1600年代 前半	1600年代 後半	1700年代 前半	1700年代 後半	1800年代 前半	1800年代 後半	1900年代 前半	1900年代 後半
SX 1					―	・・				
2		―	・・							
3				・・	―	―				
4		―	・・							
5			―	―	・・					
6						―				
7			―							
8			―							
9			―	・・						
10			・・	―	・・					
11	・・	―								
12				―						
13				―	・・					
14				・・	―					
15		―	―	・・						
16			・・	―						
17				・・	―					
18										
19										
20		―	・・							
21										
22										
23										
24	・・	―								
25										
SK 4			―	・・						
8							―	・・		
27						―	―	・・		
SE 1						―	―	・・		
2					―					
3						―	・・			
4					―	・・				
SP 9								―	―	

SE01については、安全作業を優先したので底部まで完掘したわけではないが、取り上げた120枚のすべてについて、細かく観察し、法量を計測した。図は、瓦の長さを縦軸に、幅を横軸にとった度数分布図である。この図をもとに、側面の削りの有無でA類とB類に二分し、さらにB類は、削られた幅で１、２類に細分した。

Ａ　類　側面の削りがなく、幅は20㎝以上。　107枚。
Ｂ1類　側面を削り、幅15㎝～20㎝未満。　８枚。
Ｂ2類　側面を削り、幅12㎝以下。　５枚。

９割を占めるA類の瓦は、井筒の直径を想定し、その円周から井戸瓦のカーブを割り出し、枚数を決めて製作した規格品と思われる。それを示すのが、小口側に直径0.96㎝程の円形スタンプを押した瓦である。合計７枚あり、うち１枚は削られたB類の瓦であるが、他の６枚は、長さ、幅ともにきわめて近似しており、最大、最小値の差は、わずか３～４㎜に収まる。おそらく窯場や職人の印というだけでなく、段ごとの枚数や一組を示すものと思われる。しかし、１～４段と10段目だけにあり、各段ごとに見られるものではない。またA類の平均法量は、長さ25.846㎝、幅21.179㎝で、法量の最大、最小値には、３～４㎝もあり、規格品としては失格であろう。SE04のように井戸瓦が、完全に抜き取られた例があることからすると、再利用の頻度が高く、結果的にさまざまな規格品が集まり、混在

井戸瓦の大きさ



したようである。その結果、積み上げの基本枚数は、１段12枚であるが、５段目が13枚、６段目は11枚と、段によって枚数が異なることになったのであろう。それでも径が調整できない時に、B類の瓦が用意された。B類の瓦は、各段に１、２枚組み込まれており、A類の瓦で、ぴったり埋まらない隙間を埋めるのが目的である。高ささえ合えば、そのカーブは、幅を削ることによって、あまり問題にならなかったのであろう。このように、井戸瓦自体は、井筒専用の規格品として考案、生産されたものの、再利用を優先し、かつ井戸掘り職人の腕に任せた製品だったということができるだろう。このほかにも重要な遺物は多い。青銅製品の鋳造に使われた坩堝は、福岡市内では初出土の器形で、旧町名「鏡町」の由来と関係する可能性があり、興味深い。また琉球銭は１枚だが、中継ぎ貿易という博多の国際貿易の実態を伺うことができる資料である。それ以上に、ごく普通の遺物こそ、今回の調査の最大の成果である。食器、調理具、神・仏具、化粧具、灯火具、暖房具、遊具、そして喫煙具や飲酒具などから、博多商人や職人、子供たちやおかみさん達の一日一日の生活が、より具体的に想像できるからである。十能や七輪、火鉢からは、寒い朝、ふとんから抜け出し、朝餉の用意にとりかかるおかみさんの姿が浮かんでくる。七輪の火を起こす破れ団扇の音。近所からも博多湾の新鮮な魚を焼く臭いがする。石臼で挽いた豆の粉からは、どんな料理ができあがるのだろうか。忘れずに神棚や仏前に水や炊きあがったご飯を供えて一日が始まる。もしかしたら、長患いの老人が床に伏しているかも知れない。銅製の匙で、飲み薬を調合し、土瓶で薬草を煎じたのだろう。さっきまで騒々しかった子供たちの元気な遊び声も、表通りを行き交う商人や荷揚品を運ぶ馬車の車輪のきしみも、いつの間にか静かになった。灯明皿の光りが揺れるころ、鋳物師の主人が帰ってくる。灯明油の一滴でも倹約するような質素な生活だが、働き者で酒好きの主人のために、時には銚子１本が膳に付く。生活は決して楽ではないが、心満ち足りた一日がこのようにして終わる。

調査報告書は、事実に即して記述するものであって、根拠のない、非科学的な想像が許されるわけではない。しかしながら発掘調査によって検出する遺構も遺物も、人間の行動の結果として存在している。上の想像のように、遺構や遺物を残した人間を、生き生きと蘇らせるのが、調査報告書の重要な命題であろう。本書は、遺構や遺物の法量や形状の記述だけに終始し、ここに暮らしていた人間や思いに触れていない。人間ではなく、遺構と遺物だけを発掘したにすぎないという意味で、調査担当者としての責任を感じ、大いに恥じている。

博　多　73

博多遺跡群第113次調査の概要
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第631集
2000年（平成12年）3月31日

発　行　　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
電話　092-711-4667
印　刷　　有限会社筑紫印刷
福岡市東区社領3丁目8番7号
電話　092-624-7331